

第8章 栄光と失意

—都

■次韻趙令鑠

げんぼう
元豊8 (1085) 年12月、蘇軾50歳。

12月上旬、蘇軾は都に到着。都での日々はこれから約4年間にわたる。遑れば、都において改革を正面切って批判するほとんど最後の1人となった蘇軾が杭州副知事として出て行ったのが14年前。その後、密州知事の任を終えてから都に入ろうとしたものの、門の外で止められたのが8年前。そして、6年前の秋から冬にかけて、都にいたことはいたのだが、そのときは獄中に置かれた。かくて、長年の苦難を乗り越え、凱旋將軍であるかのようにして蘇軾は都に戻った。都に着くやいなや、蘇軾の帰還を待っていた大勢の人と矢継ぎ早に詩の贈答を繰り返すことになる。

(当時の政治情勢についてごく簡単に触れておく。王安石と神宗皇帝によって始められた改革政治を堅持しようとする改革派(後世の用語で「新法党」という)として蔡確(宰相)、韓縝(宰相)、章惇(副宰相)らがいて、高太皇太后によって召された保守派(「旧法党」として司馬光(副宰相)、呂公著(副宰相)らがいて、両者が主導権争いをしていた。特に章惇は司馬光をマークして激しい個人攻撃を加えていた。そのころの様子

を『宋史』の蘇軾伝は以下のように記している。

蘇軾はもともと司馬光し ば こうとも章惇しょう ちんとも親しくしていた。このとき司馬光は門下侍郎(副宰相に相当)で章惇は知樞密院(副宰相に相当)で、二人は相容れない関係にあり、章惇はいつも司馬光を侮ったり皮肉な言葉を投げかけたりしていた。司馬光はそれに苦しめられ、蘇軾に助けを求めた。

蘇軾は章惇に会うとこのように言った。

「司馬光殿はいま世の中の人々からはなはだ重く見られています。昔、許靖きよせいに対して、蜀しよくの劉備りゅうびは『実態のない虚名でしかない』と、見下した態度をとりました。そのときに、法正ほうせいは劉備に言いました。『許靖は浮ついた誉れではあっても、そのことが世間に広く知られています。もし許靖を礼遇しなければ、天下の人々はあなたさまは賢者をないがしろにしていると見て、よくないことになりましょう』。劉備はその忠告を入れ、許靖を高い地位に就けました。許靖であっても侮蔑してはいけなかったのです、まして司馬光殿はどうなのでしょうか。」

章惇はその通りだと受け止め、司馬光はそれから少し安心してできるようになった。

(蘇軾が引いたのは、三国時代の劉備が蜀の地を手に入れた直後の出来事。許靖は蜀の前の主人に仕えて、賢者として評判が高かった。しかし、前の主人を見限って劉備のもとに投降しようとしたことから、劉備は不誠実であるとして許靖を用いようとしなかった。劉備の参謀を務める法正は、蜀の統治を始めるに当たって賢者を重んじる姿勢を示すべきだと劉備に助言したのである)

このエピソードは蘇軾の姿勢を象徴的に示すものと見てもよいであろう。改革派と保守派の権力抗争は高太皇太后の強力な後押しを受けた保守派が勝利をおさめ、翌年に

なると改革派の主力メンバーは 1 人残らず都から追放され、司馬光が宰相になり、王安石が考案した新法は次々に廃止されるようになる。蘇軾は司馬光とは少しばかり考え方が異なり、実効性がすでに証明されている新法は廃止する必要はないし、急な制度変更は社会に混乱をもたらすとして、実情に応じて柔軟に政策を選択することを主張しのだが、流れは白か黒かをはっきりさせる方向で加速し、蘇軾の立場は次第に難しくなっていく。こうした政治的な抗争の中で蘇軾がどのような発言をしたのか、あるいは蘇軾が朝廷の要職に就いたことでどのような公的な文書を記したのかといったことは、訳者の興味を引くものではないので、触れるとしてもごく一部に留める)

蘇軾が都に来て最初に見るこの詩は趙令鑠ちやうれいしやく（字は伯堅あざな はくけん）の詩に次韻したもの。趙令鑠は保守派の官人である。

六年のあいだ、私は東の坡おかで豊作の報せを聞いていた。

いま取じらうのは、白髪頭しら が あたまになって都の紅塵こうじんの中でのこのこ出てきたこと。

いまも、枕につくときに田舎の谷や山を夢に見る、

しかし、我が門前には、早くも公務の使いが続々と訪れる。

かねてからの年少の友(趙令鑠ちやうれいしやく)は、まことに瓊たまのように美しい樹きといってよく、

筆を執ると、文字から風が生じて垣根がそよぐほどである。

礼部郎れいぶろうとなった私の仕事ぶりを貴君が見ようと思ったならば、

甕かめの間を探してみるのがよいのかも知れない。

晋の時代に吏部郎となった畢卓が、

酒の匂いにつられて隣家に忍び込み、甕の脇で酔いつぶれてしまったように、
私は老いてもっばら酔いの境地こそが郷里だと思っているのだから。

(1) 趙令鑠は神宗皇帝と同年、同月、同日、同時の生まれであったとする言い伝えがあり、だとすると38歳で、確かに「年少の友」である。(2) 蘇軾はこの詩にあるように札部郎中として都に召され、たちまち昇進する)

■次韻趙令鑠惠酒

上の詩に見た趙令鑠が酒を贈ってくれ、それに詩が添えてあったので、
次韻して返した。

神山は、五百年に一度だけ大地を開いて石髓を現わし、

それを食らうと寿命が天と同じになるという。

石髓がない限りは、我らは悲しいことに、

生まれてしばし世に寓するだけの身なのである。

あるいは、玉醴泉の水が流れてくるのを座って待って汲むと、

千年もわずか一日のような長寿が得られるという。

そのようなものよりも、「青州従事」(極上の酒の代表)があればよい、

ただし、普段から町で買い求めているのは安酒ばかりで、

さすがに「平原督郵」(下劣な酒の代表)ばかりは御免蒙りたいと、

とかく面白くない思っていると、

貴君はそれを知ったのか、

有難いことに「従事」の顔を拝ませてくださった。

自分で^{さかずき}盞を洗い自分で^{かめ}瓶を開いて、

できれば、^{さかな}肴があつて、誰か相手をしてくれる者がいないものかと思っていたら、

貴君はまたしてもそれを知ったのか、

門を^{こつこつ}剝啄と叩く音がして、

なんと、煮た魚が届き、その腹の中に手紙があった。

(最後は、鯉を煮たところ、腹の中から手紙が出てきたという伝説に基づいて、^{ちょうれい}趙令

^{しゃく}鑠の詩をその手紙になぞらえたのである)

■次韻王定国得穎倅

蘇軾が朝廷に帰還したのと同じころに、^{おうきょう}王鞏 (^{あざな}字は定国) (第7章 87 ページなど) は^{えい}穎州の^{そつ}倅 (副知事) に任命された。蘇軾に連座して遠く流された王鞏も、政権交代に伴い官員としてのエリートコースを歩み始めることになった。穎州は、^{おうようしゅう}歐陽脩が隱棲の場として選んだところで、かつて蘇軾は^{こう}杭州副知事として赴任する前に弟とともに訪ねていた (第3章 117 ページ)。2 首のうちの 1 首を訳す。

其の一

仙界の風が貴君の骨にまで入り込んだのたろう、

すでに雲を凌ぐばかりの気概しが具わっている。

貴君の文章は秋の水のように清らかで、

塵一つ受けることがない。

貴君が一声発すると、

大地が呼応して、その余波が天の神の帯をも震わせる。

鼠を射るのに大弓を引くまでもないとの喩えたとの通りに、

あちらに赴任したなら実直に仕事に励むのがよろしかろう。

それと、百花潭ひゃくかたんには行かないほうがよいであろう。

酔翁すいおう おうようしゅう(欧陽脩)はもはやおられないのだから、

貴君が親しめる相手はそこにはいないのだ。

((1) 前半は王翬おうきゅうをやたらと褒めているが、後半でさりりと訓戒を垂れている。「実直に仕事に励め」と訳した原文は「買牛但自捐三尺」(牛を買うに但ただ自ら三尺(の劔)を捐すてよ)で、平和な時代には無用になった武器を売って牛を買い耕作に励むという故事を詠んだもの。ともすると放縱に流れることがある王翬を戒めたのであろう。そして、末の句は、隱棲後の欧陽脩を表面的に真似するようなことがないようにと注意したのたろう。(2) 第2首も重ねての忠告を旨としているようだが、残念ながら十分に意味を汲み取ることができないので訳せない。ただ、「自少多言晚聞道、従今閉口不論文」(少よいとき自より言ことばが多くて道おそを聞かくのが晚からかった、今従おそは口を閉じて文を論じたりしない)

とあるのは、王鞏よりも己自身を戒めるものとして興味深い。都にきてどのように振る舞うべきか、まだ手探り状態だったのだろう)

■次韻王定国謝韓子華過飲

詩題は「王鞏おうきょう（字は定国）が韓絳あざな（字は子華）のところで飲み過ぎ、そのことを謝った詩に次韻した」。上の詩で王鞏を褒めつつ戒めたのだが、どうやら糠に釘の人物であったようだ。

韓絳かんこうは、王安石おうあんせきが宰相を一度辞めた後で宰相になった人。しかし、韓絳はそのときに副宰相りよけいけいだった呂惠卿らと対立して何も決められず、呂惠卿を抑えつける奥の手として王安石を呼び戻すよう画策した（第5章71ページ）。かくて王安石が宰相に復帰すると、韓絳の思惑は完全にはずれてますます居場所がなくなり、地方官として転出した。このころにはすでに都に戻り、呂惠卿に冷たくされた経緯から保守派ともうまく折り合いをつけ、官界の長老として遇されていた。韓絳の父は王鞏の祖父の娘の婿で、そうした姻戚関係があることから、王鞏が副知事に任命をされたことを祝って韓絳が家に招き、大いに飲んだのだった)

昔、楚国その大臣に孫叔敖そんしゅくごうがいて、
国を守る千里の長城のようだと賞賛されていた。
その息子は絹の衣に包まれて育ちながら、
哀しいことに、父が死ぬと、（父は何も財産を残さなかったために）

破れた履くつをはいて薪たきぎを背負って売らなければならない境遇きんごうに陥おとってしまった。

孫叔敖と親しくした友人がいなかったわけではないのに、

水をひっくり返したように皆が態度を一変させた。

ただ役者やくもの優孟ゆうめいだけが違って、

王の前で、笑い話の中に、孫叔敖の子が困窮状態にあることを伝えた。

代々続く名家たのとて恃みとなるわけではなく、

足の折れた机つくえに寄り掛かるようなものなのだ。

真宗皇帝しんそうの世よに賢相けんしょう(王旦おうたん、すなわち王翬の祖父)がいて、

天下の柱をしっかりと支えていた。

その子この懿敏公いびんこう(王素おうそ、すなわち王翬の父)も名立たる大臣で、

孟子もうしがいう三つの貴いもの、すなわち徳とく、爵しやく(地位)、齒し(年齢)を備えていた。

これらの方々が亡くなって幾日になるのか、

いま誰がその子を教え導みち導びしているのか、

その子を教え導みち導びける者は誰なのか。

私はその子に説せつこうとしたけれど、

止めることにしよう、

止めることにした。

親戚かんこの宰相かんこう(韓絳かんじやう)は民衆のために起たつこと久しく、

老いに臨まんでの別れであるからと、

貴君のために御馳走を並べたのは何のためだったのか。

親類縁者を引っ張り上げたりするのはよいことではない、

ただ清々しく顔を向き合わせればよいのだ。

新しい詩は弾丸のようなもの、

手を離れたならば、知らぬところまで勝手に飛んで行ってしまふ。

私もまた詩を作る者であるからして、

苦い言葉を絹の上に書きつける。

私の言葉に耳を塞がないでほしい。

こう し
孔子も言われたではないか、

「天下に道あるときは、貧賤を恥ず」(おおよけ公の仕事に就べきさとの意味)と。

(この詩は王鞏おうきようへの苦言であり、韓絳かんじやうへの皮肉の含まれているようだ。前の詩でやりわり注意したのが全く通じていないと見て、蘇軾そしはかなり厳しい拳骨を食らわしたのだろう。(1) 王鞏が名家の生まれであることは「三槐堂の銘」(第5章323ページ)で見ている。祖父おうちんの王旦は名宰相として歴史に名高く、その娘婿となった韓億かんおくは副宰相にまで昇った。韓億の子が韓絳である。つまり、王鞏も韓絳もはなはだ血筋がよい。蘇軾はこの詩の冒頭で、血筋など何の頼りにならないと喝破している。(2) ここに引いた孫叔敖そんしゆくの故事を、蘇軾は他の詩でも使っている(第3章114ページ)。孫叔敖は財産を遺さなかつたためにその子はたちまち困窮してしまい、ただ一人、役者の優孟ゆうもうだけが救いの手を伸ばした。役者は下賤な者とされ、他の者は優孟に洩もひっかけなかつたのだが、孫叔敖だけが対等の付き合いをした。優孟は王の前で孫叔敖の真似をし、孫叔敖のことを思い出させ、その子を救った。(3) この詩を詠んで、たぶん王鞏は冷や汗を流し、韓絳

は気分をいささか損ねたであろう。幸いにも大事には至らなかったが、都は権力闘争の場、蘇軾が何の気なしに漏らした言辭が重大な結果をもたらしてしまうことがあった（実例をこの後見ることになる）。(4) なお、王鞏おうこうの父の王素せいとは成都知事であったことがあり、ちょうどその時期に母の喪に服して郷里に帰っていた蘇軾が、成都で王素に会ったとする考証もある)

■送范純粹守慶州

蘇軾は12月18日に起居舎人ききよしゃじん（皇帝の近くにあつて文章を起草するなどの仕事を務める職）に任命するとの辞令を受け、都に戻ったばかりでそのような大役を受けるわけにはいかないと固辞したが許されなかった。

これは范純粹はんじゆんすいが慶州知事けいとなって赴任するのを見送った詩。

范純粹はんじゆんすいは、蘇軾が8歳で憧れた4人のスーパースターの1人范仲淹はんちゆうえんの子。慶州けいは西の夏国かとの国境に近く、かつて范仲淹もその地の知事となっている。そのときに、夏国との間に緊張が高まり、武力衝突にまで発展し、范仲淹はその後処理に奮闘した。范純粹は范仲淹が58歳のときに生まれた子で、父が慶州知事であったのはそれより数年前だった)

昔から、大きな才能は用いられ難いとされ、

高所に立った議論はいつも迂遠なもののように見られる。

孔子こうしがこのように言ったのを、貴君も知っておられよう、

「趙魏老は大国の大臣になるべきであるのに、

膝のような小国の役人では力を発揮できない」

浮き雲には根がなく、水たまりはわずかな時間しか保たれない、

幾つもの変転を経て後に、真の賢愚が現れる。

手に持った銚の飾りが辺境の地の町々を照らし出し、

談笑のうちにそこに安寧をもたらしたのは、

かの年のかの知事(范仲淹のことをいう)で、

素手で猛虎を降参させたのだった。

その息子たちは、幼いころから厳しく育てられたのだから、

貴君は漢代の鄧平叔(やはり名臣の子)のように、

闘うまでもなく西方諸国を帰服させるであろうと、

私は確信している。

((1)『論語』にある趙魏老の故事をここに引いたのは、范純粹がかつて滕県で官職に就いていたことがあったからで、今回、慶州知事になったことで大きく飛躍すると期待したのである。(2) 范仲淹は慶州知事となって西方に行くと、先住民である羌族のもとに単身乗り込んで信頼関係を築き、夏国の動きを牽制した。息子の范純粹も、直接的に武力を行使することなく、夏国に対する優位を築くことを期待したのである。その背景には、神宗皇帝のもとで夏国との戦争を起こして失敗した対外政策の過ちをいかにして正すかが保守派の課題となっていたことがある)

■次韻王震

王震おうしん あざな しはつ（字は子発）の詩に次韻した。王震おうきょうは王翬と同族で、王翬の一世代下に当たり、このとき朝廷の高官であった。

（第6章483ページで見たように、蘇軾そうを黄州から汝州に量移じょういするとの皇帝の命令書は王震おうしん（あるいは王震の父という説もある）が起草したものだだったという。そのことがこの詩に詠み込まれている）

治平年間じへい（先々代の皇帝である英宗えいそうの年号）に、貴君は文を携えて私を訪れた。

豹ひょうは食を断って七日間雨に当たると体からだに斑模様まだらが生じるといふが、

そのときの貴君はようやく一つの斑を得たばかりであった。

聞ところでは、貴君等が推薦の言葉を発してくださったお蔭で、

私は流落の身から生きて還えることができたのだった。

清らかな一篇の文章りやうい（量移の命令書）が月の光を帯びて霜の夜に届くと、

そこに記された妙語みょうご（量移の命令）は、病んだ顔を春に先んじて明るくしてくれた。

私はすでに暮年に至ったけれど、

詩と酒はなお用いることができている。

貴君等と「竹林の七賢人」のような交わりを結ぶことも、

時には許していただけようか。

■次韻周邠

周邠しゅうはんの詩に次韻した。周邠は同じ年の科挙に合格した「同年どうねん」の間柄で、
杭州副知事時代にさかんに交流があった（第4章123ページ以下）。周邠は長
く都にいて久しぶりに再会した。

私は南じょう(常州)うつに遷って、

農地において力を尽くそうとしていた。

隠棲の地に親しい友だけが来る道を開き、

楽しいことがたくさんあるはずだった。

まさかこの老年に至って、都の地を踏むとは思ひもなかった。

疲れ切った馬が丘の前で畏れるのと似た思いがある。

羨むのは、同年の貴君が、心まささかに壮んであること。

貴君は笑うだろう、

憂いのために私の鬢びんの毛がすでに真っ白になっているのを。

いつの日にか、かつてともに遊んだ西湖せいこを尋ねようではないか。

漁師の蓑をまとい、そぼ降る雨に暗く包み込まれるのである。

（周邠とともに西湖を再訪する願いは叶わず、2人の中の詩の贈答はこれが最後であつたという）。

■恵崇春江晓景二首

都に復帰してからの日々は公務に忙しく、すでにここまでに見たように、官員仲間との交流から生まれた次韻の詩ばかりが多く、現代の我々の感興を誘うような作品は、^{こう}黄州時代に比べると大幅に減少する。蘇軾の一般的な選集では、この時期の詩は多くても数首が収録される程度で、それもほとんどが画に関連するもので、特に有名なのがこの詩である。^{えすう}恵崇が描いた「春の江の曉の景色」の画に寄せた作。恵崇は北宋の初めの頃の僧で、詩や画に巧みであった。都にきてこの画を見る機会を得たのだろう。

其の一

竹の外へと、桃の花の枝が二、三飛び出す。

春の江の水のぬくもりを最初に知るのは鴨である。

^{しろもぎ}蒹蒿が渚を満たし、^{あし}蘆の芽が短く伸び始める。

これはまさしく河豚が上ってこようというとき。

（画には、川と鴨、^{しろよもぎ}蒹蒿と^{あし}蘆、竹と桃が描かれていただろう。そこから蘇軾は想像をふくらませ、描かれてはいない河豚を詠んで、春の季節感を強めた。河豚はこの時期に肥えて美味であるという。俳句のように取り合わせの妙が詩を味わい深くしている）

其の二

帰り行く鴻の一群、

その群れを破るかに見える二羽、そして二羽。

それは北に帰ろうとしてなおためらう人に似ていようか。

遙かに知るのは、

北方の砂漠にはなお風雪が多いこと。

もう半月ばかり、江南の春の内に過ごすのがよいであろうに。

(画の上空には、北に帰る 鴻 ^{おおとり} の群れも描かれていたのだろう。群れから離れる鳥に、蘇軾は自身の思いを託した。蘇軾は、先の詩で見たように、丘を前にした疲れた馬の畏れを抱き、なお江南 (常州) ^{こうなん じょう} に留まっているべきではなかったろうかと思うのである)

■次韻胡完夫

元祐元 (1086) 年、蘇軾 51 歳。

年が明けてすぐに改元された。新元号は、3 代前の仁宗皇帝 ^{じんそう} の治世下の最後の元号である嘉祐 ^{かゆう} のころを一つの理想の時代として捉え、そこへ回帰することを宣言したものである。つまり、神宗皇帝 ^{しんそう} のもとで行われた改革政治を全否定したのだ。蘇軾が科擧に合格したのは嘉祐 2 (1057) 年であったように、政権の中核を担う世代の人々にとっては、若かりし良き日々へのノスタルジーも伴う改元であったのだろう。

この年、蘇軾は閏 2 月に中書舎人 ^{ちゆうしよしゃじん} に、9 月に翰林学士 ^{かんりんがくし} になり、それに伴って、階位 ^{きゆうひん} (九品から一品まであり、最上位の一品は皇族だけに贈られる) は都に ^{いっぴん} 来た当初の七品から四品にまで急上昇する。

この詩は胡宗愈（字は完夫）の詩に次韻したもの。胡宗愈はかつて王安石が李定（蘇軾を目の敵にして罪に陥れた張本人の1人）を御史（官僚の不正を取り締まる役）に抜擢しようとしたことに反対して左遷され、皇帝の代替わりに伴って都に戻った。胡宗愈が蘇軾の朝廷復帰を記念する詩を贈ったので、それへの返しでこの詩を作った。

かつて知事として着ていた衫には、
 (都の人々との)別れの涙の跡がいままだらに残っている。
 それから十年の間、
 私は江湖にあって名ばかりの小吏の身として苦しんできた。
 老いて、我が意がお上に通じたものか、都に還ることができ、
 毎朝、笏を捧げて宮殿に臨むこととなった。
 貴君とは、形骸の外に出て杯をかわし合い、
 酔った夢の間に、笑いながらこれまでのよもやまを語り合う。
 昔から、「胡先生に問えば万事うまくゆく」と言われているのだから、
 白髪頭になった私なんぞは、
 その横で閑をつぶしていればよいのである。
 (終わりのところに「胡先生」と訳したのは、後漢の時代の胡広のこと。「おさまらないことがあったら胡広に問え。そうすれば、天下は中庸を得る」と言われた。同じ胡姓である胡宗愈をなぞらえたのである)

■次韻錢穆父

上の詩のもとになった胡宗愈こそう ゆの詩に錢勰せんきょう（字の穆父あざな ぼくふ）が和し、その詩に蘇軾がさらに次韻した。錢勰は五代十国時代に杭州に都を置いた吳越国の王族の末裔で、長く朝廷にあり、この後、蘇軾としばしば詩の贈答をする。

私は老いて宮中に入り、かつてのようにまた朝廷に並ぶ身となった。

それでも、髭ひげを黒く染めて、若者ぶって歌を唱えるようなことはしない。

知人たちは金鑾殿きんらんてん（皇城の宮殿）の上を舞い飛び、

いずれも飯潁山はんかざん（神聖な山）から来たような方々ばかりである。

貴公の堂々の筆は漢かんの世の力があがり、

私がまるで当時の劉向りゅうしやう、劉歆りゅうきん父子の間に立つかのように言ってくれる。

そうまでしてくれたのでは、

同僚を呼び集めて貴公のために酒宴を開かねばと思っていると、

貴公がお上より賜った竜のような馬に跨って出で立つのが見えた。

（1）これは、社交辞令を華やかな文字で飾っただけの内容の乏しい詩。訳はそれなりに意味が通るようにしただけのもの。（2）都での詩の多くは、題に「次韻」「和」「用韻」といった文字がある。いずれも他人の詩に唱和したものである。訳者が最も頼りにしている岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳解『蘇東坡詩集』（1927）には「応酬の作、如何に

苦辛経営するも、言うべき事に局限がある。公の如き大才といえど 雖も、手の下しよう無く、従って其の詩平々凡々、瓦礫の如きものとな 為る」との評があり、他ならぬこの詩が「瓦礫の如き」とされた作品である。実際のところ、都での詩はこう 黄州での詩に比べてかなり精彩を欠くようである。それでも、「平々凡々」の内にも蘇軾の本心を垣間見ることができるので、できる限り丹念に見てゆきたい。(3) こそうゆ 胡宗愈の詩を起点として、蘇軾を中心に次韻リレーが展開され、胡宗愈、せんきよう 錢勰りしぎ に加えて李之儀たんしゆく (字は端叔) も参加した。最初の胡宗愈の詩、および蘇軾が次韻した5篇の詩の5句目、6句目の対句を以下に掲げて、次韻リレーの雰囲気だけでも見ておこう。

(胡宗愈→蘇軾)

黄崗泉石紅塵外、
陽羨牛羊返照間。

(蘇軾→胡宗愈)

相従杯酒形骸外、
笑説平生醉夢間。

(蘇軾→錢勰)

大筆推君西漢手、
一言置我二劉間。

(蘇軾→胡宗愈)

竹簾涼風眠昼永、

玉堂制草落人間。

(蘇軾→錢勰)

憐我白頭來伏下、

看君黃氣發眉間。

(蘇軾→李之儀)

知君小異千人裏、

慰我長思十載間。

最初の胡宗愈こそう じゆの対句は、黄州こうと陽羨ようせんでの蘇軾の暮らしぶりを想像して詠んだもので、それへの蘇軾の返しは胡宗愈との友愛を詠んでいて、実質的な内容が伴っている。その後のやりとりは言葉の遊戯に陥り、やはり「瓦礫」と言わざるをえないのだろう)

■正月八日招王子高飲

1月8日に王迴おうけい（字は子高あざな しこう）を招いて杯を交わした詩。王迴は俗世間の外に出て遊ぶ人で、蘇軾じよが徐州知事であった元豊元げんぽう（1078）年に一度会っていて、王迴のために詩を詠んでいる。その序文に「世間に伝えられるところでは、王迴は仙人の周瑤英しゅうようえいともの仙界の芙蓉城ふようじょうに遊んだという。元豊元年三月、初めて王迴と会い、そのことを問うと、その通りだと言った」とある。

（徐州じよで作った芙蓉城ふようじょうの詩は特殊な語句を並べて仙界を描写したもので、晦渋で内容に乏しいので訳さなかったのだが、この詩もさほど興趣を誘うものではない。蘇軾が多

忙な中でもこうした人々と交際していたことを示すものとしてここに掲げておく)

風が叫び、雪が屋根を覆って、

苦しくも貧乏と戦っていたとき、

紙の窓に日が射ってきてようやく春になったと知った。

いまは^{くちなし}梔子の花の香る中にあるような気分、

まして^{ふようじょう}芙蓉城の人とこうして向かい合っている。

昨日は^{ぎょくどう}玉堂(宮中の執務室)で空しく静かに過ごし、

銀の盃に美酒を盛って贈ってくれる人でもいまいかと想った。

^{かいざん}海山(海の彼方の仙界)は東南の方向にあって、

そこへと帰る^{おどり おうけい}鴻(王廻を指す)がわずかににっと笑った。

■送戴蒙赴成都玉局観将老焉

この詩の題は、「^{たいもう せい と}戴蒙が^{ぎょくきょくかん}成都にある玉局観の管理人として晩年を過ごすことになったのを見送る」。戴蒙は^{ごこう}呉興の人で、^{けいれき}慶暦6 (1046) 年に科挙に合格したとあるから、蘇軾より 10 年ほど先輩である。キャリアを積んだ官僚は、^{どうかん}道観(道教の寺院)の名目上の管理人となってわずかばかりの俸禄を得て隠退することがあった。成都是^{しよく}蘇軾の故郷である蜀の中心都市であり、かつて杜甫が浪々の身を寄せていたところでもあるので、そのことがこの詩に詠み込まれている。

(ある考証によると、弟の蘇轍が戴蒙を見送るのに合わせて、蘇軾がこの詩を作ったという。そうしたことから、蘇轍は1月中頃に都に帰還したと推測されている。ならば、弟との再会を喜ぶ詩があつてしかるべきであるように思うのだが、そのようなものは残っていない。また、流謫の日々にさんざん苦勞をかけた家族をねぎらうような詩文も残っていない)

とほ
杜甫が酒をきこしめして歌いつつ歩いたのは、
野の梅が開き、官道の柳が揺れる成都西郊外の道であった。
聞くところでは、成都の華陽県の域内に、
いまも杜姓の人が集まり住むところがあるとか。
私もいつか成都に帰って万里橋を尋ねたく思う、
それも、水辺に花が咲き、風に蕭蕭と葉が下る秋のころに。
しよく おお
蜀の魁さい芋は径が一尺もあつて食べ尽くせる人は誰もいない、
蜀の檀木は三年も経てば十分すぎるほどの薪を供給できるようになる。
と ふうきやう
人生百年を風狂に生きて何かあるのか、
が びさん
貴君がこうしてついに峨眉山の翁となるのを羨ましく思う。
ほこ
貴君の後には、たとえ戟を執って立つ将軍が生まれなくとも、
車輪が土に埋もれるまで勉学に励んで立派な君子になる者がきつと出るだろう。
私は老いて病みながら、また帰ることのできない身、
それでも、貴君のように道観の主となれるのだろうか、

そのようになったら、昔の王子猷おうしゆうのように、

雪降る夜に興味きょうが湧わくに任せて貴君のところをきつと尋ねるだろう。

(1) 万里橋ばんりきやうは、三国時代の諸葛孔明しよかつこうめいに由来する橋で、いまも成都観光の名所せいとになっている。(2) 詩の終わりおうぎしは、王羲之おうしゆうの子の王子猷おうしゆうの故事に基づく。王子猷おうしゆうは雪の夜にふと思い立って友人の戴安道たいあんどうを訪ね、しかし、門にまでくると興が尽きたとしてそのまま帰かえった。戴蒙たいもうと戴安道たいあんどうが同じ姓であることからこの故事を引いたもの。これまでも同様の例を多々見ているように、蘇軾そしつは抜群の記憶力によってこの種の技法を得意とした)

■定風波

王翬おうきゆう (字は定国あざな ていこく) (本章5ページなど) に仕える侍女の中に、歌を得意とする柔奴じゆうどという少女がいた。その柔奴に与えた詞。序文がある。

(王翬は裕福な家に育ち、遠く南方に流されたときにも多数の侍女を連れたことは第6章324ページで見ている)

王翬おうきゆうの歌児じゆうどを柔奴じゆうどという。姓は宇文うぶんである。眉目娟麗びもくけんれいで、受け答えが上手で、代々都に住んでいたという。王翬とともに南方に行って帰ってきた。

私は柔奴に、

「あちらの風土はどうであったかな。よろしくなかったであろう」

と尋ねたところ、

「この心を安んじられるところ、それが吾が故郷にございます」

と答えた。それでこの詞を作った。

常羨人間琢玉郎、(常に羨むのは人間世界の琢玉郎(玉のような好男子=王鞏))

天宥分付点酥娘。(天はしかも点酥娘(ヨーグルトのような少女=柔奴)を分け与えました)

自作清歌伝皓齒、((柔奴が)自ら清らかな歌を作って白い歯からそれを発すると)

風起、(風が起り)

雪飛炎海变清凉。(雪が飛び、炎が立つような海が一変して清凉になったのでした)

万里归来顔愈少、(万里の彼方から帰って来ると(柔奴は)ますます若(な)っていて)

微笑、(その微笑みときたら)

笑時猶带嶺梅香。(笑うときには、嶺の梅の香りをいまでも帯びているのです)

試问嶺南应不好、(試しに嶺より南は大変だっただしょうねと問う)

卻道、(かえて言うのです)

此心安处是吾乡。(この心を安んじられるところが吾が故郷なのです、と)

(1) 王鞏が流されたのは「嶺南」の地。「嶺」とは大庾嶺で、そこを超えると燃えるような熱帯というイメージであった。(2) 柔奴の言葉は、黄州で熟成された蘇軾の人生観にぴったり合うものだった。それを若い歌妓から聞かされたことに深く感動したのだろう。(3) 蘇軾は歌妓に対して何ら偏見を持っていない。だから、徐大受のもとにいた歌妓の勝之を別のところで再び見たことを、妾を持つことを戒める教訓としたと

いう解釈（第7章147ページ）には従い難いのである）

■次韻王覲正言喜雪

おうてき あざな めいそう
 王覲（字は明叟）が「雪を喜ぶ」詩を作り、それに次韻した。王覲は前年
 12月う せいげんに右正言（皇帝を諫める職）になった。雪は豊作を呼ぶ吉祥とされ、王
 覲は新皇帝てつそう（哲宗）のもと新たな年に幸あるべしと言祝いだのである。

てつそう
 聖人（哲宗）は天と通じておられ、
 獄中にある者の罪を減じるようにみことりとの 詔 を出された。
 それを受けて、喜びの声が夜の街にさかんに聞かれ、
 朝には湿り気を帯びた雲が宮中の階段を覆った。
 朝儀を終えて退くころに、雪が盛んに降り出し、
えんじゆ
 槐の並木に微笑みかけるようにして、雪は美しく映えた。
 雪は己が美麗であるのを誇るのか、
 ことさらに大官の朱や藍の袂へと上ろうとした。
 私は筆を執って皇帝にお仕えする職にあるけれど、
 瑞祥を記して申し上げることをいまだしていない。
 貴君は陛下の膝元に伏して議論を争う職にあり、
 その高邁な論は私の心を少なからず慰めてくれる。
 さかんに降る雪は一度やんでまたおこり、

風と寒気は激しいものとなった。

神竜が長く潜伏して後にひとたび怒るときには、

その勢いは何倍にもなるという。

ゆくゆくは「三白」(三回の雪は豊作の吉祥という)を見て、

朝臣は拝舞して万歳を歡呼することになるであろう。

私は退朝後は貴君の家に行き飲み、

古代の『既醉』(太平の歌)を追想しつつ、

酒を飲み、貴君の詩を詠みたいと思う。

(この詩は、雪を吉祥として手放しで礼賛しているのではなく、何らかの寓意が籠められているとする注釈もあるが、その寓意なるものを訳者は読み取ることができない)

■元祐元年二月八日朝退独在起居院読漢書儒林伝感申公故事作小詩一絶

この詩の題は「元祐元年二月八日、朝廷から退いて独り起居院(中書舎人になった蘇軾の執務室のあったところ)において『漢書』の「儒林伝」を読んだ。

申公の故事に感じ、一篇の絶句を作った」。

(以下の詩の訳文を読んでも、申公の事績を単に略述しただけのもので、何ら面白味がないと感じるだろう。この説明文を読んでから味わっていただきたい。『漢書』は漢代の歴史を記した書物。「儒林伝」は儒者の伝記を集めた巻。申公は申培のことで、漢代の最初のころの学者、とくに『詩経』の研究で知られた。申公は若い頃に劉交(高祖皇帝の末弟)や穆生と一緒に学び、穆生とともに劉交の学友として遇され、劉交の息子

を指導した。ところが、孫の代になると扱いがやや粗略となり、穆生は「いまが去る機ときだ」と言って、病気を理由に立ち去った。劉交の孫は年々振る舞いが粗暴になり、諫める申公を嫌って囚人と同様に扱ったので、申公もようやく郷里に帰り、それからは弟子の育成に努めた。武帝ぶていの時代になって儒学が盛んになり、武帝は申公の弟子の趙綰ちやうわんや王臧おうざうに呼んで明堂（王族の学問所）を建て、さらには、すでに80歳を超えていた申公を都に招いた。ところが、皇帝の祖母は儒学を嫌い、趙綰と王臧に少々の落ち度があったのを咎め、2人は役人の取り調べを受けた。それを恥じた2人は自殺し、明堂は廃止され、申公は失意の内に郷里に帰った）

申公しんこうが最初に郷里に帰って、
門を閉ざして客人とも逢わなくなったときに、
申公は、
「穆生ぼくせいは早くから機ときがわかっていたのだ」
と己に向かって言った。

（しかし、それに懲りることなく、都にこのこのこ出て行き）

弟子の趙綰ちやうわんと王臧おうざうが獄吏のもとに下され、明堂は廃止となって、
老いさらばえて免職となって郷里に帰ったのだった。

（題に「二月八日」と明記してあることから、この詩に込められた真意を読み取ることができる。この前々日に朝廷は差役法さやくほうを復活させることを決定した。差役法は民衆を肉体労働に駆り立てる古い法律で、時代に合わず、民衆の大きな負担になっていた。王安おうあん

石と神宗皇帝は労役の代わりに錢を納める募役法を作り、改革の大きな目玉として施行した。募役法は大いに効果があがり、国家にとっても民衆にとっても非常によい制度であることが実証されていた。ところが、高太皇太后と司馬光は、改革政治を一切の痕跡を残さぬまでに消し去ってしまおうとし、募役法を廃止して差役法をそっくりそのまま復活させようとした。改革派の生き残りの章惇は無論強く反対し、蘇軾も反対したのだが、強引に押し切られてしまった（後に金陵でこのことを聞いた王安石は、この法ばかりは残しておいてほしかったと非常に落胆した）。蘇軾は朝廷に復帰してまだ2カ月ほどであったにもかかわらず、このまま都にいていいのかどうか非常に悩ましく感じ、その思いをこの詩に託したのだった。一度で懲りずに、皇帝に招かれて都に出たために、より大きな辱めを受けなければならなかった申公の立場にいまの自身が重なると蘇軾は思ったのである。なお、司馬光が保守派の指導者として活躍すべきだと蘇軾が考えていたことは第5章182ページで見た詩にある通りで、司馬光への尊敬の念はいまも変わらなかった。しかしながら、司馬光はこのとき68歳で、改革政治をストップさせた後の政治のビジョンを描く構想力に欠け、単なる反動政治家となってしまうのだった）

■送陳睦知潭州

陳睦が潭州知事として赴任するのを見送った詩。詩は昔日の交遊の回想から始まる。

せい かい きゅう ひょうびょう
華清宮の高い棟が縹緲として浮び、
山の上の林のそのまた奥せきおうじに石甕寺があった。
そこで貴君と初めて知り合って一杯酌み交わし、
夜には馬を飛ばして一千の巖いわおを昇った。
そのとき、貴君は若く、顔は玉のように輝いていた。
ひとたび飲んだからには、百の觚さかずきを開けないと気がすまなかった。
はくろくせん
白鹿泉の上の山に出た月からの冷たい光に、
川は水銀が流れるかのように見えた。
酒が醒めたのは華清宮ちやうげんかくの朝元閣の上で、
おおどり
鳳の形をした鉄の鈴が風に鳴るのを、
寝転がったまま聞いたのだった。
かつて遊んだところはそのままであろうとも、
そのときの人々はいまどこにいるのだろうか。
あれからの二十三年、
それは真に一つの夢だ。
私は生きて都に還ることができたけれど、
髯は雪が満ちたように真っ白で、
貴君もまた老いて、
高官が身に付ける金の帯の重みを嫌うようになった。
春に飛び来る燕おおどりと秋に飛び去る鴻のように、

私と貴君は逢ってゆっくり話もできないうちに送別の時がきてしまった。

貴君がこれから通ることになる洞庭湖も青草湖も際限なく広がり、

天柱峰も紫蓋峰もいまにも動き出しそうに聳え立っているであろう。

湖南の地は古より長く嘆息させる絶景の地、

詩人が弄んで笑って言葉を発するためのところだ。

(1) 冒頭にある華清宮は長安の東にある温泉地で、唐の玄宗皇帝が楊貴妃と遊んだところとして知られる。そこで陳睦と初めて知り合ったのである。詩の途中に「二十三年」とあり、これより23年前には蘇軾は鳳翔府にいた。鳳翔での任期中に公務で長安周辺を巡ったこともあるので、その折に陳睦に会ったのだろう。(2) 春の燕と秋の鴻のように別れるとあるのは、政変によって入れ替わりとなったことを示していて、陳睦は本意ながら遠く洞庭湖の南の潭州に赴任して行くのである)

■和蔣発運

真州にいる蔣之奇(字は穎叔)から詩が贈られてきたので、それに和して返した。第7章63ページで見たように、真州で蔣之奇と会ったことが陽羨に住もうとした一つのきっかけとなった。

かつて夜に語り合ったとき、

貴君は千の偈(仏教の真髓を要約した韻文)を瞬(げん)間につくった。

手紙が来ると、またしても一つの偈があった――

此の身は、真に仏陀ぶつだにして達磨だるま、
 いずれのところも、義皇ぎこうの世にして軒轅けんえんの世である。
 遥かに知るのちやうこうは、長江に臨む貴君の姿——
 前方に船が穏やかに停泊し、
 誰もいない楼閣におもむろに風が吹き込み、
 月の光だけが盃に差し込む、
 そして私を思って墨を書き散らし、
 そのまま酔い崩れるのである。

■与陳季常

陳慥ちんぞう（字は季常あざな きじょう。方山子ほうさんし）に宛てた手紙。

（陳慥は黄州で深く付き合った人（第6章32ページなど）。本文から推測するに、陳慥からの手紙への返信であり、司馬光しばこうが左僕射さぼくしゃ（宰相）になった閏2月2日の直後に書かれたものである）

私の執務室は清潔で簡素ですが、都には閑な人は一人もないので、とにかくばたばたしているうちに日が過ぎ去ってしまいます。苦労ばかりが多く、それを補ってくれるものがないので、顔は青く、髪は白くなるばかりで、それを御覧になったらきっとお笑いになることでしょう。ただ、弟も同じ役所に勤めていて、毎日会えるのは幸いです。

貴公は少し病んで平癒されたとのことですが、ゆるがせにしてはなりません。「善い言葉は口から離さない。善い薬は手から離さない」。これは昔から言われている大事な諺ことわざです。ぜひともこれを書いて座右に置いてください。薬でそちらでは手に入れにくいものがありましたら、遠慮なさいませんように。

もし貴公に上京のお気持ちがありましたら、いつでもお越してください。お会いできたらこれほどうれしいことはありません。

柳二君りゅうに（柳真齡りゅうしんれい）はすでに都に来ています。一度訪ねてみましたが、外出してて会えませんでした。蒲池寺ほちじに滞在していて、ここからは少し遠いところです。

ここ数日で新しいことがありました。宰相であった蔡確さいかく ちんが陳州しん ぼ ちゅうに出され、司馬光が代わって宰相になりました。蹇周輔けんしゅう ほかは和州わ ちゅうに出され、その息子も降格となりました。黄履こう り めつも越州えつ ちゅうに出されました。全てはとでも書き尽くすことはできませんが、劉摯りゅう しは職務としてこうした人事を日々行っています。

貴公が雑事に関係しないのは、まことに結構さいみやうであります。最妙、最妙。

（(1) 陳慥ちんぞうには上京の意思があつたらしい。先の上京している柳真齡りゅうしんれいは蘇軾が黄州にいたときに鉄拄杖てつじょじょうを贈ってくれた人（第6章189ページ）。朝廷の高官になった者を頼って何かしらの希望を叶えようとするのはごく当たり前のことで、士大夫間の関係、親類縁者間の関係、同郷の者の間の関係を極めて大切にすの当時の社会において、頼られて全く応えないということはありえなかった。蘇軾もいろいろな人に頼られた形跡はあるが、不法なことに手を染めてまで便宜を図ることはむろんなく、希望を叶えられずに虚しく都を去った者もいたようだ。陳慥は後で見るように実際に上京するが、詳しい

事情はわからない。(2) この手紙には幾人かの名が挙げられていて、その人事に弟の蘇轍が関係している。蘇轍は2月に右諫官になり、侍御史の劉摯とともに、官員として不適切な行為のあった者を次々に弾劾し、その結果、蔡確、蹇周輔、黄履といった改革派の人々が次々に都を去った。真直ぐな気性の蘇轍にぴったりの職務であったのだが、後に改革派が政権に返り咲くと、激しい報復を受けることになる)

■書子由夢中詩

弟の蘇轍（字は子由）がかつて夢の中で詩を作った。兄にそれを話し、兄がその詩を書いて蘇轍の長男の蘇遲に渡した。それだけのことを記した短文。蘇遲はこのとき27歳だった。

元豊八年正月旦日、蘇轍は、夢で李士寧に逢った。

急いで酒食を用意し、絶句一首を贈った。

先生惠然肯見客、(先生はにこにこ私に会ってくださったので)

旋買雞豚旋烹炙。(急いで鶏や豚を買って煮たり焼いたりした)

人間飲酒未須嫌、(人間世界で酒を飲むことを嫌わなくていい)

帰去蓬萊卻無喫。(蓬萊境に帰ったならこいものを口にするのではないだろうから)

明る年の閏二月六日、蘇轍がこのことを私に話したので、書いて蘇遲に渡した。

(李士寧はなかなかの有名で、司馬光の随筆『涑水記聞』に以下のように記されている。司馬光は『資治通鑑』という巨大な歴史書を編集した経験から、後世の歴史家のた

めに自身の生きた時代の証言を集めて記録した。『涑水記聞』の記事は信頼性が高いとして、基本資料として後世の史家に活用された。

李士寧は蜀の蓬州の人で、自分では道を学んだと言い、運勢について怪しげなことを告げ、巧みに的中させた。しかし、書物の知識はない。上手に詩を唱え、すこぶる知恵があるように見え、その言葉の意味は奇妙に大きすぎて、お御籤の言葉のようで、妖しく妄りに人を惑わせるものであった。全国各地や都を巡り歩き、大勢の公卿、貴人に重んじられた。誰も李士寧がどうやって稼いでいるのか見たことがなく、李士寧は荷物を持っていなかった。ところが、いつでも資金が潤沢にあり、十数人の客を集めて珍しい食べ物を前に並べてもてなし、金を支払った。李士寧を最も重んじたのは王安石で、熙寧年間に宰相になると、李士寧のために東府に住まいを用意した。半年の間、李士寧は王安石やその子弟と交流があった。王安石が都を出て金陵に行くとき、李士寧は蓬州に帰った。

司馬光は、王安石に対して皮肉を込めた書き方をしている。王安石は周囲の猛反対を押し切って改革を断行しただけに、精神的に異様なまでの緊張にさらされ、李士寧のような人物との付き合いに救いを求めたのかも知れない。最も頼りにしていた長男に先立たれ、金陵に隠棲してからは、王安石の知性は甚だ鈍り、独りごとをつぶやきつつ出歩く姿が見られたとの証言が残っている)

■書章警詩

上の短文に記されていた李士寧は、蘇軾の別の文章にも登場する。これは

同じ年か翌年に記されたと推測されている。

章^{しょう}警^{きやう}、字^{あざな}は隱^{いん}之^し、もとは閩^{びん}州^{しゅう}の人^{ひと}で、数^{せい}代^と前^{ぜん}に成^{せい}都^とに遷^とった。文^{ぶん}章^{ちやう}が得^{とく}意^いであつたが、官^{くわん}には仕^しえなかつた。晩^{ばん}年^{ねん}に成^{せい}都^と知^ち事^じの王^{おう}素^その推^{ちゆう}薦^{ぜん}で、冲^{ちゆう}退^{たい}处^{ちよ}士^しの号^{ごう}を賜^{たま}つた。

ある日^ひ、夢^むに人^{ひと}が来^きて、手^て紙^しを示^しし、章^{しょう}警^{きやう}を招^{まね}いた。それは東^{とう}嶽^{がく}道^{だう}士^しからの手^て紙^しだつた。

その明^{めい}る日^ひ、章^{しょう}警^{きやう}は李^り士^し寧^{ねい}と青^{せい}城^{じやう}山^{ざん}に遊^{あそ}んだ。水^{みづ}辺^べで足^{あし}を洗^{せん}いつつ、章^{しょう}警^{きやう}はにやにやしなから李^り士^し寧^{ねい}に言^いつた。

「さて、西^{せい}の溪^{けい}の流^{りゅう}れを踏^ふんで、水^{みづ}とともに行^いくことにしますかな」

李^り士^し寧^{ねい}はそれに応^おじて言^いつた。

「東^{とう}嶽^{がく}道^{だう}士^しからもらつた手^て紙^しを持^もつてでしよかな」

章^{しょう}警^{きやう}はひどく驚^{おど}き、李^り士^し寧^{ねい}がどうして夢^むのこ^ことを知^しつたのかわからなかつた。

それから間^まもなく、章^{しょう}警^{きやう}は果^はたして亡^なつた(昇^{しやう}仙^{せん}した)。

章^{しょう}警^{きやう}の子^この章^{しょう}禛^{しん}もまた隱^{いん}遁^{とん}者^{しや}であつたが、小^{せう}さな官^{くわん}の仕^し事^じに就^{しゆ}いて死^しんだ。

李^り士^し寧^{ねい}は蓬^{ほう}州^{しゅう}の人^{ひと}で、普^ぷ通^{つう}ではないこ^ことを言^いひ、道^{だう}を得^えた人^{ひと}だといふ者^{しや}もいた。百^{ひやく}歳^{さい}で死^しんだ。

私^{わが}はかつて成^{せい}都^とで李^り士^し寧^{ねい}で会^あつたこ^ことがあ^あり、

「君^{きみ}にははなはだ貴^きい相^{さう}があ^ある。きつと科^か挙^{きよ}で首^{しゆ}席^{せき}にな^なる」

と言^いつた。果^はたしてそのよ^ようにな^なつたのだつた。

(「^{せいと}成都知事の^{おうそ}王素」^{おうきょう}とあるのは王鞏の父である (本章9ページなど))

■仏心鑿偈

^{とう}登州にいたときに三男の^{そか}蘇過の持つ鏡を寺に寄付したということを記した短文。

三男の^{そか}蘇過は^{うどうかん}烏銅鑿を持っていた。直径は数寸で、奥深く通る光を放っていた。

^{げんほう}元豊八年十一月二日、^{とう}登州の^{えんこうぜんいん}延洪禪院に遊ぶと、^{ぶんたい}僧の^{しゃかぶん}文泰がちょうど^{じついん}釈迦文

^{ぞう}像を造ろうとしていた。そこで、^{ぶっしんかん}仏心鑿にしまらうべくこの^{かがみ}鑿を寄付し、^げ偈を作った。

鑿中面像熱時炎、(^{かんちゆう}鑿中の面像 ^も熱(時に炎ゆる))

無我無造無受者。(無我 無造 無受の者)

心花発明照十方、(^{しんかめい}心花 明を發して十方を照らし)

還度如是常法衆。(還 ^{かん}度るに ^{じよぜ}如是 常法の衆)

^{びざん}眉山の^{げんゆう}蘇軾、元祐元年三月一日、石に刻んで立てる。

((1) 「^{ぶっしんかん}仏心鑿」とは、仏の心として仏像の中に納める鏡なのだろう。(2) ^げ偈の意味はわからないので、とりあえず読み下し文にした。たぶん、鏡の光はすなわち衆生を照らす仏陀の^{くわち}叡智だというようなことなのだろう)

■題別子由詩後

2年前に^{いん}蘇軾は^{くわち}筠州に弟を訪ね、10日間ほど滞在した。別れた後に弟に

詩を送っていたが(第7章11ページ)、その詩を書いて短い文章を書き添えた。

先君昔愛洛城居、(先君(父)は昔、洛陽に住みたいと考えたことがあった)

我今亦過嵩山麓。(僕はいま嵩山の麓に行こうとしている)

水南卜築吾豈敢、(周公が洛陽の地を卜って都を築いたような大げさなことは考えていないけれど)

試向伊川買修竹。(ために伊川のほとりに姿のよい竹林でも買ってみようかと思っている)

又聞緱山好泉眼、(また、緱山には泉眼というよい泉があって、氷の玉のような清らかな水が)

傍市穿林瀉水玉。(町に沿い、林を穿って流れていると聞いている)

想見茅檐照水開、(遙かに想像するのは、その水に照らされる茅葺の庵があり)

両翁相對清如鵠。(二人の翁がそこで向き合っているありさま、その姿はあたかも白い鵠のようである)

元豊七年、私は黄州から汝州に遷ることになり、筠州に往って弟と別れた。数篇の詩を作って弟のもとに残した。これはそのうちの一篇である。その後、洛陽には行かなかったけれど、この思いはいまも忘れていない。康師孟君が洛陽に帰るというので、これを書いて贈ることにした。

元祐元年三月十六日、軾書く。

(康師孟は当時名医として知られ、康師孟が調合した「四神丹」は万病に効く薬として、

らくよう
洛陽の人々に非常に珍重された。蘇軾は遙か後になって「四神丹」についての短い文章
を書いている)

■送表弟程六知楚州

この詩の題にある「^{ひょうてい ていろく}表弟の程六」とは誰なのか。「表弟」とは姓の異なる
従兄弟、「程六」とは^{てい}程の家の同世代で上から6番目の者。ここにある程
の家とはすなわち蘇軾の母の実家である。蘇軾の姉は、母の兄の子の^{ていし}程之
^{さい}才のもとに嫁ぎ、虐待されて死んだ(第4章201ページ)。そのころ蘇軾の
父の^{そじゆん}蘇洵は、官人を輩出する土地の名家の程氏に対して全く頭が上がり
ず、娘の非業の死も黙って耐え忍ぶしかなかった。後に、息子2人が科
挙に合格し、自身も都の人々に認められると、蘇洵は程の家に対して絶縁
を宣告した。「程六」は、姉の夫であった^{ていしさい ていじ}程之才(程二)の弟の^{ていしげん あざな}程之元(字
は^{とくじゆ}徳孺)である。その程之元が^そ楚州知事となって赴任するのを見送ったの
がこの詩。

^{けいけい}炯炯と明るく輝いてあたりを照らす二つの壁、

それは程家の兄弟(^{ていしげん}程之元と^{ていししやう}その弟の程之邵)。

かつて我らが故郷には三人の老人がいた。

それは^そ蘇氏(蘇軾の祖父)、^{てい}程氏(程之元の祖父)、^{せき}石氏で、

三老人が杖をついて歩くのを見かけると、村人は道から下りて挨拶し、

三老人が訪ねてくると、県知事も慌てて履を逆さまにはいて門に出て迎えた。

そのころ私も貴君も皆がこどもで、

やたらに走り回って、三老人に梨や栗をせがむばかりであった。

牛のように頑健な体とていつまでも恃むことはできず、

馬がわずかの隙間を過るようにして歳月は惜しむ間もなく流れ去る。

醜泉寺れいせんじもいまや古びて、橘や柚ゆずの木が大きく枝を垂れているだろうし、

石仏山せきぶつざんは変わらずに高く、松や櫟いらいに暗く覆われているだろう。

郷里から万里の彼方で三老人の孫が逢い、

ひとたび笑い合って、

積み上がった千の憂いをもう解こうではないか。

貴君ききみは古の山陽郡さんようを治める人となり、

練達の筆から風が立つ勢いに乗って、小官の境遇から脱してゆくのだ。

私は皇城しゅひかくの紫微閣で筆を舐める身で、

病んだ眼にはちらちら花が飛んで書類を見るのは楽ではない。

我が残りの歳月いんじつを印綬いんじゅ(官員のしるし)に繋いでおこうとは思わない、

都を去って先祖の墓を掃除する日がきつとくるはずだ。

貴君も功績を挙げて、頭が白くなったならば、

早々に帰り来るがよい。

一緒に梨の花を活けて、寒食の日々を過ごそうではないか。

(1) これは程家との27年ぶりの和解の詩なのだろう。姉の夫であった程之才やその

父は許せなくても、弟たちにまで怨恨を及ぼし続けることはないとしたのである。(2)
程之才の父を暗に排除する意味で合い、それより一世代上の「三老人」の時代に遡って
かつての友愛をここでは歌っているようだ。「三老人」の1人として挙げられた石氏は
誰なのか。蘇軾そ じゅんの父の蘇洵そ じゆんには、石揚休せき しょうきゅうが朝廷の使者として遼国りょう ぎつたん（契丹）に行くの
を見送ったときの有名な文章があり（本章199ページ）、石揚休の父がここでいう石氏で
ある。その文章に「自分がこどもで父のそばで遊んでいたときに、石揚休もきて一緒に
棗ざいや栗りを食べた」といった句がある。(3) 醴泉寺れいせん じも石佛山せきぶつざんも故郷の眉州びにある。(4) こ
の詩の終わりの部分から、寒食節の頃にこの詩が詠まれたことが知れる)

■送王伯駟守虢

王廷老おうていろう（字は伯駟あざな）が虢州知事はくようとして赴任かくするのを見送った。

かつて華山かざんの東の麓には、

秦しんの暴政を避けて山に逃げ込んだ人々の子孫が住みつき、

今に至るも、その土地の風俗には古い時代のものが伝えられている。

柔らかな桑、緑の水は、旅ゆく人を招き寄せようとするのだが、

人は首を回らすこともなく、腕を振って通り過ぎ、

囊ふくろの口のような函谷関かんこくかんへと急ぎ通り過ぎてしまう。

ただ一人知事殿だけは、千里の彼方からこの地に来て、

執務室で、「無事の酒」(何事もなくよく治まっている地で飲む酒)を飲み、

日がな一日、起きては眠るなかにあつて、人々が遊ぶ声を聞くのである。

枕元には、雲から出た月のように輝く硯を置き、

ときに谷底の松の根元で、雪腴せつゆ(靈妙な菌類)を切り取る。

山賊どもは知事殿を畏れて消え去り、

人々は安心して眠りにつき、

知事殿は、牛を買って農耕に励むよう民を導き、

官の倉を開いて貧者に食べ物を配る。

虢州かくでの任を終えて帰ってきたならば、

これからは微官に甘んじて暮らそうとする貴君のもとに酒樽を携えて訪れ、

「無事の酒」を一緒に飲みたいものだ。

(1) 詩の前半は虢州かくの歴史と地理を踏まえて詠んでいる。都から西に官道を行くと、虢州は昔の函谷関の手前にあり、多くの人は長安、鳳翔方面へと急ぎ通過してしまう。(2) 中頃の句は、虢州は「月石硯」という硯の産地であることをいい、「雪腴」は松の根に生える菌類の茯苓ぶくりょうの中でもとくに靈妙な薬効があるものだという)

■道者院池上作

都の鄭州門ていから五里のところどうしゃいんに道者院という有名な寺院があった。そこを訪ねての詩。

(鄭州門ていといえば、鳳翔府ほうしょうに赴任する際に、この門を出て弟に別れの詩を詠んだことが思い起こされる(第2章18ページ)。それは25年前であった。この詩はそのこととは

全く関係のない、穏やかな小品である)

馬を下ると、
よい客人に出逢ったので、
酒を携えて小さな池のほとりで飲む。
清々しい風が荷の葉を乱し、
細やかな雨に魚が顔を出す。
井戸の水は好く、氷のように齒に当たる。
茶は甘く、眉を緩ませてくれる。
帰りの道でさらに静かな風に吹かれ、
詩を作るよう、真個に促されたのだと知った。

■次韻子由送千之侄

伯父の蘇渙には不欺、不疑、不危の3人の息子がいて、蘇軾が黄州に流されたころに蘇不欺が亡くなったことを前に見ている(第6章121ページ)。
その蘇不欺の次男の蘇千之がしばらく都に滞在した後に郷里に帰ることになり、蘇轍が送別の詩を作った。これはそれに蘇軾が次韻したもの。
(蘇千之の母の蒲氏は、先に見た蒲伝正(第7章139ページ)の姉妹であったようで、この詩の前半では、蒲と蘇の家を松と楠に喩え、ともに末永く栄えてゆくようにとの願いを詠んでいる。蘇軾と蒲伝正が遠縁ながらも親類であるのなら、蒲伝正に向かってかな

り厳しいことを言っていたのも理由あることとして理解できよう)

江かわのほとりの松と楠は、深く繁った上に、さらにまた深まる。

年を経た幹きのこに菌が生え、

下から孫の枝が出て、林のより高くへと飛び出す勢いで伸びる。

山全体に吹きわたる風は、竜が歌うかのような音を響かせる。

白髪になった私はまだ帰郷する算段が立たないのだが、

青あざいぎ衫（無官の象徴）の君は天下すくを済すくおうとの心こころをなお持っている。

門を閉ざして三千の文章を書くがよい。

才能ある人を求めて席を蹴っても探しにゆく人がいまの世にもきついているのだから。

（この詩からすると、蘇そ千せん之しは何か望みがあって都に出てきていたのだが、それが叶わずに帰郷するのであろう）

■次韻和王鞏

王鞏おうきやう（字は定国あざな）の詩に次韻した。王鞏はすでに何度も登場している。

李白りはくが讒言によって南方の僻地に流されたとき、

杜甫とほは町から東に離れた小さな村で自ら耕していた。

造物者は、李白と杜甫の才能を惜しまなかったのではなく、

苦勞たぐみさせることでその言葉をより工たくみにしようとしたのだ。

おう

王君は年少のときから、

かめ

瓶から水をぶちまける勢いで文を作っていた。

王君と鋒先を争って脅かそうとした者もいたのだが、

太鼓を鳴らして踏み出すような王君の勢いに驚いて走って逃げ去った。

そのような王君の才能を成就させようと、

天はいわゆる^{おひつじ}羝羊が^{まがき}藩に突き当たる困苦を与えたのである。

(王君が南方に流されていたときには、)

王君の孤独の光がかの地の片隅を照らし、

盆中に映る月のように輝き続けた。

都に帰り来ると、

かめ

こく

瓶どころか五石を容れる樽を傾けて注ぐほどの勢いで千首の詩を詠み、

あたかも^{とうえんめい}陶淵明がいまも生きているかのようで、

陶淵明を学んだ^{とうだい}唐代の^{い おうぶつ}韋応物をも超えるものがある。

昔のある人は、琴を奏でて、音に春の温もりを感じさせたというが、

それとて必ずしも人の理解を得られたわけではなく、

壊れた壁にしほし琴を立てかけておかなければならないこともあったのだ。

((1) 詩の冒頭では、^{おうきよう}王鞏を^{りはく}李白に、^{とほ}蘇軾を^{おうようしゅう}杜甫に喩え、^{いよ}歐陽脩が言うところの「愈

いよ^{きゆう}窮すれば則ち^{すなわ}愈いよ^{いよ}工みなり」を課すために、造物者が^{たく}試練を与えたと言っている。

(2) 結びの部分は、たぶん王鞏が世間から十分に認められていない不満のようなこ

とを口にしたのでたしなめたのだろう。蘇軾と王鞏の関係はなかなかいとおもしろい)

■用王鞏韻送其侄震知蔡州

王鞏おうきょうの甥おうしんに王震がいることはすでに本章 12 ページで見ている。上の詩と同じ韻を用いて蘇軾が王震に贈った詩が 2 篇残っていて、王震さいが蔡州の知事として赴任するのを見送った詩の方を訳す。

九門山きゅうもんざん(皇城)は天へと聳え立ち、
 一万の馬が朝一番に集まり来る。
 紅い塵の中で私は鞭を挙げて先を急ぎ、
 顔を見ても互いに声を掛け合うことはない。
 夜になって王鞏君おうきょうの清虚堂せいきょどうへと急ぎ、
 門を叩けば鶻かひさぎが驚いて翻り飛ぶ。
 貴君等の住まいは旧家の大邸宅、
 その前で来客の車がひっきりなしに雷のような音をたてている。
 貴君等に会うのは、月世界の楼阁のようなところ、
 檐ひさしに金の飾りが垂れる部屋で、燈火の前で酒樽を開いて語り合つと、
 あたかも夢の中にいるかのようだ。
 貴君等の家きやくちやうの人は玉牒(家の歴史を記したものを)を編集しているのだが、
 王鞏君も貴君も昔の名臣を継ぐような人であるから、
 次々に新たな事績を加え続けなければならない。

私は二君とは交際させていただいているけれど、
さらに他の方々を尋ね歩く気はさらさらない。

(1) 最後の部分は、蘇軾は家柄のよい人を好んで付き合っているのではなく、王鞏おうきやうと王震おうしんは特別なのだと言っているようだ。(2) 蘇軾は人気者で詩の贈答を求める者も多かった。このころに朱光庭しゆこうていという科挙に同じ年に合格した「同年」の者の2首の詩に次韻している。2人が親しくする条件は揃っていたのだが、これから半年後に朱光庭は蘇軾を攻撃する急先鋒に変わる。誰とどのように付き合うのか、権力抗争の渦巻く都ではすこぶる微妙な問題であった)

■跋歐陽寄王太尉素詩後

かつて歐陽脩おうようしゅうが王素おうそに寄せた詩の後に記した短文。歐陽脩の七言律詩を最初に掲げた後に、蘇軾の文章が続く。

豊楽坡前一醉翁、(豊楽ほうらくの坡おかの前まへにいたかの醉翁すいおう(欧陽脩おうようしゅう自身を指す)も

余齡有幾百憂攻。(余齡あどわずかとなって百の憂いに攻められている)

平生自恃心無愧、(日頃から心に恥じるることがないのを自負してきたのだが)

直道誠知世不容。(自分はなかなか世間には容れられないのをつくづ知った)

換骨莫求丹九転、(丹薬たんやくによって骨を仙人のものに入れ替える気などはないし)

栄名何待禄千鐘。(栄えある名も莫大な俸禄も求めたりしない)

明年今日如尋我、(来年の今日、もしも私を訪ねようと思ったなら)

穎水東西問老農。えいすい（穎水のあたりで、老いた農夫の居所を問うがよい）

これは欧陽脩が王素おうそうに寄せた詩である。

私は王素の子の王鞏おうきやう、王鞏の甥の王震おうしん、それに張彦若ちやうげんじやくともに宝梵ほうぼんに遊んだ。王鞏がこの詩を誦し、載仲達さいちゆうたつに贈った。載仲達はかつて欧陽脩に従っていた者である。

元祐元年四月、欧陽脩の門下生の蘇軾書く。

(1) ここにある欧陽脩の詩は治平4 (1067) 年に都で作ったもの。そのとき欧陽脩は種々の批判を受け、かねて用意していた穎州えいしゆうの住まいに隠棲することを心にほぼ決めていて、そのことが詩に詠み込まれている。(2) 詩の冒頭にある「豊楽坡」は滁州ちゆうしゅうにあり、欧陽脩は一時期、滁州に左遷され、豊楽坡に豊楽亭を建てた。そのころに「醉翁」と号したことは第6章344ページなどで見ている。(3) 「換骨」は骨を仙人ものに入れ替えて不老長生の身になること。「丹九転」は丹薬を九回煉って靈薬を作ること。「禄千鐘」は莫大な俸禄。穎水えいすいは穎州の近くを流れる川。(4) 欧陽脩はこの詩を詠んだ後、短期間だけ地方官を勤めたのを最後に、熙寧4 (1071) 年に政界を引退して穎州に隠退した。蘇軾が杭州副知事として赴任する前に、弟とともに穎州に欧陽脩を尋ねたことは第3章117ページ以下で詳しく見ている。(5) 王鞏は本章5ページで見たように穎州で職に就くことになったのだが、何らかの理由で赴任しなかったようだ。王鞏が欧陽脩の詩を唱えたのは、そのことと関係があるのだろうか。(6) 蘇軾と同行した者として名が挙げられている張彦若ちやうげんじやくは王彦若おうげんじやくの誤記ではないかともいう。王彦若は眼科医(第7章153ページでそのことを詠んだ詩を見ている)で、張方平ちやうほうへいの門下生であることから、

王鞏の親族ではないかとの説もある)

■用旧韻送魯元翰知洺州

洺州知事として赴任することになった魯有開（字は元翰）に贈った送別の詩。題に「旧韻を用い」とあるのは、かつて魯有開が衛州知事として赴任するとき作った送別の詩（第5章164ページ）の韻をそのまま用いたからである。魯有開とは杭州副知事時代からの長い交流がある（第4章145ページなど）。

私は東の坡のもとで、
わずか三畝の畑を自ら耕していた。
貴君は尚書郎の高官として、
百人の役人に対して頻繁に指示を出していた。
そのころは、蛙のような俗物どもが、太鼓を叩いたり笛を吹いたり騒ぎまくっていた。
私は永いよしみのある人々とも交わりを断ち、
三軒しかない村で老いて死ぬばかりであった。
訪れる者もなく閑散としている我が門へと、
貴君だけが友情厚く手紙を届けてくださった。
遥かに友人の意を思っ、
落ちぶれた私には熱く感じられるものがあつた。

年改まって私は皇城に来て、

白髪ながらもお上に代わって文章を作成するようになった。

かつての先輩について尋ねると、

逢うのは多くが後輩たちである。

貴君はしばし道観の管理を務めていた(窓際族になった)けれど、

知事として遠く旅立つ車に乗ることになった。

貴君も老いたけれど、自慢の髭がまだちゃんとある。

位を嗣がれたお上はまことに生れながらに聡明で、

民を救おうとお気持ちは、火から人を救うばかりに強いものがあり、

囚われて遠くに追いやられていた魂(蘇軾ら流罪となった者をいう)もいまやことごとく返ってきた。

貴君はかつて東郡の知事であったときに、

あらかじめ洪水を恐れて備えを為したので、

大河が北流して桑畑を沈め、濁流が塵埃を翻して古い河道に入り込んでも、

町は守られたのだった。

貴君の一寸の心は千歩の堤防に匹敵することを民衆は知り、

老人も幼い子も逃げ走ることなくすんだ。

めい 洺州に行かれて、ときに閑を得たなら、扉を閉ざして座り、

どうがん 道眼を濁らさないよう努めるのがよいであろう。

おうしゃぼつ 応捨筏(己を捨てて他者を助ける筏)に乗って、

む しょうげん
無生源(仏教の真理の湧き出る源)へと遡るのだ。

貴君が帰ってきたなら、

いす
夜に榻を並べて二人で仏の教えを論じ合おうではないか。

■奉敕祭西太一和韓川韻四首

これは皇室の公式行事を詠んだ詩。我々にとっては特に面白味のない作品であるが、都で高い地位にあればこそこのような詩も詠むという一例として訳出する。都の西郊外にある西太一宮^{せいたいつきゅう}で、皇帝の勅令によって祭事が行われ、蘇軾も参加した。その祭事を韓川^{かんせん}という人が詠んだ詩に次韻した。4首のうち1首。

其の一

ひ しゅく
聖主(皇帝)は新たに秘祝(祭官)を任命され、

臣下の代表者が豊年を神に乞い願う。

聖主の祈りに応えようと、

じゅきゅう
神君が寿宮にお出ましになるのだろう、

しゅくせん
夜中に肅然と靈風が吹いてくる。

(もとの詩を詠んだ韓川も、後に朱光庭(本章45ページ)とともに、蘇軾を激しく批判する1人となる)

■西太一見王荊公旧詩偶次其韻

せいいたいいつきゆう おうあんせき
西太一宮には王安石が作った詩が残されていて、蘇軾はそれにも次韻した。王安石はこれより少し前の4月6日に他界しており、そのことを詠み込んだ第2首を訳す。

其の二

樽の中にいくら名酒があっても、

墓に注がれたのでは虚しい。

聞くところでは、

きんりょう う い こう
金陵の烏衣巷のあたりも、

いまは草深く埋もれているとか。

きんりょう う い こう
(金陵の烏衣巷はかつて南北朝時代には天下第一の繁華街であった。それがさびれてしまっていると詠むことで王安石の死を暗示しているのである。蘇軾が金陵に隠棲する王安石を訪ねたのはこれより2年前のことであった(第7章49ページ))

■王安石贈太傅

てつそう
これは蘇軾が草稿を書いて哲宗が下した勅書。勅書の内容は、亡くなった
おうあんせき たいふ
王安石に皇帝より太傅の官(皇帝の補佐役)を追贈するというもの。

ちん いにしほ み あきら
朕は、古の初めから観てきて、そこに灼かに天意があるのを見て取った。

非常の大事がまさにあろうとすると、天は必ず世に希な異人を生み出す。その名はその時代において高く、その学問は千年にわたる価値を貫く。その智は道の真髓みちを究めるのに十分で、その弁舌はその言うところを実行させるのに十分であり、その瑰璋きわめてすぐれた文章は万物を藻飾いろどりかざるのに十分であり、その卓絶した行為は四方を風動すのに十分である。そして、その能力が用いられるや、天下の風俗は一年の間に風に靡くように変わってしまうのである。

王安石は年少おうあんせきのころに孔子こうしや孟子もうしを学び、老いてからは釈迦しゃかや老子ろうしを師とした。

六芸りくげい（儒家の古典）の遺かんがされた文章を全て網羅し、己の意で解釈を下し、諸子百家の陳べた跡などは糠粃かすたとして、民衆のあり方を一新した。

熙寧きねいのときに為すこと（政治の改革）があるのに遇うと、群賢せんどうの冠はじとして首めに用いられ、信任あつの篤いことは古今に比べられるものがなかった。いまにも功業が成就しようとするときに、遽いなかに山林に住もうとの興が起り、富貴などは浮かぶ雲のようなものたとして、履物を脱ぎ捨てるようにして大臣の職を捨て去った。漁師や樵きりとも分け隔てなく交わり、山野を歩いて鹿も群れを乱さなかった。進退ただしの美しさ、雍容さは皆が見習うべきものがあつた。

朕は政まつりごとに臨み天下を御める初めにあたって、（先帝を喪った）哀しみは極まりないものがあつた。三朝に仕えた老臣（王安石）を眷かざりみようとしたのだが、邈はるく大江の南に行ってしまった。王安石が作った規模システムを究め観て、その人の風采を想見したのであるが、まさかその終わりを告げる知らせが、朕が喪に服している間に届こうとは思ってもいなかった。どうして百年の寿命を満たさなかったのか、涙を流さずにはい

られない。

於戲、死生、あるいは用いられるか捨てられるかの際においては、誰も天に逆らうことはできない。贈賻をし、哀みつつ栄誉を与えるための文章を朕は作らずにはいられない。

特に寵することをもって師臣の位(太傅)を贈り、蔚しくも儒者の光となるように。庶幾のは、このことを知ってくれて、我が休しい命令に服してくれることだ。

(これは蘇軾が内発的に記したものではないものの、いくら皇帝の命令であっても、心に思ってもいないことを蘇軾は書いたりしないので、ここに示されている王安石の評価は、蘇軾自身の考えをかなりの程度反映しているといつてよいだろう。途中で「己の意かんがえで解釈を下し」(原文は「断以己意」(断じるに己の意をもってす))とあるのは、王安石が経典に独自の解釈を下し、それに基づいて科挙の解答を書くよう求めたことを言っていて、蘇軾は王安石の独断的なやり方を強く批判していた。ここは読みによってはかなりの皮肉であると見て取ることもできる)

■答張文潜書

3月に張耒(字は文潜)が都の太学の教官になるために上京してきた。その少し前に、張耒は自作の詩文を蘇軾に送って教えを請い、それに応じて蘇軾はこの手紙を書いていた。

(手紙は独特の文体で書かれていて、訳者にはそれを十分に味読するだけの力がなく、これまで訳してきた手紙の多くはいつもの「ずっぽ訳」である。張耒に与えたこの手紙

は非常に有名で、清水茂『唐宋八家文』朝日文庫（1979年）に詳しい解説があり、これに限ってはかなり正確な訳文となっている。手紙文の雰囲気をはほんの少しでも見ていただけるように、冒頭の部分だけ妙な読み下し調で訳す)

ぶん せん けんじょう ちゆうくん き ま こんにちは
文潜県丞の張君足下に頓首。

こぶさた こころ かけ みやこ き ことごとく てがみ じあげ
久別して思に仰てはいるのですが、京に到てからは公私ともに紛然して、書を奉
いじま する かついけな おてがみ どりあえ くらしむき よろしき し
る暇がありませんでした。忽と辱くも手教をいただきまして、且ず起居の佳勝を審
まこと けっこう まこと けっこう
り、至に慰であります、至に慰であります。

さくひん みせて(た)き くりかえし びり
文編を恵示り、三復感嘆しております。甚するのは、君がわが子由に似ていること
です。

弟の文章は実は私より優れているのですが、世間の人はわかっておりません。弟は私には及ばないと思っているのです。弟の性格として、他人に深く知られることを願っておらず、弟の文章もまた同じです。とらえどころなく広く、あっさりとしていて、一度読んで三度繰り返すとなるほどと思えてきて、秀でた傑作であることがようやく隠れたままではなくなります。弟が『黄樓の賦』を作りましたときは、自分でも張り切ってぼんくらどもを驚かせてやろうとしたようでした。ところがそれは私が代作したのだという者がいたのには、笑ってしまいました。これはきっと私の文章の最もよいところだけを見てのことなのでしょう。

今日ほど文学の衰えたことはありません。その原因がどこにあるかという、実に王
おうあんせき
氏(王安石)なのです。王氏の文章は善くないものではありません。問題は、人に

も自分と同じにさせるのを好んだことにあります。孔子であっても、人を自分と同じにしようとはしませんでした。弟子の顔淵がんえんは仁に優れ、子路しろうは勇に優れ、それを入れ替えるようなことはしませんでした。ところが、王氏は自身の学問をもって天下の学問を一つにしようとした。地味の肥えたところはどこも同じように作物が成長しますが、できるものはどこも同じというわけではありません。荒れて痩せた土地、塩分の多い土地は、見渡す限りただ黄色い茅と白い葦があるだけです。王安石が同じにしようとしたのはまさにこの「黄茅白葦こうぼうはくい」なのです。

近ごろ章惇君しょうてんに会いましたところ、このように言っていました。

「先帝は、晩年のころに、文学がさえなくなったのを非常に残念がられ、士ひとを採用する方法を少し変化させようと考えておられました。しかし、その時間がありませんでした」

いま意見を申し述べる者は、科挙で詩賦を課すことを復活させようとか、太学たいがくで『春秋しゅんじゅう』を講義するようしようとか言っております。非常に結構なことです。

私は老いました。後世の人々も、古いにしへの人の完璧な文章と同じようなものを読めるようにできるとしたら、黄庭堅こうていけん、秦觀しんかん、晁補之ちやうほし、陳師道ちんしどうと貴君等数人に頼るしかありません。聞くところでは貴君は太学の教授になるとのこと。ますます努力を重ねていただきたく思います。

『詩経しきやう』にこのようにあります。

徳韜如毛、(徳は毛のように軽くて誰もがができるはずのもの)

民鮮克挙之。(しかし徳を実践する者は実に少ない)

我儀図之、(私は友人とそれを行おうとするのだが)

愛莫助之。(残念なことに手伝ってくれる者がいない)

このほかにもいろいろありますが、まずはよくよく御自愛ください。たまたま朝酒を飲んで酔っておりましたところ、お手紙を持って来た人に返事を求められ、詳しく書くことができませんでした。

(1) 蘇軾^{じよ}が徐州知事であったときに、大洪水の惨禍^{こうろ}の後で黄樓を築いたことは第5章218ページなどで見ている。その黄樓に寄せたのが弟の「黄樓の賦」で、傑作とされている。(2) 王安石^{おうあんせき}が科挙を改革しようとしたときに、蘇軾が反対したことは第3章32ページ以下で詳しく見ている。かつて歐陽脩^{おうようしゅう}が科挙を改革したことで蘇軾の名が天下に知られたように、科挙と文学の潮流は完全に連動していた。王安石は科挙の採点に主観が入らないように、詩賦を課すことをやめ、また古典の解釈を一つに統一しようとした。それで、受験生は王安石が編集した参考書さえ学べばよいという傾向が生まれ、文章も画一化された。そのことは先に見た勅書にも記されていた。(3) 孔子^{こうし}が編集したといわれる『春秋』^{しゅんじゅう}は最も重要な歴史書として重んじられてきたが、記述が簡潔すぎて、本文を読んだだけでは何を意味するのかほとんど理解できない。王安石はそれを「官報の切れ端のようなものだ」として、学ぶに値しないと切り切った。王安石の考えは極めて合理的なものであったが、文化全般を肥沃にするものではなかった。(4) 章惇^{しょうじゅん}と会って話をしたとあるのが興味深い。章惇は改革派の中核的存在となっていたが、もともと蘇軾と章惇は親友で、蘇軾が獄に入れられたときには罪が赦されるよう諸方面に働きかけ、蘇軾^{じよ}が黄州に流されてからも手紙のやりとりがあった。蘇軾が都に帰還してか

かも、本章2ページで見たように司馬光との間を取り持つような助言をしたり、
 ここにあるように文学観を共有する会話を交わしたりしていたのだった。なお章惇は
 新法が次々に廃止されることに強く抵抗して朝廷での地位を失い、この手紙より少し
 後の閏2月下旬に汝州知事として都を去っているが、汝州の章惇に送った蘇軾の手紙
 が残っている（蘇轍は職務として章惇を厳しく弾劾し、それが起因となったのか、章惇は次第に
 蘇軾兄弟に対して憎しみを抱くようになる）。(5) 蘇軾の門下生で特に優秀であったとされる
 のが、いわゆる「蘇門四学士」で、黄庭堅、張耒、晁補之、秦觀の4人である。「蘇
 門六学士」ということもあり、陳師道と李廌が加わる。蘇軾のこの手紙には「六学士」
 のうちの5人が挙げられている。蘇軾は、黄州の東の坡で自ら耕す罪人から、一国の文
 化をリードする立場に大きく変わったのである)

■次韻子由送陳侗知陝州

6月10日、陳侗（字は成伯）が陝州知事に任命されて都を出て行くこと
 になり、蘇轍が送別の詩を作り、蘇軾が次韻した。

(なおこのころに蘇軾の長男の蘇邁は徳興の尉をやめて、別の任務に就いたようだ)

昔、四頭の鉄製の牛を黄河に沈め、その上に橋を渡したという。

その牛のように、

天に漲るような流れの中でもしっかりと踏ん張り、鞭で打たれてもびくりとも動かない、

それは誰なのか。

昔、徐邈^{じょぼく}は常に同じ生き方を貫いていただけだったのに、

世俗がいつも変化し続けたために、

徐邈の評判は上がったたり下がったりした。

貴君とかつて別れてからのことはいまさら言うまい。

世間の事は空に浮く雲のようで、

数限りない人が、即墨阿^{いつかり}の毀誉褒貶の内に置かれ、

かつての良い評判は実のない虚声ばかり、

促織^{こおろぎ}のように音を立てるだけで実際に機^{はた}を織りはしなかった。

貴君と会って笑い合うのは、

どうしようもなく白髪だらけになったこと。

いまや天を駆ける勢いの馬はみな大空の雲を踏み、

飽きるほどのまぐさを得て長く嘶いている。

皇城の庭には天下の宝、種々の武具がみな集まっている。

貴君だけが手を振って都を去る……

粗末な衣服でやってくる貴君を、

歓迎する民衆の歌をかので地で聞くことになるだろう。

陝州^{せん}は古の楽国^{いにしよ}で、金の盃に酒を注ぐような奢侈^{がくこく}の地とされているが、

貴君が赴任したなら、

統治の仕方はすぐに全く新たなものとなるだろう。

それによって怒る者もあれば、喜ぶ者もあれば、長く怨む者もあるだろう。

これ以上のことは申すまい、
評価は後の人に委ねればよいのだ。

(1) この詩は、蘇軾の次韻の詩によくあるように、韻に合わせて数々の故事を力づくで並べている。そのため、散漫かつ難解な作品となっている。全体としては、政治の大きな変動の中にあっても己を貫く生き方を賛美し、陳侗ちんどうを励ましたもので、そのことが伝わる程度に大まかな訳し方をした。(2) 詩の中ほどにある「即墨阿そくぼくあ」（「でたらめ」とルビを振った）について説明を加えておく。昔、齊せいの威王いおうが即墨そくぼくの知事を都に呼び、「君が即墨に赴任して以来、わしは君のことを悪くいう報告ばかりを聞いた。そこでわしは人を派遣して即墨の実態を調査させたところ、よく治まって民が豊かに暮らしていることがわかった。君の評判が悪かったのは、君がわしの側近に付け届けをしなかったからだ」と言って、大いに褒めた。威王あは阿の知事を都に呼び、「君が阿に赴任して以来、わしは君のことを良くいう報告ばかりを聞いた。そこでわしは人を派遣して阿の実態を調査させたところ、全く治まっておらず、民衆が苦しんでいることがわかった。君の評判が良かったのは、君がわしの側近に付け届けをしたからだ」と言って、即座に死罪を言い渡した。地方官の業績が正しく君主に報告されないことをこの詩では「即墨阿」の3文字に籠めたのである。つまり改革政治の弊害としてそのようなことがあったと言っているのである)

■ 呂惠卿責授建寧軍節度副使本州安置不得簽書公事

りょけいけい
呂惠卿の名をこれまでも何度か見てきた。改革の実行部隊の指揮官と

^{おうあんせき}
 して王安石が抜擢した人物で、呂惠卿の辣腕がなければ改革の実行はも
 っとのろのろしたものになっていたであろう。呂惠卿は己の力を過信し
 て次第に増長し、王安石が上にいるのがうっとうしくなり、策略によって
 王安石を失脚させた。呂惠卿にとっての改革は、自身が権力を握るチャン
 スを与えてくれるものであって、理念などは二の次だった。皇帝が代替わ
 りして保守派が朝廷に復帰すると、呂惠卿は厳しく断罪され、誅殺を求め
 る声も大きかったが、6月23日に都からの追放が言い渡された。これは
 そのときに呂惠卿に示された勅書で、蘇軾が起草した。題名にある「本州^{ほんしゅう}
^{あんちふとくせんしよこうじ}安置不得簽書公事」と全く同じ字面を蘇軾が^{こう}黄州に流されたときにも見
 ている（第6章2ページ）。指定された場所で軟禁状態に置かれ、公務に関
 わること禁じるものである。

（この勅書には、呂惠卿のさまざまな罪状が故事を踏まえた字句の中に籠められてい
 る。ここでは大意が通じるよう、上辺をざっと撫ぜるだけの訳文とした。ここで注目す
 べきは、呂惠卿を用いたのがそもそもの誤りだった（≒そもそも改革を推進したことが
 誤りだった）とするのは神宗^{しんそう}（つまりこの勅書を言い渡す^{てつそう}哲宗の父）を貶めることにな
 るので、そのようには決して言わないよう格別の配慮^{こう}をしていることだ）

勅書に言う。

大悪人が高位にあると、民衆は安らかに暮らせない。法の番人がでたらめな刑
 の裁量をする、人々は異論を唱え出す。天にみなぎるそのような罪を正すことが

できるのなら、永く後世の模範となるであろう。

汝(呂惠卿)はちつぽけな升のような才能と、細かいところをひっかくだけの知恵をもって、宰相(王安石)に諂い仕えて朝廷の高官に昇った。禍を楽しみ功を貪り兵を好み殺を喜び、民衆から収奪することをもって仁義と置き換え、法律をもって儒学の經典と置き換えた。初めに青苗法を建て、次に助役法を行い、さらには均輸法で国が商人と利益を争うような政策を実施し、民衆は飼っている鶏や豚に至るまで目こぼしなく取り立てられるようになった。国を蝕み民を害するような連中が我先にと腕まぐりしてそこに加わった。

先帝(神宗)は賢者を用いるのが十分ではないことを恐れ、円が転がるように人々が善に向かってゆくことを望まれた。古の堯が罪人も試してに用いたように、先帝は汝を採用したのだが、孔子が弟子の宰予を「おまえは終生がらくたでしかない」と叱りつけように、汝が生来の奸を露わにしたときには都から厳しく追放した。それでも、過ちを改めたであろうと考えられて、また少し重い職務に戻された。ところが、皇帝をたぶらかすようなことを陳上したために再び地位を落された。先帝は反覆して教戒されたのだが、汝の悪心は改悛することがなかった。先帝が、汝が軽々しく事実を捻じ曲げることを戒めたお言葉はいまもありありと残っている。

汝は仲間へ引き入れた者とともに君主を欺いた。汝は仲間とした者とは初めは足を摩ってやるほどまで親しくしながら、ひとたび反目して怒ると、噛みついて次々に大獄を起し、私的な手紙まで暴いて罪に陥れ、一党を率いて攻撃し、天下の半分までを罪人にし、汝に賄賂を贈るものが全国に及んだ。しかも、再び用いられた

年には西辺で紛争があり、汝は妄りに新たな戦略を立て、旧来の枠組みを変えようとした。とち狂った^{はかりごと} 謀を無理やりひねり出し、結局を大敗北を喫してしまった。大きな口を叩いたことがここに及んで、いまさら涙を流しても、もう遅いのだった。

朕が皇位を継いだ最初に、辺地を安んじる詔を出した。朕の号令は汝の謀が偽りであったことを明らかにし、賊人を戒めるためのものであった。汝が国を迷わし、不道を行ったことは古から稀にしか聞かないものだ。それでも誅殺することを赦し、遠く流すだけとする。国は常に法があり、朕が敢えて私の^{わたし} 処罰をするのではない。

■和王晋卿

蘇軾と連座して罰せられた者の中に王誥^{おうしん あざな しんけい}（字は晋卿）がいた（第6章2ページ）。王誥は皇帝の婿として特別に恩遇されていたしながら不埒な行いがあったとして他の人よりも重い処分を受けた。王誥も政権交代によって都に復帰した。その王誥の詩に和した。序文がある。

駙馬都尉^{ふばとゐ}の王誥^{おうしん}は、宋初の功臣王全彬^{おうぜんひん}の子孫である。

元豊二年、私は罪を得て黄州に貶められた。王誥にも累が及んで、遠く流され、互いに音信がないこと七年に及んだ。私はすでに召されて朝廷に用いられ、王誥もまた朝廷に帰還し、宮殿の門の外で出会った。感嘆の余り、王誥は詩を作り、私に渡した。その詩は、悲しい感慨を物に託し、窮阨^{きゅうやく}に陥ったことを怨まず、泰然として、驕るところがない。貴公子の志がこのようであることを憐れみ、その韻に和した。

(冒頭に「駙馬都尉」とあるのは、昔、皇帝の娘を娶った者に駙馬の職を与えたことから、「駙馬」は皇帝の婿の別称となった。王全彬は宋の天下統一に顕著な功績のあった人。そうしたことから王誥を貴公子と呼んでいる)

東坡先生は、かのとき東の坡で、独りで飲み、独りで舞い、
何にも身が属するところがなかった。

明るい月に対して酒を酌み、

月と影と先生と三者で楽しみは十分に足りた。

酔ったまま草むらの間で眠り、

毒虫に噛まれることもなかった。

醒めて、帰り行く雁を見送り、

千里の彼方へと目を寄せ、

そのとき、悵焉として公子(王誥)のことを懐った——

旅の間の食事に、玉のように輝くおいしいものなどはないだろう、

加餐(食事に気を付けて養生せよ)の字を書いて、飛ぶ鳥に托して遠く送ろうとした。

しかし、

干からびた魚が泡ぶくをかけあうようなことをしたところで、

牛ほどもある己の大きな罪(王誥を巻き込んだこと)を救うことはできないと知った。

吾が生は寄せるがごときのみ、

何者かが禍福を我が身に与えるのではない。

禍も福も忘れるのがよい、

昨日の夢を追うようなことをしても何もならない。

その後、私はお上に願い出て、自ら農耕することを許され、

湖と山の間で老いの日々を送ることとなった。

二頃けいの田を開き、十年後に実が成る木を植えようとした。

まさか、この老いた眼で、宮殿の金の燈火を見ようとは思いませんでした。

公子もまた生きて還りかえ、知事の職を授かることとなった。

人の賢と愚にはもとより定まったものがあり、

職務にもまた各々守るべきものがあるのだろう。

文章を作るのは特別なことではなく、

医术や卜術と同じように一つの技であるのだ。

朝廷はいま西方に注意を払わなければならない、

羌虜きやうりよ(外敵)は驕りたかぶって、またに宋に伏さずにいる。

遥かに知るのは、あちらでは、重陽ちやうようの節句の酒も、

白い羽の矢で菊の花を杯に落して飲んでいるとか。

羨むのは、君がまことに將軍の家の生まれであること、

顔には武人としての意気が浮かんでいるではないか。

朝廷から長いひも纓を与えてもらって、

一戦して、敵将を捕らえ、失った地を回復してほしい。

(1) この詩には、しばらく見ていなかった蘇軾の得意のセリフ「吾生如寄耳」が詠み

込まれている。王誥に自身の人生哲学を伝えようとしたのだろう。(2) 詩の終わりの部分は、将軍の子孫として西方の前線で手柄を挙げよと、叱咤激励している。蘇軾は西方で再び戦火を交えることを望んでいるのではない。王誥が罰を受けたにもかかわらず、貴公子としての豪華な暮らしぶりを必ずしも改めようとしていないので、詩文にうつつを抜かしたりしてはいかんぞと突き放したのだろう。先に王鞏おうきやうに苦言を呈したのと同様である)

■司馬温公神道碑

9月1日、司馬光しばこうが亡くなった。高太皇太后こうたいこうたいごうによって朝廷に呼び戻され、国政を指揮することわずかに1年であった。皇帝は司馬光おんこくこうを温国公に追封し、その勅書を蘇軾が起草した。北宋の二大巨頭おうえんせきというべき王安石と司馬光に皇帝がそれぞれ追贈、追封した勅書を続けて蘇軾が起草したのは偶然とはいえ巡り合わせのようなものを感じないわけにはいかない。蘇軾は司馬光の伝記の基礎資料となる「司馬温公行状しばおんこうこうじょう」も執筆し、さらに元祐げんゆう3 (1088) 年1月に司馬光が埋葬されたときに、墓所に通じる道に建てられる碑に刻む文章「司馬温公神道碑しばおんこうしんどうひ」も書いた。ここでは、蘇軾の個人的な見解が比較的強く出ている「神道碑」を読んでおこう。これは『唐宋八家文読本とうそうはつかぶんどくほん』にも採られ広く読まれてきたものである。

皇帝陛下てつそう(哲宗)が即位されて三年、朝廷は清明で、百般の政務は時に合致し、

民衆は安心して暮らせるようになり、風俗は一変した。(司馬光の徳が亡くなった後にも及んでいることを以下に述べる)かつては軽薄であった人々も皆が心を洗って身のあり方を改め、務めて忠に厚い人となり、それぞれ己の行動を自重し、人の過ちを言い募るのを恥じるようになった。中国は太平無事で、四方の諸民族は頭を下げて中国に指示を仰ぐようになった。ただ、西羌と夏国だけは叛したり服したり一定することなく、毒心を懐いて中国のことを悪く疑い、入寇を繰り返した。皇帝陛下は諸将に武器を備えたまま戦うことなく、中国の姿勢を示すよう命じられた。数カ月足らずで、西蕃の大首領の鬼章青宜結が都にやってきた(宋朝の号令に服した)。夏国は十数万で涇原に寇をなし、鎮戎の城下にまで至った。五日経っても得るところがなく、遁れ去った。西羌の首長の元征声延は族人一万人とともに中国に降った。また、黄河はかつて曹村で決壊し、靈平に堤防を築いたのだが、今度は小呉で決壊して五年の間あたりに溢れたままとなり、朔方は騒然となった。しかし、今年(元祐二年)の秋は長雨が一カ月にわたったものの、黄河はあまり溢れることなく、冬に及んで水が地に入ることますます深く、北に流れて、大昔に禹が通した旧河道に戻るばかりの勢いとなった。

こうして皇帝陛下が望むところのものは、求めずして獲られ、逆に憎むところのものは、掃うまでもなく去っていったのである。それで天下の人々は皇帝陛下の意が天の意と一致していると知ったのである。いまや最高の統治が実現し、家に不足がなく、人が十分にいて、刑罰を用いる必要がなく、咸平、景德年間(先帝の治世)のようになるのを期待するまでになった。

ある人が私に尋ねた。

「皇帝陛下と高太皇太后陛下がどのようなことをなさってこのようになったのでしょうか」

私はこう答えた。

「『易経』の「大有の章」にこうあります。「上九。天よりこれを祐く。吉にして利にあらざるなし」。孔子はこの文章についてこう言っています。「天の助けるところは順なり。人の助けるところは信なり。信を履み順に思い、また賢を尚ふ。ここをもって天よりこれを祐け、吉にして利にあらざるなし」と。二聖(皇帝と高太皇太后)は身をもって信と順を天下に先んじて実践され、司馬公を用いて天下の士を招き寄せられました。信と順と賢の三徳をまさに具えられているのです。まして私が観るに司馬公は仁人であるから、天はこれを助けたのであります」

「どのようなことからそうだと知ったのでしょうか」

「司馬公は文章をもって世に名を知られ、忠義をもって君主と結ばれたお方です。朝廷の人々がそのことを知っているのはよいとしても、四方の人々は何によってそのことを知ったのでしょうか。士大夫がそのことを知っているのはよいとしても、農民も商人も兵士も何によってそのことを知ったのでしょうか。中国の人が知っているのはよいとしても、九夷八蛮(外国)の人々は何によってそのことを知ったのでしょうか(そこには天の不思議な働きがあることを暗示している)。司馬公が退いて洛陽に住んでいたときには、孔子の弟子の顔回が路地裏にいたのと同じように小さく暮らし、屈原が沼地に追放されたときと同じように疲労したありさまで、長らく人々から忘れられていま

た。しかし、その名が再び天下に聞こえると、雷が鳴るかのように、あるいは銀河が流れるかのように、どの家にもそのことが響きわたり、日差しがそそぐように人々の目に見えたのでした。司馬公の名を聞いた者は、いかに愚かで無知な婦人や子供であっても、あるいは^{どうもう} ^{ぎよ} 獐猛で御し難い^{いてき} 兵士や夷狄の者でも、さらには^{かんじや} 奸邪の小人、己を害する仇敵を激しく憎むような者であっても、^{えり} 衽を収めて顔色を変えて、深く嘆息し、そして涙を流さない者はいなかったです。

私は^{げんほう} ^{とう} 元豊の末に登州から入朝し、八州を通過して都に至りました。民衆は私が司馬公と親しいのを知ると、行く先々で数千人が集まってきて、馬の首の前で叫んでこのように言いました。「司馬宰相にお伝えください。謹んで朝廷から去らないでください、厚く自愛されて^{ひやくせい} 百姓(全人民)を活かしてください」。このような者が千余里の間、絶えることがありませんでした。都に至って士大夫の言うことを聞くと、司馬公が(先帝の国葬に参加するために)初めて入朝したときに、民衆がその馬にすがって、前に進むことができなくなりました。都を守る兵士たちが司馬公が来るのを見て、お辞儀をしたり^{ひざまず} 跪いたりして涙を流す者がたくさんいました。司馬公は驚き、(国葬がすむとすぐに)洛陽に帰ってしまいました。また、^{りやう} ^か 遼国や夏国が入朝する使者を派遣するときや、我が朝の使者が向こうに行くときには、向こうの人は必ず司馬公の様子を尋ねたものですが、司馬公が朝廷に招かれたと聞くと、遼国では敕令で国境を守る役人に、「中国では司馬公が宰相になる。慎んで国境での紛争を起こさないように」と命じました。

その後、司馬公が亡くなると、都の民は市を止めて、弔意を表しに行き、衣服を売

って香典を用意し、哭しながら車で行く者が千ないし万で数えるほどでした。皇帝陛下は趙瞻と馮宗道に命じて棺を護って洛陽に帰って葬儀を行わせました。趙瞻らが還ると、皆が言うには、「民は司馬公のために哭し、甚だしく哀しみ、哭すのは肉親を喪ったかのようにであった。四方から葬儀に集まった者は、数万人に及んだ。また嶺南の封州の父老が司馬公の御霊を祭り、仏事を行って司馬公に哀悼の言葉を捧げたが最も哀しいものだった。手に香を焚いて捧げて司馬公が葬られるのを見送った者はおよそ百余人で、天下の人々は皆が司馬公の像を画いて祀った」と。このようなことは人の力によってできるものなのでしょうか。天が相けたのです。一人の人間が天を動かすには必ず道に拠らなければなりません。「至誠一徳」(最上の誠と純粋な徳)でなければ誰もそのようなことはできません。

『礼記』にはこのようにあります。「ただ天下の至誠だけが人に本来具わっているものを全て発揮し尽くすことができる。人に本来具わっているものを全て発揮し尽くすことができるのなら、物に本来具わっているものを全て発揮し尽くすことができる。物に本来具わっているものを全て発揮し尽くすことができるのなら、天地の化育を賛けることができる」

『尚書』にはこのようにあります。「君臣の皆に一徳があるのならば、天心を享けるであろう」。またこのようにあります。「徳が一(全てにして純粋)ならば、動いて吉でないことはない。徳が二三(不純で乱れている)ならば、動いて凶でないことはない」。ある人が千金を与えても受け取った者は喜ばず、逆に、ある人が一言いっただけでそれに従って死をも厭わずに行動します。その違いは、誠があるかないかにより

ます。天まで満たすように降る雨も速やかに乾いてしましますが、一筋の糸のような雨だれは石を穿って穴を開けます。その違いは一であるか一でないかによります。誠にして一であるならば、古の聖人といえどもそれよりわずかでも優れているということにはなりません。まして司馬公はどうであったのでしょうか。

こうして司馬公の徳を論じてきた結論として、人心を感じさせ、天地を動かしたことがこれほどまでに大きかったのは、二つの語で言うことができるのです。つまり、誠と一です」。(以上が、天が宋朝の統治を助けることになった理由として、蘇軾が考えついたこと)

司馬公の諱は光、字は君実、その先祖は河内の人で、晋の安平献王の司馬孚の後裔で、その子孫の征東大將軍の司馬陽が今の陝州夏県涑水郷に葬られ、その子孫がそこに住むようになった。曾祖父の司馬政は五代十国時代の乱れに遇って官に仕えず、祖父の司馬炫は宋朝の進士に及第し、秘書省校書郎となり耀州富平県の知事で終わった。父の司馬池は宝元、慶暦の年間の名臣で、兵部郎中天章閣待制にまでなった。曾祖母は薛氏、祖母は皇甫氏、母は聶氏である。

司馬公は初め進士を甲科の成績で合格して仁宗皇帝に仕え、天章閣待制知諫院にまでなった。そのときに大議を提出して、皇族の子を皇太子に立てて、宗廟を安んじられるように申し上げた(仁宗には男児がなく、その後継者を誰にするのか、仁宗はなぜか決めるのをずっと拒んでいた)。宰相の韓琦等はその提言によってついに大計を定めた。(それによって皇位に就いた)英宗皇帝に仕えて諫議大夫竜図閣直学士となり、陝西で募った義勇兵に入れ墨をするのは人道に悖ることを論じ、また内侍の任守

忠が皇室を乱したことを明らかにし、それを斬って天下に謝るべきだと主張し、任守
 忠はついに死を賜った。また、(英宗皇帝の実の父の)安懿王を(皇帝がいかなる礼法で
 祀るべきかで大論争となったときに)先朝の故事に準ずべきことを論じて、天下の人々
 はそれが正論であるとした。神宗皇帝に仕えて翰林学士御史中丞となり、夏国の
 武将である崑名山と横山の衆が宋朝に降ろうとしてきたときに、後に必ず紛争を
 引き起こすもとなるので納れてはならないと強く論じ、果たしてその通りになった。
 神宗皇帝に勧めて生前に尊号を受けるのを止めることにし、それが万世に伝わる
 べき法となった。王安石が宰相となって、青苗、助役の制度を定め、農地や水利
 の開発を行うために新法を定めようとしたときに、司馬公は真っ先にその害を言い、
 身をもって争った。当時の士大夫で、王安石に付かずに新法に利便がないとする
 者は、みな司馬公に依拠して自分の議論を重くした。神宗皇帝は司馬公を枢密
 副使に任命しようとしたが、司馬公は自身の主張が行われないのを見てその命令
 を受けなかった。端明殿学士となって都を出て永興軍の知事となり、留司御史台
 および提挙崇福宮の肩書をもって洛陽に退き、十五年を過ごした。今上陛下が即
 位されるに及んで、太皇太后が攝政となり、司馬公を呼んで門下侍郎とし、正議
 大夫に遷し、左僕射(宰相)とした。司馬公は最初に皇帝の詔をもって言路を開き、
 邪正を分別し、甚しく邪なる者十余人を入れ替えさせた。保甲法、保馬法、市易
 法、塩鉄茶法を廃止し、最後に助役法、青苗法も廃止した。また士を採用する方
 法を議論し、守令監司を選んで民を養い、民を富ませる方策を建てた。こうして最
 良の治世へと素早く向かって行ったのだった。

しかし、司馬公は病びん けうに臥し、元祐元年九月一日に宰相の位にあるまま亡くなった。享年は六十八であった。太皇太后はその知らせを聞いて慟哭され、皇帝陛下も涕めいどうを流されて止まらなかった。時に明堂を祀る儀礼が宮中で行われることになっていたのだが、式は行ったものの賀することはなかった。二聖は葬儀に臨まれて哭して哀あはまれること甚しく、朝儀をしばし止めることとなった。太師温国公を贈り、一品官かんの礼服で亡骸を包み、諡お伊なを文正とした。その親属十人を官員に取り立てた。司馬公は張氏ちやうを娶り、礼部尚書張存の娘で、司馬公より先に亡くなった。男子は三人で、司馬童し ぼ どうと司馬唐し ぼ どうは若年で亡くなり、司馬康し ぼ こうは現在秘書省校書郎である。孫は二人で司馬植し ぼ しよく、司馬桓し ぼ かんは承奉郎しやうほうろうとなっている。

元祐三年正月辛酉、陝州の夏県せん かの涑水南原そくすいなんげんの晁村ちやうそんに葬った。皇帝陛下はその墓道に碑を建てて、「忠清粹徳之碑」と名付け、そこに刻む文を私に書くよう命じられた。私はすでに司馬公の行状記を作り、また端明殿学士たんめいでんがくしの范鎮ぼんちんがそれを要約して墓誌を作った。そのために詳細をまた書くようなことはしないで、概略をここに論じることとした。

人々は皇帝陛下と太皇太后が司馬公を速やかに昇進させて十二分に活躍するようになされたことは見たけれども、神宗皇帝が司馬公を深く知っておられたことはわかっていない。士庶人から卿大夫に至るまで、師として敬い友と交わるときには、カとしては互いに依存し合うには足りなくても、道義として信じ合うことができ、己と同じであるのなら親しみ合い、異なるならば疎んじるものである。師や友の過ちを聞いて喜ぶ者はいないし、侮られて怒らない者はいない。まして君臣の間であるの

ならなおさらである。熙寧年間^{きねい}に朝廷の政事は司馬公の言うところと一つも相違するところはなく、数十回も書を提出し、十分に議論し尽くして憚るところがなく、政敵はそれに堪えられなかったのだが、先帝は安んじてそれを受け入れ、怒らなかつただけでなく、左右の輔弼の臣として用いようとした。さらに、その著わすところの書物^{しじつがん}『資治通鑑』に序文^{じえいかく}を与え、邇英閣において自らそれを読まれた。司馬公を深く知らずして、そのようなことになるものだろうか。二聖が司馬公を知ることは、自身と同じ考えであるところからくるのであって、先帝が司馬公を知るのは、自身と異なる考えでありながらだった。だから私は先帝は最も難しいことをされたというのである。

昔、齊朝^{せい}の神武皇帝^{しんぶ}は病気になったときに、その子の世宗^{せそう}にこう言った。「侯景^{こうけい}が河南^{かなん}を自分勝手に統治すること十四年、もろもろの將軍でそれに敵う者はいない。ただ慕容紹宗^{ぼくしょうそう}だけがそれを制することができる。わしが慕容紹宗を重く用いなかつたのは、そなたのために遺しおいたからなのだ」。また、唐朝^{とう}の太宗皇帝^{たいそう}はその子の高宗^{こうそう}にこう言った。「そなたは李勣^{りせき}には何らの恩を与えていない。いまわしは李勣を遠ざけて朝廷から出すから、そなたは李勣を大臣にして用いるがよい」。そして李勣を出して^{じゆう} 置州都督^{ととく}とした。齊の神武、唐の太宗はその隆盛をもたらした点において先帝に比べて足りないものがあつたけれど、昔の君主も子孫のために遠く慮つた点では皆類似している。つまり、自分自身はむしろその人のことを知らずにいたと言われようとも、その子が賢者を得る利を享受できるようにしたのである。先帝が司馬公を知るのも同じで、十分にそれを用いることがなかつたのは、このような理由からだったのである。

私は以上のように司馬公の事を書き、^{はいしゅけいしゅ} 拝手稽首して詩を作るものである。

於皇上帝、^{あゐおおい じやうてい} (於皇なる上帝)

子恵我民。^{わ たみ こ めぐ} (我が民を子として恵む)

孰堪顧天、^{だれ てん かはり た} (孰れか天を顧みるに堪えん)

惟聖与仁。^{た せい じん} (惟た聖と仁と)

聖子受命、^{せいし めい う} (聖子 命を受ける)

如堯之初。^{ぎやう はじ ごと} (堯の初めの如し)

神母詔之、^{しんぼ これ みことり} (神母 之に 詔す)

匪亟匪徐。^{すみやか あら おむろ あら} (亟なるに匪ず 徐なるに匪ず)

聖神無心、^{せいしん こころ な} (聖神 心無し)

孰左右之。^{だ これ さ ゆう} (孰れか之を左右する)

民自択相、^{たみみずか しょう えら} (民自ら相を択び)

我興授之。^{われ おこ これ さず} (我 興りて之に授く)

其相惟何、^{そ しょう こ なん} (其の相は惟れ何ぞ)

太師温公。^{たいし おんこう} (太師温公)

公来自西、^{こう にしよ き} (公 西自り来たる)

一馬二童。^{いちば にどう} (一馬二童)

万人環之、^{ばんにん これ めぐ} (万人 之を環る)

如渴赴泉。^{かつ せん おむむ ごと} (渴の泉に赴くが如し)

孰不見公、だ ころ み(孰か公を見ざらん)

莫如我先。わ さき し な(我が先に如くは莫し)

二聖忘己、に せい おのれ わす(二聖 己を忘れ)

惟公是式。こ ころ こ のつ(惟れ公に是れ式とる)

公亦無我、こう またわれ な(公も亦我無く)

惟民是度。こ たみ こ はか(惟れ民を是れ度る)

民曰樂哉、たみいわ たの(民曰「楽しいかな」)

既相司馬。すで し ぼ しやう(既に司馬を相とす)

爾賈於途、なんじ みち あきない(爾は途に 賈 せよ)

我耕於野。われ の たがや(我は野に 耕さん)

士曰時哉、しいわ とき(士曰「時なるかな」)

既用君實。すで くんじつ もち(既に君實を用う)

我後子先、われ おく し さき(我は後れん子は先んぜよ)

時不可失。とき しの べか(時 失う可からず)

公如麟鳳、こう りんほう ごど(公は麟鳳の如く)

不鷲不搏。し ほく(鷲せず搏せず)

羽毛畢朝、うもう ごとごと ちやう(羽毛 畢く朝し)

雄狡率服。ゆうこう ひき ふく(雄狡 率い服す)

為政一年、まつりごと な いちねん(政 を為す一年)

疾病半之。しつべいこれ なが(疾病之に半ばす)

功則多矣、こう すなわ おお(功は則ち多く)

百年之思。ひゃくねん おも(百年の思いあり)

知公於異、こう い し(公を異に知り)

識公於微。こう び し(公を微に識る)

匪公之思、こう こう おも あら(公を之れ思うに匪ず)

神考是懷。しんこう こ おも(神考を是れ懷う)

天子万年、てん し まんねん(天子 万年)

四夷来同。し い き どう(四夷来たり同ず)

薦於清廟、せいびやう すす(清廟に薦む)

神考之功。しんこう こう(神考の功)

((1) 終わりの詩の読み下しは笹川種郎訳註『国訳唐宋八家文』(1920年)に依拠した。

古めかしい四言詩で神道碑に重々しさを加えたもので、意味は気にせずに眺めていた

だきたい。(2) 司馬光は王安石が立案した新法を全て廃止する方針を執り、それに対し

て蘇軾はしばしば異なる意見を述べ、司馬光が不快感を露わにしたこともあり、蘇軾は

地方官として外に出ることを願い出たりもした。しかし、この「神道碑」では司馬光に

最高の賛辞を贈っている。(3) 余論ながら、「四方の諸民族は頭を下げて中国に指示を

仰ぐようになった」とあるのは、いわゆる中華意識が露骨に出た過大な自国礼賛の虚言

である。この文章の性格として、司馬光および宋朝を賞揚することが求められているの

で、このようにならざるを得ない面もあるのだが、蘇軾にしても時代の偏見から免れる

ことができかったのは事実である。当時の宋国を巡る国際情勢を先入観なしに眺める

なら、どこの国において「中国に指示を仰ぐ」といったことはなかった。^{りょう せい か}遼、西夏、^{きょう}羌といった国々との多国間関係のバランスの中で、むしろ宋にとっては不利な条約を結ぶことによって、唐代よりもかなり縮小した領土を保有いられたのだった。ただ文化的には宋は圧倒的な先進国で、日本も含めて宋から懸命に学ぼうと努めていたので、その点では「四方の諸民族は頭を下げて」という言い方をしてもおかしくはないのだろう)

^{し ぼ こう}(司馬光という求心力を働かせることのできる人がいればこそ、蘇軾のように異論を唱える者も内に含めて保守派はまとまりを保有いられた。しかし、司馬光が亡くなった途端、保守派内に亀裂が生じた。その一因となったとされる一つのエピソードが伝えられている。いろいろな書物にいろいろに書かれているが、ここでは、これまでも何度か見てきた^{しょう し ぶん けん こう ろ く}『邵氏聞見後録』(^{しょう はく}邵博著)の記事を引用しておこう。

^{し ぼ こう}司馬光が宰相の位に就いたまま亡くなったときに、^{てい い}程頤が葬儀を取り仕切り、もっぱら^{いにしよ}古の礼法に基づいて行おうとした。折しも宮中の^{めい どう}明堂で式典があったので官僚はそれに参加し、蘇軾はその後で司馬光の家に弔問に出かけた。

すると、程頤が引き留めて、

「あなたはお目出度い式典に参加されました。^{こう し}孔子は^{こく}『哭すればすなわち歌わず』(悲しみと喜びは両立しない)とおっしゃったではありませんか。ここから中に入ってはなりません

と、言った。

蘇軾は顧みることなく入り、程頤にこう言った。

「『論語』に『哭すればすなわち歌わず』とあるのは聞いています。しかし、『歌えばすなわち哭さず』とは聞いておりません」

程頤は反論できなかった。

(程頤は兄の程顥とともに、宋代の儒学研究の礎を築いた大学者。それを基盤として、後に朱熹がいわゆる朱子学を樹立する。程頤は官職には就かず、に学問に専念していたのだが、司馬光の推薦で哲宗皇帝の家庭教師となった。程頤は極度に厳格かつ非妥協的な性格で、融通無碍なところのある蘇軾とはもともとそりが合わなかった。程頤は、黄州に流されている蘇軾の羽目をはずした振る舞いを耳にしてはなはだ憤慨していた(第6章376ページ)ように、とにかく蘇軾のすることは気に食わなかったようだ。程頤が司馬光の葬儀を遠い昔の礼法通りに厳粛に行おうとしていたところへ、蘇軾が大勢の人々を引き連れて、たぶんがやがやと甲間に訪れたので、むっとなって、『論語』の言葉を引いて、「音楽が演奏されるような晴れやかな儀式に参加した後で甲間にくるのはけしからん」と難癖を付けた。それに対して、『論語』にあるのは、(人情の自然な流れとして) 悲しみのあまり泣いた後で歌って楽しむことはできないと言っているのだから、その逆ではない」と蘇軾が御座にこたえたの、程頤は次の言葉に詰まり、悔しい思いをした。さらに、ある書物によれば、蘇軾は「田舎教師がごちゃごちゃうるさいことを言う」というような意味の上品なことをつぶやき、それを耳にした程頤は非常に恨みを抱いたという。このあたりのエピソードの真偽のほどは必ずしも明らかではないが、蘇軾が当意即妙の皮肉交じりの言辞を吐いてしまうことはよくあり、それが後々までも尾を引くこともあった。かくて、司馬光の死後、保守派は程頤等の保守反動派と、蘇軾

等の革新的保守派と、そのどちらにも属さない一派の三つに分裂してしまうのだった)

■題王晋卿詩後

王誨おうしん あざな しんけい (字は晋卿) の詩の後ろに記した短文。王誨については本章 59 ページで見ている。

王誨おうしんに私の罪の累こが及び、私が黄州こうに謫居てつことなったとき、王誨おうしんは武当郡ぶとうに流された。飢寒に迫られて困窮するのは、もとより書生したいふ(士大夫)には常にあることで、私自身はそれをよしとしてくよくよすることはなかったが、王誨が貴公子でありながらこの憂患に患あはれられたことを非常に心配した。しかし、王誨は正しさを失うことなく、詩詞はますますエたくみになり、超然として世の外にあって楽しむようになった。

孔子こうしは言った。

「不仁ふじんの者は久やくく約やく(窮乏)するところにいることはできないし、久やくく楽しむところにいることもできない」

この言葉は王誨とは真逆のことを言ったのであろう。

元祐元年九月八日。

(この短文では『論語』の一節おうしんを引いて王誨を褒めている。手放しで賞賛したというよりは、かくあるべしとの激励の文なのだろう。王誨は地方官に任命されたもののそれを受けずに都に居続けたようだ)

■自題臨文与可画竹

9月12日、蘇軾は翰林学士知制誥に任命された。翰林学士というのは皇帝のブレーン集団の中でも特に将来を囑望される優秀な人が任用されるポストで、多くの者が大臣、宰相へと昇ることになる。栄えある新しい職務に就いて1カ月ほど経ったころ、文同（字は与可）（第7章235ページなど）の竹の画を見てこの詩を詠んだ。

文同先生の内面で清らかな興味が湧き出すと、

筆が縦横に動き、

あたかも鳳が舞い飛ぶかのようになる。

文同先生は言う、

「君（蘇軾）の風雅な心を借りて賞簞谷の竹を写してみたのだよ」

その画がここに留まって、

詩人（蘇軾）に吟詠を発せしめるのである。

（文同は賞簞谷の竹を好み、画に描き、詩にも詠み、それに応じて蘇軾が詩を詠んだことは第5章109ページなどで見ている。画師は亡くなくても画はそのままにある。そこに微妙な違和感があって、この詩が生まれたという解釈で訳してみた）

（蘇軾が就いた翰林学士知制誥の職は、皇帝に代わって各種の詔勅の原稿を書くことを求められる。中国の官僚政治は徹底した文書主義であったから、皇帝は常に大量の文書を発しなければならず、従って知制誥はなかなか多忙である。蘇軾がそれをどのよ

うに務めたのか、興味深いエピソードが伝えられている。ただし、それを記録して後世に伝えたのは周密しゅうみつの随筆『齊東野語』せいとうやごで、子お書名は「片田舎のよた噺」という意味の成句で、しかも周密は蘇軾より 200 年後れて生まれた人であるから、真実であるとの保証はない。ただし、周密は宋末期の代表的な知識人であるから、少なくとも当時は事実であるとして語り継がれていたことを記録したのだろう。

洪邁こうまいが翰林学士かんりんがくしであったときのこと。ある日、詔勅の執筆に当たって、朝早くから夕方までにおよそ二十余篇を書いた。仕事が終わりに、庭に出て歩くと、老人が花のもとで日向ぼっこをしていた。

誰かと問うと、老人は、

「開封かいほうの者で、代々翰林院の小間使いをし、いま八十歳を超えました。幼いころに、元祐げんゆう年間のもろもろの学士様のお姿を拝見しました。いまは孫がここで御用を勤め、こうして老いの日々を過ごしております」

と、言い、そして、

「聞くところでは、近頃は書類がはなはだ多くなりまして、学士様もさぞ御苦勞をなさっておられますよ」

と、言ったので、洪邁は喜んで、

「そうなのだよ。今日は二十篇以上も書かなければならなかった。しかし、もうすでに全部終わったのだ」

老人は感心して言った。

「学士様は目から鼻に抜けるお方、二十篇ありましても、学士様にとってはそれほど多くはないのでございましょう」

洪邁は誇らしげに、

「蘇^そ学士(蘇軾)だって、たぶんこれほど速くはなかったと想うぞ」

老人はうなずき、

「さようでございますなあ。蘇学士様もお速くはありましたけれど、そこまでではございませんでした。ただし、決して書物を調べたりはなさいませんでした」

洪邁は顔を赤らめ、自分の失言を取らした。

その後、客人に向かってこの話をし、

「人間は自慢してはならない。このときは本当に穴があいたら入りたかった」

と言った。

(1) 洪邁^{こうまい}は蘇軾^そよりも 100 年ほど後の人で、非常に博識で、『容齋^{ようさい}隨筆^{ずいひつ}』『夷堅^{いけん}志^し』といった巨大な著作物を遺した。南宋の朝廷に仕え、そのときの都^{りんあん}は臨安^{こう}(杭州)にあった。それで老人は開封^{かいほう}の人間だと言って、北宋の朝廷に仕えていたことを明かしたのである。老人が 80 歳をかなり超えていれば、年代的にぎりぎり嘘ではない範囲におさまる。(2) 詔勅は、その内容にあった古典を縦横に引用し、含蓄ある堂々の文章に仕立てる必要があり、洪邁といえどもあれこれ書物をひっくり返して調べなければ書くことができなかった。蘇軾は、詔勅であれ詩であれ、古典からぴったりの故事を引いてくるのはお手のもので、書物を参照することなく正確に引用するのはまさに神業であった)

■送賈訥侏眉二首

蘇軾の故郷は蜀の眉州である。賈訥という人が眉州の副知事として赴任することになり、この送別の詩を贈った。

其の一

かの年に私は蜀の地に空しく入ることを嘆いた。
 あれから峨眉山を見ることはなく、
 再び帰るのはいつであろうか。
 遙か遠くにいても知るのは、
 質素な衣服で赴任してくる貴君を歓迎する歌を童子たちが歌い、
 李知事が先祖を敬ってよくその地を治めているということ。
 貴君は道すがら鹿頭関に昇って、都の方へと飛ぶ雁に逢うであろうか。
 人日の節(一月七日)に、眉州の人々は町の東に出て蟆頤山に遊ぶのだが、
 きっとそこには私が見た梅がまだあるだろう。
 その昔、王褒は詩を歌って才能のある人を募ったというけれど、
 私は老いてもうそのようなこともできないので、
 王褒の子の王淵に比すべき貴君のような人を求めるのである。

(1)「かの年に蜀に帰った」とあるのは、父の喪に服して帰郷したことをいう。喪が明けて上京してからすでに18年、蘇軾は一度も帰っていない。(2) 終わりの部分の王

褒云々は、昔の著名人を引いて賈誼かいつのような優秀な後輩に期待したいとの思いを述べたもので、王褒についての解説は特にいらないだろう)

其の二

我が父の墓所ぼくいざんは蟆頤山ちうおうせんの東二十余里の老翁泉。

王淵おうえんのような貴君がそこに行ってくれるのなら、

私が植えた三万本の松が青々と繁っているのを見るであろう。

眉州びの父老はこの詩を見て私がまだ生きていることを知り、

貴君のために水に臨む部屋を開いて招き入れてくれることだろう。

そこから見てほしいのは、

松の一本一本がまるで竜のように生き活きとしているありさま。

そして聴いてほしいのは、

蕭蕭しょうしょうと降る雨の哀しげな音。

昔しょうこう、召公かんどうを慕った民は、かつて召公が雨宿りした甘棠の木を切らなかつたという。

それと同じく、眉州の人々は我が父の墓所の松を切らずに、

いつか我が父が蒼髯そうぜん白髪はくはつの姿で帰ってくるのを待っているのである。

(1) 蘇軾が父母の墓所に松を植えたことは第3章77ページや第5章35ページなどで見ている。(2) 召公しょうこうは周の時代に伝説的な賢者。立派な君主を後々まで慕うことを意味する「甘棠之愛かんとうのあい」という成句がある)

■送程建用

これも故郷^び眉州^{ていけんよう}に関わる詩。眉州の人の程建用は、かつて蘇軾の父と交流があり、科挙に合格して長らく官職にあった。このたび職を退いて帰郷することになり、その送別の詩。

^{ていけんよう}（程建用）は^{てい}蘇軾の母の程氏と同族なのだろうが、詳しいことはわからない

先生^{ていけんよう}は元来舌耕^{ぜつこう}の士（言論に生きる士）、

文章を作るなら、千頃^{けい}の湖のようにその言説は広がってゆく。

ところが、先生の倉の方はいまは空っぽ、

^{のうぜんかずら}菖^{のうぜんかずら}穎の花が自ずと開く（子孫の繁栄）のを待っている。

この十年、世の中は新説^{おうあんせき}（王安石が經典の解釈を自説で統一したこと）に苦しみ、

兒女は影のような拠り所のないものを捕えようとしてきた。

垣根を崩してわざわざ雑草だらけにし、

穀物のよい苗を誰も顧みなくなってしまった。

父に孝行を尽くす心は虚しく放り出され、

母を大切にする人は冷え冷えとした部屋で嘆息するばかりとなった。

昔は、履^{くつ}を織り、薪を采って、子を導いた母がいて、

辛勤して一つの道を守り、いかなる御馳走よりも真心から捧げる水がまさるとした子がいた。

今年聞くことになったのは、

過ちを廃し、正しきを起こすということ、

『春秋』もまたかつての光を取り戻すこととなった。

ここに先生は官職を改め、馬を飾って帰路に就く。

帰郷して晴れ晴れと笑うなら、

さっと襟のあたりを爽やかな風が撫ぜるであろう。

必ず都から金の花をあしらった詔書が届き、

名誉官職が授けられるであろう。

天は我らを欺くことはなく、

先生の寿命は亀や鶴のように永く続くのだ。

おうあんせき
(王安石が独自の解釈で経典の読み方を統一しようとしたことは本章51ページで、王安石が「官報の切れ端のようなものだ」と断じた『春秋』を再び太学で講義するようになったことは本章54ページで見ている)

■次韻李修孺留別二首

やはり蜀しよくの人である李修孺りしゅうじゆが帰ることになり、その送別の詩。李修孺がどのような人であるのかわかっていない。

其の一

私は十年流落の歳月を過ごし、

帰郷するとは、敢えて口から出して言わないようにしていた。

ただ、江湖の魚や鳥が私の心を知っているのだった。

思いがけず、雲や霧が掃われて晴天が現れ、

人々は白髪の人を呼び集めてこの先の安危を託すこととなった。

貴君の風流はまことに我らの先導として仰ぐべきで、

時代を濟う人物としてかねてから人々の記憶に刻まれていた。

私は何としてでも貴君を都に留めたく思う。

孔子が賢者を希求する詩を歌ったように、

誰かこの方を讃える詩を作ってくれないだろうか。

其の二

この人生において、何度別れの袖を振ればよいのか。

私は夢の中で、いまも黃州にあるかと疑うことがある、

この老いを託す山はどこにもなく、

一緒にいてくれるのは明るい月だけ……

窮迫のときも栄達のときも、家を思う意は同じ、

衰病のなかで人を見送るのは堪え難く悲しい。

さあ行くがよい、

劍南(成都)への帰路には、

孝婦がいたことで知られる姜師鎮がある、

その孝婦が母に差し上げた魚を、

故郷の水で煮て食べるのがよろしかろう。

(最後の部分は、子や孫に囲まれて平穏な余生を過ごすことを言うのだろう)

■次韻黄魯直赤目

これまでに何度かその名を見た^{こうていけん あざな ろ ちよく}黄庭堅(字は魯直)(第6章375ページなど)がこの年の始めに都に来た。黄庭堅が蘇軾の門下生を自任する一方で、蘇軾は黄庭堅を友人として遇し、たびたび詩を贈答し合ってきた。意外なことに、実際に会うのはこのときが初めだったようだ。さらに意外なことに、都において初めて黄庭堅と詩を和したのは、この年も終わろうとするころのこの詩だったようだ。赤目を患ったことを詠んだ黄庭堅の詩に蘇軾が次韻した。

詩を誦ずる者は、誰もが^{こうし し かに}孔子の弟子の子夏を見習わずにはいられない、

子夏が『詩経』の序文を書いたからだ。

子夏は子を喪った悲しみのあまり失明したというけれど、

貴君は目を患うことまでも子夏に学ぼうとしたのか。

歴史を記述する者は、誰もが^{さききやうめい}孔子が讃えた左丘明を見習うべきである、

左丘明が立派な歴史書を作ったからだ。

左丘明は失明してもなお史書を書き継いだというのだから、

いま史官の任にある貴君は左丘明を学ぶのがよいだろう。

天公(天の擬人化)は悪ふざけを好んで人に辛い運命を授けるのか、

優れた人々の明るい珠(眼)に幻の醫を生じさせたりもする。

頼りとなるのは、

このところずっと貴君が魚や肉を斥けて食べずにいること、

それに、わずか一つの燈火も、百の燈光、千の燈光に等しいという仏教の真理を貴君が得ていることだ。

蠅の頭のような小さな文字がまだまだ書けるのなら、

郷里に帰ることを願い出る表を書いて差し出すのも悪くはないだろう。

((1) 黄庭堅と親しい間柄であることから、失明という最悪の事態をも想定して、孔子に関連した故事を引いて励ましの言葉を与えたのだろう。(2) 蘇軾自身も赤目を患ったことは第6章 354 ページで見ている。その経験を踏まえて、魚や肉を食べることが目によくないというアドバイスをしている)

■書黄泥坂詞後

黄州の臨臯亭から東の坡に行く途中に黄泥坂という坂があり、その坂を詠んだ「黄泥坂の詞」を第6章 349 ページで見た。その詩の顛末を記した短文。

私は黄州にいたとき、大いに酔って「黄泥坂の詞」を作った。子供らがそれを草稿の束の中に納め、酔いから醒めた後でまた見ることはなかった。

昨夜、^{こうていけん}黄庭堅、^{ちやうらい}張耒、^{ちやうほし}晁補之が我が家に集まった。三客は机案をひっくり返したり、^{はこ}篋笥をひっかきまわしたりしたあげく、たまたまその草稿を得た。字の半分は読むことができなかったが、意味から推測して、その全貌をまた得た。

張耒は非常に喜び、自分で写したものを一つ作って私に遺し、元本を持ち去った。その明る日、^{おうしん}王誥からの手紙を得たところ、

「私は毎日毎日飽くことなく先生の書を買って集めています。近ごろ三匹の絹で先生の二枚の書と交換しました。最近先生がお書きになったものがありましたら、少々恵んでいただけませんか。そうすることで、私の手元にある絹がどんどんなくなってしまうのを止めてほしいのです」

とあったので、^{ちやうしんどうし}澄心堂紙を用い、^{りしやうあん}李承晏の墨でこの詞を書いて^{おく}王誥に遺るものである。

^{げんゆう}元祐元年十一月二十一日。

((1) この短文は、^{おうしん}王誥のために「^{こうていはん}黄泥坂の詞」を書き、その後書きとして添えたものである。(2) ^{そもんしがくし}蘇軾を師と仰ぐ門下生はたくさんいたが、その中で最も優秀であったとされるいわゆる「^{こうていけん}蘇門四学士」のうち^{ちやうらい}黄庭堅、^{ちやうほし}張耒、^{ちやうほし}晁補之の3人が集まり、蘇軾が書き散らかしたものをあちこち漁ったとあるのは、厳格な師弟関係ではなく、気の置けない友人のような仲であったのだろう。「学士」とあるのは、いずれも皇帝のブレンである館職(学士院のメンバー)を授けられたからで、特にこの年は、次の詩で見られるように蘇軾が学士の選考に関わり、張耒と晁補之が館職を授かっている。(3) 王誥は貴公子(本章61ページなど)で、蘇軾の書を買って集めるだけの財力があつた。絹3匹で蘇軾の

書2枚を得たとあるが、それはどれくらいの価格だったのだろうか。程民生『宋代物価研究』人民出版社（2008年）によると、宋朝は絹1匹＝銅銭1貫（1000文）を基準として物価を安定させようとしていたが、次第に物価が上昇して、哲宗皇帝の頃は絹1匹が銅銭1貫300文程度であったという。一方で、同じころに1人の人間が最低の生活を維持するには1日に20文を必要としたという試算がある。とすると、20文が5000円に相当すると考えても極端な誤りにはならないであろう。ならば、絹1匹は約32万5000円となり、蘇軾の書は1枚48万7500円ということになる。王誥にとっては買える価格帯であっても、数多く集めるのは厳しいということなのだろう。ついでながら、蘇軾の詩に、ある人が高級な硯を40貫で買ったという記述があり、ここでの計算では200日分の最低の生活費、約100万円ということになる。(4) 最後にある「澄心堂紙」は南唐時代から作られるようになった上質の紙。李承晏は宋代前期の著名な墨工である。このころ蘇軾は都の高官であったから、このような高級品も使えたのだろう

■武昌西山

11月、蘇軾は学士院（皇帝所属のブレーン集団）に新たに加えるメンバーを選抜する試験の委員となり、同じ役に就いた鄧潤甫（字は聖求）とこの詩を詠み合った。序文がある。

翰林学士承旨の鄧潤甫は、嘉祐年間（二十数年前）に武昌知事となり、いつも寒溪、西山に遊んだ。山中には今でもこのことを言い伝える者がいる。私は黄州に

謫居となり、武昌をいつも向こうに望み、しばしば寒溪、西山の間を往来した。

元祐元年十一月二十九日、私は学士院の試験官となり、鄧潤甫とともに玉堂で宿直し、たまたま昔話をした。鄧潤甫はかつて「元次山の窪樽の銘」を作り、西山の岩にそれを刻んだと言った。そこでこの詩を作り、鄧潤甫に和するよう求めた。武昌に我等の二詩を送って、先の銘の脇に刻ませようと思う。

(1) 黄州の対岸に武昌があり、蘇軾がその西山にしばしば遊んだことは、第6章78ページの詩などで見ている。(2) 唐の時代の元結(字は次山)は西山に遊び、窪んだ石を杯として酒を飲んだ。鄧潤甫の「元次山の窪樽の銘」はそのことを記したものである)

憶い出す――

春の長江に漲るのは漉した葡萄酒、

誰が栽えたのか武昌の官道の柳、

私は、樊口から春の酒を携え、歩いて西山の野の梅を尋ねた、

西山を上り始めて十五里、

両腋の風に乗って険しい頂へと飛んだ、

共に遊ぶ者は疲れ果てて九曲嶺で倒れ伏したが、

私は独り衣を褰げて呉王台に至った、

北を望み、中原(中国の中心地)はどこかと見たのだが、

あるのは夕陽が落ち行くなかの黄色い埃だけだった、

かいけんてい

解剣亭の前の路へと帰り来ると、

蒼い崖は、雲の波のうずくまるなかに半ば埋もれていた、

かつて唐の浪翁(元結の号)が、石を杯として酔ったという場所はなおあっても、

その古い意を嗣ぐ者はもはや誰もいないだろうと思っていると、

山の隈に公(鄧潤甫)の妙語が留められていた、

好事の者は、その碑が覆われてしまわないよう草や棘を除き、

ゆかりの蒼い苔が野火に焼かれてしまわないかといつも恐れていた、

そのとき、公に会ってみたいと思っても見ることはできなかった——

まさか、金鑾殿(仙宮=皇居)に向かうこ玉堂で、

白髪頭を並べて夜直をし、

蠟燭が短くなってゆくのを臥してともに眺めようとは。

暁の夢に、長江のほとりにいると見て、

春の雷のように鳴る銅環、玉鎖の音(宮中の建物を開く音)に驚かされる。

山中にあるべき我等は帳の内で空しく目覚め、

山の猿や鶴は我等がいないのを怨んでいるだろう。

江や湖は水が増えて鴻や雁が渡り来る季節、

せめて公よ、詩を作って武昌の父老に寄せようではないか。

その詩は万壑の松風の哀しい響きと和すであろう。

(1) 冒頭で長江の水を葡萄酒に見立てているが、同じことを黄州で作った詞でも詠んでいた(第6章97ページ)。(2) 樊口は武昌側にある長江の渡し場で、潘一家の営む

酒店があった。そこで酒を誂えて西山に登ったのだらう。(3) この詩には鄧潤甫^{とうじゆん ぽ}だけでなく 30 人余りが和し、それらに応じて蘇軾もまた和したのだが、その詩はひどく理屈っぽいのでここでは訳さない。こうした詩のやりとりによって武昌の西山は一躍有名になった。(4) 学士院の新メンバーを選抜する試験の結果は 12 月 7 日に発表され、
 「蘇門六学士」の張耒^{ちやうらい}と晁補之^{ちやう ぼ し}を含む 13 人が選ばれた。これは蘇軾が当時の知識人の頂点に立つことを示すような出来事であったのだが、目立った活躍をすれば嫉妬や憎しみを呼ぶもので、学士院の選抜試験の問題には神宗皇帝^{しんそう}や仁宗皇帝^{じんそう}を誹謗する意図が隠されたとして、蘇軾を非難する声^{こゝろ}が俄かに沸き起こった。その先鋒となったのが先に名を挙げた朱光庭^{しゅこうてい}であった(本章 45 ページ)。朱光庭は程頤^{てい い}(本章 76 ページ)の弟子で、師匠が恥をかかされた仇をとってやろうと激しく蘇軾を攻撃した。すぐに蘇軾は弁明^{べんめい}し、高太皇太后はそれに理があるとして不問に付すとしたのだが、その後もしばらく尾を引くのだった)

■書狄武襄事

宋朝は文官を武官の上に置いて文民統制を徹底したために、歴代の王朝の中でも軍事的に特に弱体で、名のある武将はほとんど出なかった。例外は狄青^{てきせい}で、一介の兵士から目覚ましい軍功によって枢密使(国防大臣)にまで昇り、死後は武襄公の諡^{おくりな}を皇帝から賜った。これは狄青の若い日のできごとを記録した短文。

武襄公(狄青)はもとは農家の子であった。十六歳のときに、兄の狄素が、姓名はわからないが同じ村の鉄羅漢と号する者と水辺で喧嘩をし、兄はその男を溺死させた。村の自警団が狄素を捕縛しようとしたときに、武襄公はたまたま畑に食事を届けようとしていてその様子を見た。

武襄公は言った、

「鉄羅漢を殺したのは僕です」

人々は狄素を釈放して武襄公を縛った。

武襄公は言った、

「僕は死から逃れようとは思いません。ただ、僕は鉄羅漢を救うことができます。生き返らせたいのです。もし僕をどうしても死罪にするのなら、その後で縛っても遅くありません」

人々はそれに従った。

武襄公は黙って神に誓った。

「もしも僕が貴人になるのなら、鉄羅漢を蘇らせてください」

そして、屍を挙げ、数斗の水を吐き出させると、鉄羅漢は生き返った。

その後、このことを知る者はいなかった。武襄公が亡くなり、その子の狄詒と狄詠が棺を護って故郷の西河に帰って葬ったときに、土地の父老がこのことを話した。

元祐元年十二月五日、私は狄詠と同じ官舎に勤め、夜に話をしてこのことを聞いた。

眉山の蘇軾記す。

■狄詠石屏

上の文にあった狄青^{てきせい}の三男^{てきえい}の狄詠^{あざな}（字は子雅^{しが}）が所蔵する石屏^{せきびょう}を詠んだ詩。石屏は屏風のような形状の石。歐陽脩^{おうようしゅう}が所蔵する石屏を、かつて蘇軾は詩に詠んでいて（第3章 119 ページ）、そこでは石屏にはもともと画が描かれていたけれど長い歳月を経てほとんど消えてしまったという理解のもとで訳したのだが、この詩では、石屏には画は描かれておらず、石の表面の模様から画を想像していると解すべきであるので、もしかすると歐陽脩の石屏もそういうものであったのかも知れない。

霏霏^{ひひ}として軽やかな素^{しろ}（雪）が点々と散りかかり、
重なる陰^{くら}さの中に、渺渺^{びょうびょう}とした光景が開ける。
風に舞う花^{しすい}（雪）は紫翠へと乱れかかり、雪の外に煙る林がある。
近くの雪は勢いが盛んで、遠^{こころ}くの林は意が殊に深い。
たまたま無事の人（俗世に煩わされない人）が顎を支えてこの石に見入るなら、
私の心^しを識ってくれるであろう。

■虢国夫人夜遊図

『虢国夫人游春図^{りょうこく}』という画が、現在、中国の遼寧省博物館にある。虢国夫人は楊貴妃の3人の姉の1人で、同じ時代の画家の張萱^{ちやうけん}が、馬上に

乗る男装の麗人としてその姿を描き、その画が北宋の皇室に伝えられ、北宋の最後の皇帝である徽宗が模写したのが現存する画であるという。一方、蘇軾は宋朝の高官である劉有方が所蔵する『虢国夫人夜遊図』を見て、劉有方の求めに応じてこの詩を詠んでいる。『夜遊図』も『游春図』と同じく張萱が描いたものとされ、五代十国時代の南唐の皇室に伝えられ、後に宋朝の宰相を務めた晏殊の手に渡り、劉有方を経て徽宗の元に帰したという。この詩の冒頭に「佳人自鞚玉花驄」（佳人自ら玉花驄（馬の名）の鞚をとる）と、虢国夫人が馬の轡を手にしてあるありさまを詠んでいるのは、現存する『游春図』の図柄（麗人たちが馬に跨って画面左から右へと歩み行く）と一致するので、『游春図』の原画が『夜遊図』であったのかも知れない。

玄宗皇帝の愛馬、玉花驄、

佳人（虢国夫人）は自らその手綱を取る。

走るありさまは、

燕が竜にまたがって翻り飛ぶかのようなようである。

金の鞭を挙げ、

誰が最初に明光宮（玄宗皇帝の宮殿）に入るかと道を争い、

宝玉の付いた釵が落ちても気が付かない。

宮中では、玉奴（楊貴妃の小名という）が琴を奏し、

かど かっこ
花奴(女官の名)が羯鼓(西方伝来の鼓)を叩くと、

花が開き、柳の若葉が萌え出てくる。

座中に待ち受ける秦国夫人(楊貴妃の姉)こそはまことに貴い人、

そこに、馬を走らせて虢国夫人が現れ、

塵一つ動かすことなく到着する。

このときに居並んだ明眸皓齒(美女の喩え)の誰をまた見ることができるのか、

ただ丹青(画)の中に涙の痕を残すだけである。

人間世界の出来事は、俯き仰ぎ見る間に、今がすでに昔となる。

かつて、陳(南朝最後の王朝)の最後の皇帝に張麗華(宮女の名)が微笑みかけたときには、

すでに隋の猛将、韓擒虎が門外に迫っていた。

かくて天下統一を成し遂げた隋の煬帝も、

揚州で遊宴に耽る間に臣下に殺害され、

呉公台の下、雷塘の路に葬られたのだった。

(この詩の後半に詠まれている陳朝の最後の皇帝の陳叔宝は一国の君主としては最低であったが、それだけに皇帝という存在がいかに愚劣であるかということを徹頭徹尾具現化した点である種の壮快感がある。すなわち、皇位にあったときは、国政を愚昧な大臣に任せ、自身は張麗華を始めとする美女たちとの遊びこうつつを抜かし、隋に攻め込まれて張麗華を殺され国を滅ぼされた後は、隋の皇帝の幫間となって15年余りのアル中生活を送った。蘇軾は陳叔宝や煬帝や玄宗皇帝のようになってはならない

戒めとしてこの詩を作ったのだが、『游春図』を模写した徽宗皇帝が数十年後に陳叔宝とよく似た運命をたどることになるとは、むろん知る由もなかった)

■如夢令二首

黄州知事の楊案（字は君素）に送った詞。楊案が徐大受の後任として黄州に来たことは第6章445ページで見ている。

其の一

為向東坡伝語、(東の坡へ言伝してください)

人在画堂深处。(かの人は皇城の奥深いところにいるのです)

別後有谁来、(坡と別れてから誰が来たのでしょうか)

雪压小橋無路。(小さな橋は雪に埋もれていませんか)

歸去、(帰り去こう)

歸去、(帰り去こう)

江上一犁春雨。(江のほどりへ、春雨のもと、一本の犁)

(都にあつてあらぬ非難にさらされ、黄州の東の坡を耕す日々に戻りたいと、切に懐うこともあつたのだろう。いまは冬、すぐに帰れば春の耕作に間に合うであろう)

其の二

手種堂前桃李、(私が植えた雪堂の前の桃李)

無限緑陰青子。(緑の蔭は無限に広がり、青い実がついたりしているでしょうか)

簾外百舌児、(簾すだれの外もの百舌ず鳥たちが)

驚起五更春睡。(春の午後の眠りを驚かすのです)

居士、(居士こじよ)

居士。(居士よ)

莫忘小橋流水。(忘れてはなりません、小さな橋の流れる水を)

(蘇軾おしかは東せつどうの坡の雪堂の春を思い起こしている。その雪堂を蘇軾が去って86年後に訪れた陸游りくゆうの紀行文を第6章489ページで見たが、そこに「堂の真南に橋がかかっている、札に「小橋」と書いてある。「小橋 流水を忘るる莫なかれ」の句から名付けられたものである」とあったのは、この詞のことである。詞の終わりは、黄州もの百舌鳥ずが「居士よ、居士よ、忘れるなかれ」と鳴いている声を、都にあって聞いているのである。それがすなわち、第一首で東の坡へ送った伝言に対する返事である)

■和周正孺墜馬傷手

元祐2 (1087) 年、蘇軾52歳。

周尹しゅういん (字は正孺あざな) が酔って馬から落ちて手を傷つけてしまったことを詩に詠み、それに和した。周尹は成都出身せいとの官員。

貴公みちは道を学び、

平生から完全な精神を有しているのであるからして、

酔って墜ちたからといって、

子供のよう自分のことを可哀そうに思ったりはしないし、

そもそも内に守っているものが傷つけられたりするようなことはない。

憂い顔であるのは、

父母から与えられた身体を損なうのは最大の不孝であると思うからなのだろう。

嘆く余り、中空に文字を書いた後では、

新しい詩はもうさっぱりとしている。

昔の人の文句ではないけれど、

右手に酒杯、左手に蟹があれば言うことなした。

貴君を落した馬を売り飛ばして酒代に換え、

郷里の友人を呼び集めて新年を祝って大いに楽しもうてはないか。

しゅういん
(周尹とはこの後いくつかの詩のやりとりが続くが、さほど興趣を誘うものではない
ので省略する)

■杜介送魚

と かい あざな き せん
杜介（字は幾先）が上京し、魚を贈ってくれた。その謝札の詩。杜介は
よう へいざんどう
揚州の平山堂の近くに住む友人である（第7章93ページ）。

新年には、お上からこうほうしゅ黄封酒を賜った。

するとすぐに旧友がてい び きょ鱸尾魚を分けてくれた。

狭い路地の奥にある門にも朝日が差し込み、
小さな庭でも雪を除くと春の野菜も少しだけなら得られる。
魚と聞いて、病みがちの妻も起き出して、
銀の糸のように魚を刻んでくれた。
子供らは喜び、
昔の物語のように魚の中から手紙が出てくるのではないかと待ち受ける。
酔^{もうろ}うちに眼は朦朧としてきて、
自分が帰る道はどこかにあるのかと尋ねると、
夕暮れの雨がしとしと注^{しょうこう}ぐ松江の流れがぼんやりと見えてくる。
(1)「黄封酒」は黄色い紙で封をした官製の酒。「鱣尾魚」は赤い尾の魚。二つを並べるとちょうど対句になる。(2) 終わりの部分は、上の詩と同じく、都から去ろうという思いを懐いていることを詠んでいる。松江^{しょうこう}は蘇州^そのあたりを流れる川。有名なその川の名を借りて、常州^{じょう}に用意した隠棲地をいうのであろう(第7章129ページ)。

■送杜介帰揚州

杜介^{と かい}が揚州^{よう}に帰るのを見送った詩。

私も貴君も、
再び都の門より入って、万事は空しいものだと知った。
春風のもと、二人して川の流れを見つめる。

かつての同輩はいま幾人が残っているのか、

目を皇城へと転じれば、ただ夢の中のようだ。

山で薬草を摘むなら、^{けい}薊先生(漢代の隱者)に逢うだろうし、

寺で禪を問うなら、^{ほうおう どう}龐翁(唐代の禪僧)と知り合いになるだろう。

そうだ、都から帰ろう——

近所の人々が笑って出迎えてくれ、

馴染みの木立はさらに高く繁りゆくであろう。

(杜介もかつては官員として都で仕事をしたことがあるが、いまは自由の身である)

■題憩寂図詩

蘇軾が^{こう}杭州にいた間に親しくした者に^{りゅうきん あざな しぎよく}劉瑾(字は子玉)がいた(第4章6ページなどで登場し、すでに故人)。劉瑾の息子は、蘇軾の伯父の^{そかん}蘇渙の娘(つまり蘇軾のいとこ)と結婚したということを先に記しておいたが、そのまた息子が以下の文に記されている^{りゅう しぶん ちゅうえん}柳子文(字は仲遠)である。柳子文がこのとき都で何をしていたのかはわかっていないようだ。

^{げんゆう}元祐二年正月十二日、蘇軾と^{り こうりん りゅう しぶん}李公麟は柳子文のために『松石図』を描いた。

柳子文はさらに^{とほ}杜甫の詩から次の数句を取って、李公麟に画を求めた。

松根胡僧憩寂寞、(松の根もとで外国の僧が寂寞の内に憩うている)

龐眉皓首無住著。(長い眉、白髪の頭、それは住まうところのない僧である)

偏袒右肩露双脚、(衣がはだけ、右肩と両の脚が露わになっている)

葉裏松子僧前落。(僧の前に、葉の裏から松ぼっくりがぽとりと落ちる)

その画が『憩寂図』で、それに蘇轍が詩を添えた。

東坡自作蒼蒼石、(兄は蒼い岩を描いて)

留取長松待伯時。(李公麟が松を描くのを待った)

只有兩人嫌未足、(二人はそれでは満足でせず)

兼收前世杜陵詩。(前世に杜甫であつたときに詠んだ詩も画にした)

そこで私はそれに次韻した。

東坡雖是湖州派、(私の画風を湖州派というのだが)

竹石風流各一時。(竹や石の風流は時に応じて変化するものだ)

前世画師今姓李、(前世も画師であつた者の姓は李)

不妨題作輞川詩。(王維の詩こそ画にするのがよいだろう)

文同はかつてこのように言った。

「私の墨竹の一派が近ごろは徐州じょにいる。私の竹には及ばないとしても、石ならよ
り優れているようだ」

この一つの公案こうあんについては、黄庭堅こうていけんに一句吐いてもらわなければならないだろう。

(1) この後に黄庭堅による書き込みが続くのだが、訳者には意味が十分に取れないの
で、原文だけを掲げておく。「或言、子瞻不当目伯時為前身画師、流俗人不領、便是詩
病。伯時一丘一壑、不減古人、誰当作此癡計。子瞻此語是真相知。魯直書」。② こ

こで画を描いた李公麟りこうりん (字は伯時) は北宋を代表する画家で、その名は第7章 151 ペー

ジですで見ている。このとき都で官職に就いていて、蘇軾兄弟と親密な関係になり、この後、頻繁に登場する。(3) 竹を得意とした文同とその親友の蘇軾に始まる文人画の流れを湖州派という。2人とも湖州に縁があったからだ。文同の言葉で「一派が徐州にいる」とあるのは、蘇軾が徐州知事であったときのことで、当時に都にいた文同は画を求められると、「吾が一派が徐州にいるからそちらに頼むがよい」と言って断っていた。

(4) 王維は自分の前世は画師であったと言っていた。それで李公麟には杜甫より王維の方がぴったりくと詩に詠んだのである)

■与張太保安道

ここまでのいくつかの詩文を見る限りでは、都にきて2度目の新年を迎え以降、穏やかな日々を送っているかのようなのであるのだが、実際にはそうではなかった。昨年しゆこうていの12月に朱光庭が先鋒となって始まった蘇軾攻撃(本章93ページ)は、年が改まってからふぎょうゆ 傅堯俞、おうげんそう 王巖叟といった人々が加わってさらに激しさを増し、蘇軾は弁明に努めるとともに都の外に出ることを朝廷に求めた。りょうとう 呂陶やおうてき 王覲等が蘇軾を守ろうと弁護すると、傅堯俞と王巖叟はこうたいこうたいごう 高太皇太后の前に出て蘇軾批判を繰り返した。朱光庭等の言い分は我々から見たら言葉尻を捉えた言いがかりでしかないのだが、とにかく蘇軾を追い落とすことが目的で、決して口を閉ざそうとしなかった。1月の終わりにこうたいこうたいごう 高太皇太后は当事者である蘇軾、朱光庭、傅堯俞、王巖叟の4人を呼び、はんじゆんじん 副宰相の范純仁から、蘇軾に罪はなく、この問題はこれで終

わりにせよと言い渡した。

ここに見るのは、ちょうどこのころに張方平ちょうほうへいに送った手紙。張方平はこれまで何度も見えてきたように蘇軾の大恩人でこのときは政界を引退して南京応天府なんけいおうてんふにいた（第7章145ページ）。

私は自分を俯仰コントロールするのが下手で、しばしば紛紛ごたごたを引き起こしてまいりました。今回のこともきっと詳しく聞かれておられることであらう。

このところ地方を出ることを四度ほど願い出まして、門を閉ざしてお上の御指示をお待ちすること二十日ばかりになります。

文母ぶんぼ（太皇太后）様は英聖であられ、深く真実を御覧になっておられ、德音とくおとが瑯然ろうぜんと発せられるや中外しゅうふくは聳服し、あまねく御指示が行き渡り、諸公しよこうは變和やわらぐのであります。

これまで物を申してきた数人の者はそのまま職に留まるとの御沙汰があるとのこと
が数日来聞こえ、明日皆が御前にまかり出ることとなりました。門を閉ざして家に籠
ることはこれでなくなりましようが、都の外に出ることを願うのは変わらないであらう。

私を深く知って下さっておりますので、筆を尽くすようなことは敢えていたしません。
お察いただければ幸いです。

不肖の私をお許ください。かねてからお教えたきながらいまだにこのようであり
ますのが恥ずかしく、手紙を前に心苦しくなりません。

(1) 大恩人に対して、少しぼかしながらも、己の心情を率直に漏らしている。手紙の冒頭で「不善俯仰」(自分を抑えることが不得手である)と記している。程頤に向かって不用意な言辞を吐かなければ(本章 76 ページ)、このようなことにはならなかったかも知れないと反省していたりするのだろうか、腹の内にあるものを包まず出すのが蘇軾の持って生まれた個性であり、魅力でもあった。ほぼ1年前に、司馬光が募役法を廃して差役法を復活させようとしたときに(本章 25 ページ)、蘇軾は強く反対し、2人の間で激論になった。蘇軾が何を言っても司馬光はどうしても聞き入れようとしないので、蘇軾は席を立って帰る際に、「司馬牛め、司馬牛め」と何度も叫び続けたという。「司馬牛」とは『論語』の中に出てくる人物であるが、それを借りて、音が通じる司馬光を牛のように動きの鈍い奴だと罵ったのである。17歳上で日頃から尊敬する人物に対してさえも、こういう皮肉な言葉を発してしまうのである。(2) 上に見た高太皇太后の裁きによって一件落着となればよかったのだが、蘇軾に対する攻撃はこの後何度も繰り返されることになる。宋代から元代までの歴史を編年体で記した『續資治通鑑』という書物は、この年の8月の記事で、この時期の政治情勢を次のように概括している。「時に呂公著一人が宰相で、群賢が朝廷にありながら、類をもって集うということをして制止できず、ついに洛党、蜀党、朔党の名称が生まれた。洛党は程頤をもって首として、朱光庭、賈易らが集まり、蜀党は蘇軾をもって首として、呂陶等が集まり、朔党は劉摯、梁燾、王巖叟、劉安世をもって首として、ここに集まる者が最も多かった。このときに、熙寧、元豊年間に実権を握っていたかつての大臣たちは職を停止されて遠くに置かれ、怨みは骨髓に入り、秘かに隙を狙っていた。朝廷にある者はそれを悟らずに、それ

ぞれ党を作って互いに批判し合ってばかりいた。ただ、呂大防^{りょたいぼう}は真正直で無党であり、
范祖禹^{はんそいう}、司馬康^{しばこう}は党を建てることはなかった」。つまり、改革派（新法党）を追放した
保守派（旧法党）^{しほこう}は司馬光のもとでは一つにまとまっているように見えていたのだが、
たちまち三派に分裂して足の引っ張り合いをするようになってしまったのである。こ
こに列挙されている人々は、すでにその名を見ているものが多く、特に呂公著は第7章
89 ページで、程頤は本章76 ページで、劉摯は本章31 ページで登場している。司馬康
は司馬光の息子である。蘇軾は元来党派を作って政治運動をするような人間ではなく、
たまたま同郷の人々を中心に蘇軾を慕う人々が集まっただけであったのだが、あたかも
地域政党を率いる党首として見られてしまったのだった（蘇門四学士とか六学士とかい
われる人々は必ずしも蜀人ではないし、郷里の人々に示す親愛の情は、上の詩で見ように政治的な
こととは無縁である）。出身地を異にする者が政治的に対立する構図ができてしまったの
は蘇軾の本意ではなく、地方官となってこうした抗争から抜け出ることをこれから2年
にわたって再三願い出るようになる。(3) ついでながら、宋は北中国に興り、南中国の
様々な地方政権を武力で征服した経緯から、当初は南北間の地域対立をいかに解消す
るかが大きな課題とされた。すでに見てきたように、南中国は武力では劣ったものの文
化的には先進地であったために、科挙で優秀な成績を修めるのは南中国出身者が多く、
北中国の人々は科挙の合格者が政権の中枢部を占めるようになってゆくの歓迎しな
かった。そうした南北対立は数十年かけて一応は解消されたはずだったが、ここに
至って地域間対立が別の形で生じてしまったのである)

■潘推官母李氏挽詞

詩題にある潘推官とは潘鯁のことであるという。潘鯁は、黄州で親しくした潘丙の兄である。その母の李氏が亡くなったので、この挽詞を詠んで寄せた。

長江の岸边に流された者がいた――

その者が住む東の坡に行き来するのは趣豊かな人ばかりだった。

かくて貴君とも次第に杯をともしようになった。

貴君の母君は、

息子が客をもてなす酒をあつらえるために髪を売った陶侃の母のようであり、

息子の教育ために三度引越した孟子の母のようでもあった。

今度また貴君の母君の世話になるとの約束は、

いまもはっきりと覚えているのに、

真新しい土がこんもりとお墓に積まれるとは思ってもよらなかった。

今年のうちには江湖に去ろうと私は考えている。

だから、次の春には、

山に連なって降る夕暮れの雨のもと、

母君の墓所へと導く並木の下を歩んでいることだろう。

(批判にさらされた蘇軾は、都で高い地位にあることに全く執着することなく、江湖(田舎)に去りたいと本気で思い、意思表示もした。しかし、そう単純に個人の希望通

りに事が進むわけではなかった)

■跋画苑

君厚くんこうという人のスケッチ帖『画苑』がえんを平叔へいしゆくという人から借りて、この跋文を記した。君厚も平叔あざなも字であろうが、どういう人であるのかは不明。

君厚くんこうの『画苑』がえんはしまっておくには箱をいっぱいにしてしまわずにすみ、持って出るときには牛や馬に汗をかかせたりしないですむ。明るい窓辺の片付いた机の上に載せてもよいし、くつろいで座ったり横になったりする友としてもよいし、書斎の壁に立てかけてもよい。巻軸をいちいち広げる面倒はない。それでいて、人物、鳥、魚が変化するありさま、山、川、草木の勝れた姿が、さんぜん粲然として前に繰り上げられるのである。好事の者の心に適うものだ。

元祐二年二月八日、平叔へいしゆくより借りて観て、蘇軾が書く。

(この跋文はそのまま『北斎漫画』ほくさいまんがに当てはまるかのようでもある)

■富鄭公神道碑

蘇軾が8歳のときに憧れた4人のスーパースターのなかに富弼ふひつ(鄭国公ていこくこう)がいた。富弼は4年前の元豊6(1083)年に亡くなっていて、この年の2月、神道しんどう(墓に至る道)に建てる碑に刻む文章を書くよう蘇軾は朝廷から命じられた。

(これは富弼の子の要望を受けて朝廷が蘇軾を指名したもので、この時期、後世に残すような文章は蘇軾に書いてもらいたいと思う者が大勢いたのだろう。富弼と蘇軾はそれほど親しい関係ではなかったようだ。富弼の墓は洛陽郊外に造られ、長い間地下に埋もれていたのだが、周辺の開発に伴って2008年に発見され、発掘調査が行われた)

宋朝が興ってから百三十年、いまや四方に虞れがなく、人も物も年々増加し、秦漢以来これほど盛んなことはない。このようになった理由は一つではないにしても、その要は兵(兵器・軍隊)を用いないことにある。用いても長期にわたらないのなら、智者が繁栄を謀り、仁者がそれを守ることで、無窮に伝えてゆくことが可能である。遼国(契丹)が晋(五代十国時代の王朝)の天福年間に幽州、薊州を占拠してから、北方の国境地帯では警戒を怠ることができず、安心できない歳月が六十九年にわたって続いた。

宋の景德元年、遼は国を挙げて来寇し、定武を攻撃し、高陽を囲んだ。宋は勝つことができず、ついには徳清が陥落し、天雄も攻め込まれてしまった。真宗皇帝(宋の第三代皇帝)は宰相寇準の提案を用いて、親征の策を決した。皇帝が澶淵に出向き、諸道の兵が行在所に大集結したことで、敵は動揺した。戦いが始まると、遼国の猛将、順国王撻覽を射殺し、そのために敵は恐れ、ついには和睦を求めてきた。そのとき諸将は黄河のほとりに兵士を集め、敵が帰るのを待ち受けて、精兵をもってその背後を突いて全滅させることを求めた。敵は怯え、哀を皇帝に求めた。皇帝は言った。「遼国にしても、幽州、薊州にしても、その人民は皆が吾が

民である。どうして多くを殺せようか」。かくて諸将に対し、兵を留めて攻撃しないよう命じた。遼国は帰国を許され、これより好を通じ、約束を守って、国境を犯さないことが三十九年続いた。(この部分は、宋側にひどく傾いた記述になっている。実際には、和平はかなり際どく成立し、宋から毎年多額の金品(歳幣)を贈ることで遼国は国境を守ることを約束したのだった。これを「澶淵の盟」といい、長く遵守された二国間の和平条約として世界史上特筆されるものである)

その後、夏国の趙元昊が宋に叛し、西方で戦争が何年も続き、長く勝敗が決まらなかった。遼国の大臣の中に貪欲で勲功を喜ぶ者がいて、我が方が臆病かつ戦争を嫌っているとみて、我が方を動揺させて、晋の高祖がかつて与えたことのある関南の十県を獲得し直したらどうかと、その主をそそのかした。慶暦二年、遼国は国境線に嚴重に装備した兵を集めた上で、その臣である蕭英と劉六符を我が方によこした。兵が国境で圧力をかけ、通常の往来とは異なるかたちで使者がきたことで、朝廷の内外は憤ったが、仁宗皇帝はこう言った。「遼国と吾等らは兄弟の国である。和平を棄てるべきではない。冷静に相手をなだめようではないか」。宰相に命じて遼国の使者を迎える接伴使を選ばせた。ときに遼国が何をしてくるのか予測がつかなかったので、群臣は誰もが敢えて行こうとしなかった。

宰相は右正言知制誥の富弼公の名を挙げた。公はすぐに便殿で皇帝にお会いし、叩頭して言った。「主の憂いは臣の辱にございます。臣は死をも恐れるものではありません」。皇帝は感動し、公を接伴使とした。遼国の蕭英等は入国し、皇帝は中使を派遣して道中を労った。蕭英は足の病気にかこつけて中使を(皇帝の代理人と

て)拝する礼をしなかった。公は言った。「私がかつてそちらの国に使者として参った折に、私は病気で車の中で臥せておりましたが、貴国の皇帝のお言葉を聞くためには立って拝しました。いま中使がきていてあなたが立たれないというのは、いかなる礼儀なのでしょう」。蕭英はすぐに立って拝した。公は胸襟を開いて語り合い、夷狄の人間を見下すような態度はとらなかった。蕭英等はしばしば公と行き来し、その内心を隠さず、ついに左右の者を退けて、その主の望むところのものを公に告げ、このように言った。「当方の要望に従えるのなら従いなさい。従えないのなら、代替となるものを出示なさい」。公はそのことを朝廷に伝えた。

皇帝は御史中丞の賈昌朝に交渉を命じ、遼国が要求してきた十県の割譲は許さないけれど、歳幣の増額は許すとし、さらに公を先方に派遣して交渉を続けるよう命じた。公が遼国に行くと、劉六符が接待役となり、十数回にわたって交渉し、公は領地の割譲はできないことを毎回主張した。かくて公は遼国皇帝に会って、直接問答をした。

遼国皇帝は言った。「宋が約束を破ったのだ。雁門の関を塞ぎ、塘水の堀を増設し、城壁を修理し、民兵を集めた。これは何のつもりなのだ。我が群臣は兵を挙げて南に行くことを寡人に要望した。寡人はそれよりは使者を派遣して土地を求める方がよいと考えた。要求しても得られなかったならば、そのときに挙兵しても遅くはないからだ」。公は言った。「貴国は我が真宗皇帝の偉大な徳をお忘れになったのでありましょうか。澶淵の役のときに、真宗皇帝がもしも諸将の言に従っていたならば、貴国の兵は誰も無事には帰れなかったでありましょう。また、貴国と我が国との通

好は、君主がその利を占有し、臣下の者は獲るところがありません。もしも兵を用いたらな、その利は臣下の者に歸し、君主はその禍を専ら被ることになります。貴国の諸大臣が争って兵を動かすことを勧めるのは、その身のためになると思うからで、国のためになることではないのです」。遼国皇帝は言った。「それはどういう意味なのだ」。公は言った。「晋の高祖(石敬瑭)は天を欺き主君に謀反した者で、助けを貴国に求めました。その息子の末帝(石重貴)は愚かで国を乱し、神にも人にも見棄てられました。このときに晋には狭い領土しかなく、上下は離反し、貴国は何の損害もなしにやすやすと晋に打ち勝つことができました。いま貴国が戦争を起こし、財産を獲得できたならば諸臣の家々にそれを与えることはできましょう。しかし、たくさんの壮士や健馬を失ったならば、その禍はどのようにして補うのでしょうか。いま中国は広大な領地を保有し、精兵は百万を数え、法令は明確で、上下は心を一つにしています。貴国が戦をしようとして、必ず勝つとの保証があるのでしょうか。「難しいだろうな」。「勝負の行く末は誰にもわかりません。たとえ貴国が勝つとしても、兵士や軍馬は失われましょう。その損失を補うのは群臣のすることなのでしょうか、それとも君主のすることなのでしょうか。もしも、貴国との通好が絶えなければ、歳幣はことごとく君主のもとに歸し、臣下が得るものといったら、使者となった者が与えられる褒美くらいのもです。群臣に何の利があるでしょうか」。これを聞いて遼国皇帝は大いに悟ることがあり、何度もうなずいた。公はまた言った。「雁門の関を塞いだのは夏国の趙元昊に備えたものです。塘水の工事はもともと何承矩が始めたもので、それは貴国との通好が定まる以前のことで、地が低く、水が集まるために、

堤防を高くしなければならないのです。城壁はどれも修理したまでのことで、民兵もまた欠員を補っただけです。いずれも和平の約束に違反するものではありません。かつて晋の高祖たかすけが盧竜ろりゅうの一道を貴国に贈ったのも、周の世宗せそうが戦で閩南かんなんの地を取ったのも、皆過去の王朝の時代のことです。我が宋朝が興ってからすでに九十年が経ちます。お互いに過去の王朝が保有していたことのある土地を求めたならば、貴国にとってそれが必ず利益となるでしょうか。我が朝の皇帝が私に命じられたときにこのような言葉がありました。『朕ちんは祖先のために国を守らなくてはならない。我が土地を人に与えることは断じてできない。遼国が本当に欲しがっているのは租税を増やすことであろう。朕が土地を巡って争うことを望まないのは、両朝の多数の民衆を死なせることをしたくないからだ。だから己を屈して、歳幣を増やし、遼国の租税の増加に代えようと思うのだ。もし遼国がどうしても土地を欲しいというのなら、その志は和平を破棄することにあって、上辺だけそうではないように言っていることになる。そうであるなら、朕もまた戦いを避けるものではない。澶淵の盟(宋遼間の和平条約)は天地鬼神も見ろなかで結ばれたものだ。いま遼国から先に兵端を開くのなら、過ちは朕にはない。天地鬼神を欺けることができようか』と。遼国皇帝は大いに感悟し、皇室との通婚を求めた。公は言った。「婚姻はそもそもひびが入りやすいものです。人の命の長短は知ることができません。それよりも歳幣が確実にしかも長く続くことの方が間違いありません。本朝から皇帝の息女が嫁入りしても、持参金は十万緡びんにもなりません。歳幣が無窮に続くのとどちらが多いのか明らかでありましょう。遼国皇帝は言った。「卿あなたは一度帰ってまた来るがよい。婚姻か歳幣かど

ちらかを選び、誓書せいしょを持ってきて差し出すがよい」

公は帰国して報告し、再び遼国に派遣された。皇帝の国書(手紙)と、口頭で申し述べる詞ことばを政府から授けられた。すでに出発して楽寿で宿泊したとき、公は副使に言った。「私は使者として国書を見ていない。万が一にも、国書に書いてある詞ことばと、口頭で述べる詞ことばとが異なっていたならば、今回の交渉は失敗してしまう」。公は(禁を犯して)国書を開いて視ると、果して同じではなかった。すぐに都に馳せ帰り、夕方ではあったが宮中に入って皇帝にお会いし、学士院で一夜を過ごし、書き替えられた国書をもって発った。

遼国に至ると、もはや婚姻を求められることはなく、もっぱら歳幣の増額を求めてきた。遼国側は言った。「貴国が我が方に差し出す書に『献けん』とあるが、それではだめだ。『納のう』に改めよ」(「献」なら兄弟間のプレゼントであり、「納」なら下から上に差し出すというニュアンスになる)。公はそれはできないと争った。遼国皇帝は言った。「貴国は我が方を懼れておる。わずかな字のことで何を渋っておるのだ。もしわしが軍団を率いて南に向かったら、後悔するどころではあるまいに」。公は言った。「本朝の皇帝は我が方の民も貴国の民も等しく愛され、鋒のもとに踏みにじるようなことはできないと考えております。だから己を屈して、歳幣を増額するのです。懼れてなどいません。やむを得ずして戦うことになるのなら、南北は互いに敵国となり、どちらが正しいか勝負で決めることとなります。そうなれば、私はもはやこの交渉に心を砕かずにすみます」。遼国皇帝は言った。「卿あなたはそいいきりたつでない。『納』という字は昔から使った例があるではないか」。公は言った。「昔からと言われましても、唐の高とう こう

祖皇帝が突厥とくつから兵を借りたときに、へりくだって『臣』と称した例があるだけです。その時に与えた文書に『献』とあったか『納』とあったか、それは知りません。その後、突厥の王の頡利けつりは(高祖の息子の)太宗皇帝によって擒たいそうとなったのですから、それがかつてのよい事例となりましょうか。そう言った公の声と顔色は高ぶっていた。遼国皇帝はその勢いに押され、「貴国に人を派遣するから、よく協議するがよい」と言った。

ここにおいて、歳幣を増額するとの誓書を遼国に留め、耶律仁先やりつじんせんと劉六符が遼国の誓書を持って宋に来ることとなった。そして、「献」か「納」かの交渉をした。公は朝廷に申し上げた。「臣は死ぬ覚悟でこれを拒み、先方の勢いを折りました。ここでまた許してはなりません。相手はどうすることもできないはずです」。皇帝はこれに従い、歳幣を増すこと二十万で遼国との和平は成り立った。これによって北方は何事もなく、それから四十八年が過ぎたのだった。遼国の君臣はいまも公の語ったことを顧みて、その約束を守って破らないようにし、通好と用兵の利害がどこにあるかを心の内ではっきりと確認しているのである。

このようであるから臣わたし(蘇軾)はかつてこのように論じたことがある。百余年の間に兵を大きく用いることがなかったのは真宗皇帝、仁宗皇帝の徳により、また寇準と公の功績によるものであると。

……(以下略)……

(1) 以上は「神道碑」の冒頭部分で、この後に、富弼ふひつの伝記が続き、終わりにこの文章を書くことになった経緯と富弼を称える詞が添えられる。碑文の本体である伝記を

記す前に、建国以来 130 年にして直面した一大危機を富弼がほとんど 1 人で回避したエピソードを掲げたのが蘇軾の工夫である。(2) 富弼はこのときまさしく命がけで遼国(契丹)との交渉に臨んだ(この文章はこれでも実は少し抑え気味に書いている)。遼国が最初に法外な要求を宋に突きつけ、国境に軍隊を集結して威嚇してきたとき、朝廷の人々は強く反発し、開戦もやむなしとする意見が大半であった。これまで宋は遼国に対して毎年きちんと多額の歳幣を贈り続け、ここで突然、領地の割譲を求めてきたのは全くもって信義にもとり、断固拒絶すべきだという主張は、誰もが正しいと認めないわけにはいかなかった。そのうえ、遼国の使者はわざと横柄な態度をとり、宋側の世論をさらに刺激した。宋が堪忍袋の緒を切って開戦に踏み切ったならならしめたもので、遼国は一気に攻め込む腹積りであった。そうなれば宋側に勝目はないと遼国側は計算し、客観的に見て軍事力の優劣は明らかだった(実際に後々に遼国の力が衰えて亡国寸前のときに至っても、宋軍は遼国軍に全く歯が立たなかった)。仁宗皇帝は高度な政治的判断で、歳幣の増額で戦争を回避しようとした。その交渉を誰に任せるのか、宰相が富弼の名を挙げたのは、以前から富弼のことを煙たく思っていたからだった。富弼は元来主戦論に与する者であるから、必ず遼国との交渉に失敗し、場合によっては遼国の手で殺されるであろうと踏んだのである。富弼はそうした裏も承知の上で、自己の信念は胡刖にして、皇帝の望む方向で交渉を巧みに進めた。一度帰国し、2 度目の交渉のために再び遼国に向かったときに、国書の文言が異なっていたのは、真相は明らかではないものの、宰相の謀略で、富弼を今度こそは失敗させようとしたとされる。国書を勝手に開いて見ることは法に反し、もし国書の文言に誤りがなかったならば、富弼は重大な罪を問われるところだっ

た。(3) 富弼が1回目の交渉で契丹に向かったのは慶曆^{けいれき}2年で、そのとき蘇軾^{そしつ}は7歳であった。その6年ほど後になって、蘇軾は父の蘇洵^{そじゆん}とこの件について論じ合い、それについていくつかの随筆が伝えている。ここでは周輝^{しゅうき}の『清波雑誌^{せいぱざっし}』の記事を見ておこう。

蘇東坡^{そとうぼ}はこのように語った――

私は若いときに父上と弟とともに富弼^{ふひつ}の『使北語録^{しほくごろく}』(遼国に使者として赴いたときのこと語った記録)を読み、富弼が遼国皇帝に説いたところに至った。

富弼はこのように言った。

「兵を用いれば、士や馬が失われ、国家はその損害を受けます。一方で、人臣は地位が上がったり褒賞を与えられたりして、利益を得ます。ですから、貴国の大臣で用兵を勧める者は、自身のためにそれを計っているのであって、貴国のために計っているのではないと申し上げたのです」

その言説が明白で、機微を突いていることに三人は感心した。父上は息子たちに向かって言った。

「昔の人で、同じようなことを言った者がいただろうか」

私は答えた。

「漢代^{はんたい}の嚴安が同じような趣旨のことを言っていますが、これほど明白ではありませんでした」

父上は笑って同意した。

しゅうき 私周輝が調べてみると、『三国志』のこよう顧雍伝に、次のような記事がある。

ご そんけん 呉の孫権のもとで、国境を守る諸将はそれぞれが功績を立てようと、敵に攻撃を仕掛けるためのいろいろな提案をした。孫権はそれらについて顧雍に尋ねた。顧雍は言った。「兵法は小さな利を戒めます。これらの者が述べているのは、自分のために功名を得ようとするものであって、国のためになるものではありません」

しじつがん また『資治通鑑』には、次のような二つの記事がある。

とう ぶとく 唐の武徳五年に突厥が国境を犯した。ていげんじゅ 鄭元璣は突厥の王のけつり 誦利のもとに行つてこのように言った。「唐と突厥は風俗が同じではありません。突厥が唐の土地を得ても、そこを居住地とすることはできません。また我が方の人間を獲てそちらに連れ帰つても、何の役にも立ちません。それよりは軍団を返して、和平を結び直したほうが、面倒な労力を使うことなく、座して財産を受け取れましょう。それらはみな王様の庫に収まります。貴国と我が方の長年のよい関係を棄てて、子孫に及ぶまでの怨みを結ぶのとどちらがよりよいのでしょうか」。誦利はこの言葉よろこを悦び、兵を引いて還つた。

かいげん 唐の開元六年、とばん 吐蕃は和を求めてきた。ちゅうおう 忠王は皇帝に申し上げることを求め、和親の利を説いた。げんそう 玄宗皇帝は同意しなかった。忠王は懸命に説いた。「辺境で事があれば、将軍や役人はどさくさに紛れて国の物を盗んだり隠匿したりします。嘘の功績を報告し、昇進しようとうします。これは奸臣どもの利になるだけで、国家にとつての福にはなりません」。それで玄宗皇帝は和親を許した。

思うにこれらはいずれも嚴安の言説を祖述したものである。後に、蘇東坡は同じ説を『鄭公ていこう神道碑』の初めに置いたのである。

蘇軾(そのときに13歳であったと推測されている)が父に向って指摘した漢代の嚴安が何を言ったのか、小竹武夫訳『漢書』(ちくま学芸文庫、998年)から引用すると――

……いま南夷を徇え、夜郎国を朝貢させ、羌僰を降し、葭州を攻略し、城邑を建置し、また深く匈奴の地に入って、その竜城を焼きはらい、議者たちはこのことを賛美しました。しかしこれは人臣の利であって、天下長久の策ではありません。いま中国に狗が吠えて警めるほどの事変もないのに、国外で遠方に対する備えにわずらわされ、国家を疲弊させているのは、民を養うこと子のごとくにする所以ではありません。限りなき欲望を行のうて心意を満足させ、怨みを匈奴に結ぶのは、辺境を安んじる所以ではありません。禍は相連引して解けず、兵が休んではまた起し、辺境に近い者は愁え苦しみ、遠い者は驚きみだれる、これは持久する所以ではありません。……

父との思い出を蘇軾がいつ語ったのか明らかではないが、この『神道碑』を書いたのより後のことではないだろうか。父も、かつては蘇軾も、遼国に対してもっと強い姿勢で臨むべきであると主張していた。遼国に毎年贈っている歳幣は宋の人民にとって過大な負担となっていて、国のためにも人民のためにこの屈辱的な条約を改めなければならないと考えていたのだ。しかし、神宗皇帝のもとで改革派が西方で強硬策に出て戦争を引き起こした結果、手痛い敗北を被った上に、軍事費が急増して人民をひどく苦しめることになったのを見て、歳幣の増額で平和を維持した方が遥かに国と人民の利益になると考えを改め、富弼をより高く評価するようになったのだろう。(4) 富弼が国のために自身の信念を曲げて交渉に臨んだことについては、次のような記録がある。

ちようせつし すうねい
晁説之が崇寧の初めの頃に私にこう言った。

ふひつ りょう
「富弼は晩年、遼国に使者として行ったときの功績を客人が褒めるのを聞くと、首まで顔を赤くした。人々はその理由がわからなかった。子弟がある暇な日に富弼に尋ねると、このように答えた。『北に使者として行ったときに、かつての元勳や名將は皆ずっと前に老いて死んでしまっていて、その後の者は戦争の仕方を知らないし、兵士は実戦で習ったことがなかった。ただあれこれ口で言って、うまきのごとくするだけであった。我が方に非はなくても、相手と比べたなら、何しろ向こうは心の内に何年も悪さを抱いてきているのだから、どうなるか知れたものではなかった。恥を忍んで歳幣を増したのは、私の意ではなかったのだ』。

このことを聞いて、私は兄弟で論じ合った。そして、蘇軾が『神道碑』を書いたときに、富弼の本心を知らずにいたのを残念に思った。

しゆべん きやくいきゆうぶん
これは、朱弁の隨筆『曲洧旧聞』に収められている記事で、富弼のエピソードを朱弁は師の晁説之から聞いている。晁説之は、蘇軾と同じ年の科挙で合格した晁端彦(第5章61ページなどですでに登場)の息子で、晁説之自身もこの年の終わり頃に蘇軾に会っている。だから、『曲洧旧聞』に記されている蘇軾やその時代の人々に関する記事は信憑性が高いとされる。ただ、富弼の本心を知らずに蘇軾が『神道碑』を書いたとするのは必ずしも妥当ではないだろう。己の信念を貫くよりも、当時の状況下で最善の選択をして、命を賭してそれを成就させ、長期にわたる平和をもたらしたことを蘇軾は高く評価したと思われる。蘇軾は年齢とともにより総合的、多角的に物事を考え、文治主義をより求める方向に思索を深めていったようだ

■次韻子由送家退翁知懷安軍

この詩に添えた蘇軾自身の注に「吾が州の同年の友は十三人、今存する者は六人のみ」とある。「同年」とは同じ年の科挙で合格した仲間、蘇軾の故郷眉州はさほど大きくもないのに、その年の全合格者 877 人中に眉州出身者が 13 人もいたとはかなり驚きの数字である。「今存する者は六人のみ」の中に、蘇軾、蘇轍の兄弟と、家定国、家安国の兄弟がいた（第 5 章 205 ページ）。その家定国（字は退翁）が懷安軍（軍は行政単位の呼称）の知事として赴任することになり、弟の蘇轍が送別の詩を作り、兄がその詩に次韻した。詳しい考証によるとそれは 3 月 10 日のことであったという。

吾が州の同年の友は、

十三弦の琴の上に並ぶ星のように燦然と輝いていた。

そのときに功名を立てようとする意の先は、

朝廷に居並ぶ者になろうとするのに止まるものではなかった。

事は願いとは異なり、あるいは天が寿命を貸し与えなかったために、

いまでは、画題によくある「六羽の鶴が一庭で俯仰する」と同じ図柄になってしまった。

貴君は昔の約束を守り、

霜を経て後になお香りを放つ菊のような存在である。

あちらの地に着けば、

宮中で奏せられるような玄妙な曲を聴くことはないだろうが、

貴君は天をも破るすばらしい詩を詠むであろう。

遠く西南の地はまさに春の日照りのときに当たり、

沼は干上がって枯れた水草が泥にへばりついていることだろう。

貴君が身を翻してその地に至れば、

たちまち恵みの雨がしたり落ちるであろう。

かの李白^{りはく}は宮中の沈香亭^{ちんこうてい}で皇帝のお召しを待って立派な詩を作ったけれど、

私にはその才もなくたまたま都にいただけで、

糸筋一本たりとも国家に貢献するところとてなく、

お上より馬を賜わり、雲の上の人々に空しく付き従っている。

貴君ばかりが遠い地の知事であるのはなぜなのか。

私は郷里の山^{おきな}の叟^{すい}に対し、恥ずかしくも面目なく思い続けなければならない。

どうか貴君から丁寧に言葉を寄せていただきたい。

(最後にある「山^{おきな}の叟^{すい}」とは、蘇^そ兄弟も家^か兄弟も師事した劉巨^{りゅうきよ}(字は微之^{あざな びし})を指す。

家定国^{かていこく}が赴任する懐安軍^{かいあんぐん}は蜀^{しよく}に属するので、劉巨への挨拶を家定国に託すと言ったのである)

■送楊孟容

これも郷里の人に贈った送別の詩。楊孟容（字は礼先）は眉州眉山県の先輩で、このとき広安軍の知事として赴任することになった。広安軍は同じく蜀の地である。黄庭堅が作った送別の詩に次韻した。

我が家は峨眉山の北にあって、

先生と邦を同じくする。

隔たること六十里、

同じく玻璃江の水を飲んで育った。

そこでは江も山も人と親しく、

一千の家の窓を遍く青色で満たしてくれる。

それでも窓の内にある人（楊孟容）は、

心を安らかにすることはなかった（天下のために身を役立てたいと思っていた）。

先生は蜀に帰って小さな町を治めることになり、

大きな鐘を自在に鳴らせないのを噓び泣くのだろうか。

私は玉座の近くに侍っているとはいえ、

よろよるとやっと歩いているだけだ。

若い人には高い才能の持ち主がいて、

漢代に天下無双と称えられた黄童に並ぶ者もいる。

先生は帰郷してからもう州の役所に入ることもなく、

山の隠者と遊ばれるのがよろしいのではないだろうか。

丁寧にお尋ねするのは、

黄童の詩と私の詩のどちらがよろしかろうか。

追って私も帰郷するはずだが、

冬に仕込んだ酒がよい香りを発する春を待つのがよかるうかと思っている。

(「こうどう黄童」とあるのは、ごかん後漢時代のこうこう黄香のこと。ここでは同じ黄姓のこう黄庭堅こうていけんになぞらえている)

■見子由与孔常父唱和詩輒次其韻余昔在館中同舍出入輒相聚飲酒賦詩近歲不復講故終篇及之庶幾諸公稍復其旧亦太平盛事也

こうぶんちゆう孔文仲、こうぶちゆう孔武仲、こうへいちゆう孔平仲は当時有名な三兄弟であった。孔文仲の名は第4章 57 ページで、孔平仲の名は第5章 385 ページですで見ているが、あざな孔武仲(字は常父)じょうほはこのとき蘇軾と同じく学士館の職にあった。詩題は「弟と孔武仲が唱和した詩を見たので、それに次韻する。私が昔(34歳の頃)館中にあつたときには、職を同じくする者が自由に出入りし、酒を飲み詩を賦し合った。最近はそのようなことがないので、詩の終わりでこのことについて言及した。諸公が以前と同じようにすることを願うものである。それもまた太平の盛事であるのではなからうか」。

貴君の先祖は魯の東の家の人(孔子)、

その門戸の光は千古より天下を照らしてきた。

であるから、貴君の文章はもとより立派であり、

風貌もまた似たところがあるのだろう。

孔子の顔は鬼の面を付けたようだといわれたこともあったが、

貴君の顔には各地を經てきた労苦が刻まれている。

書を誦するときは口から波が翻るかのよう、

ほととぎす
鳩と杜鵑が一緒に鳴き続けるかのよう、

滑らかな弁舌は止むことがない。

十年の間、困難の中を走りまわり、

風で髪をとかし、雨に沐浴する苦勞をした。

「私の道は間違っているのか。私は野の獣ではないのだが」

と、孔子も困難な日々に嘆いたことがあった。

貴君等三兄弟が都に歸還してからは、

かなた
鼎の脚のように互いに補い合うところがある。

ほうざん
蓬山(朝廷)にかつて集っていた老人は皆いなくなり、

そのころのことは削り去られてしまったのだが、

貴君を迎えてからは、おいおい故事も甦りつつあり、

私もまた先輩たちの振る舞いをかろじて知っているので、

館職の同輩とともに詩酒を盛んにしたいと思っている。

願わくは、貴君も盃を挙げてこの風雅を楽しむことを唱導してほしい。

(原詩では後半に漢代の様々な人の名を挙げています。それによって孔武仲こうぶちゆうのような人にとっては含蓄のある作品として深い味わいを得られるのだろうが、我々にとってはひどく煩わしいだけであるので、おおまかな意味を酌んで訳した)

■次韻張昌言給事省宿

給事中きゆうじちゆう中の職ちようもんにある張問あざな（字は昌言しやうげん）が省中に宿泊したときに詠んだ詩に次韻した。張問は新法に反対して不遇の日々を送り、この2月に給事中になり、8月に退職して11月に75歳で亡くなった。

貴君は長く同じ地位に留め置かれ、
白髪を風に靡かせるまでになったのだが、
眼光ゆうひは鋭く、落暉らくひに向かっても目が眩んだりしない。
飢えた民を救うためならと、遠く北の地へも歎び勇んで出向き、
いま省中で目を閉じて座っているときには、仙界を飛ぶことを想っている。
貴君の自慢は、年少の者ともわけへだてなく一緒にいられること、
もし酒樽の前で闘うならば、勝てる者は世に稀であろう。
貴君が故郷の松陽そうように隠棲する日を待って、
煙る雨の中、私も近くで土を耕しくたく思う。

(原詩にある第三句と第四句の対句「朔野按行猶雀躍、東台瞑坐覺鳥飛」は、「雀」と「鳥」のペアが面白いのだがうまくそれを生かして訳すことができなかった。飢民救済

のために張問が北方に向かったのは前年のことで、高齢にもかかわらず意気盛んであったことを「雀躍^{じゃくやく}」と言い表した。一方で、「鳥飛^{うひ}」は意味が取り難いだろうと、蘇軾自身の注が付されていて、「道家の説で、鳥は飛んで兔宮^{とぎゆう}（仙宮）に入るといふ」とある)

■和三舎人省上

3月30日、皇帝は景靈宮^{けいれいきゆう}に出向いて祭事を行った。その前日に曾肇^{そうけい}、劉攽^{りゆう}、孔武仲^{こうぶちゆう}が詩を詠み、蘇軾がそれに和した。劉攽にはかつて都で送別の詩を贈っているのを第3章80ページ見ている。

世上の榮枯^{ふんぷん}は紛紛として久しく保てるものはない。

雲と雨とが手を翻すようにして入れ替わり、

あるいは、枕の上でぼんやりとして夢に落ちると同じだ。

一つだけはっきりしているのは、

江右より起った三人(曾肇^{そうけい}、劉攽^{りゆう}、孔武仲^{こうぶちゆう})が揃って賢者であることで、

諸賢は、宗廟で祭祀に用いる器のように本来的に優れているのだ。

この私はときたら、星空の箕や斗のように見かけたけ大きくて役に立たない。

明日の朝は、正装して貴人が大勢居並び、

天子の御車^{ごじゆう}に扈從^{せんこうでん}して宣光殿より出発する。

陛下は白雲郷^{はくうんきゆう}(神聖な場所)において成長され、

もろもろの帝王と竜馬を並べて駆けるまでになられた。

しかも、明堂めいどう(皇帝の学問所)においては、

杞梓きし(良材=三賢人にたとえる)の扶けを得ているのである。

(1) 詩の前半に「江右こうゆうより起った三人」とあるのは、蘇軾自身の注によると、曾肇そけい、劉放りゅうはん、孔武仲こうぶちゅうがともに江右こうせい(江西)の出身であるからだ。(2) この詩に続いて、天子の行幸に従った曾肇が詠んだ詩に次韻した蘇軾の詩があり、さらにもう一度それに和した詩がある。いずれも朝廷に仕える者にふさわしい典雅な作品で、同様の詩を詠む必要に迫られた場合には手本とすべきものであるのだらうけれど、我々には特に興味を覚えるものではないので訳さない)

■送銭承制赴広西路分都監

銭暉せんきが広西路こうせいに赴任するのを見送った詩。

(銭暉は五代十国時代に杭州に都を置いた呉越国ごえつの王族の流れを酌む者。蘇軾が呉越国に特別な思いを懐いていたことはしばしば見てきているが、特に「表忠観ひょうちゅうかんの碑」(第5章223ページ)に詳しく記されている。この詩では呉越国の文化の遺風が自然物にも宿っているとして「江山こうざんの氣き」と表現している)

かつて私は「表忠観ひょうちゅうかんの碑」の文章を作ったときに、

銭氏せんの遺した「江山こうざんの氣き」がいまも衰えずにあるのをまざまざと感じた。

天目山てんもくざん(杭州の西湖このほとりの山)からはなお鳳おおとりが舞いつつ下り、

水辺には時に神々しい駿馬しゅんめが姿を現す。

どこもが貴君が床几を置いて笛を吹くに適した場所であり、

勇ましくほこ槊を横たえて、誰も及ばない詩を詠むのである。

かつてある寺で仏像が動く異変を現したときに、

貴君は仏像を砕いて川に投げ入れた。

そのような人であるから、

貴君が赴任すると聞いただけで、

もろもろの悪者はすでに震え上がっていることだろう。

(仏像を川に投げ入れたエピソードは、せんき銭暉が実際にそのようなことをしたと蘇軾自身が注記している。人を惑わすような怪異を見せるのなら、仏像といえども棄てるべきだとするのが、宋代官僚の合理主義であった。この部分は、原詩では丹霞たんか禪師の故事を引いて詠んでいるのだが、訳では割愛した。ただし、丹霞禪師の話はなかなか面白いので、ここに記しておこう。丹霞禪師はある寒い夜に暖を取るために木の仏像を焼いた。ある人がなんてひどいことをするのかと詰ると、禪師が言うには「焼いてぶつしゃり仏舍利(釈迦の骨)を得ようとしたのだ。「木を焼いたら何も残らないぞ」。「そうなら焼いてよいではないか」。——いかに蘇軾が好みそうな話である)

■次韻劉貢父省上喜雨再和

雨が降ったのを喜んだ詩。常に干害が心配される北中国では、春の雨は喜ばしいものであった。劉攽りゅうはん あざな こうほ(字は貢父)が役所で雨を喜ぶ詩を詠み、蘇

軾が和し（ここでは訳さない）、さらにもう一度和したのがこの詩。

（最初に劉攽^{りゅうはん}が詠んだ詩は、兄の劉敞^{りゅうしょう あざな げん ほ}（字は原甫）が朝廷にあったときに自分が同時に朝廷の官になれなかったのを嘆きつつ、兄の子がいまともに朝廷にあることを喜ぶと歌っていた。この詩まさして興味を誘うものではないが、劉攽とのかねてからの縁が詠み込まれているので訳出した。蘇軾^{みつ}が密州知事であった時期には、劉攽^{そう}も曹州知事として地方に出ている、盗賊を教導する功績があった。そのころに劉攽に送った詩を第5章65ページなどで見ている。また、蘇軾が兄の劉敞とかつて交流があったことは第2章23ページで見ている。）

かつて貴君は曹州^{そう}に、私は密州^{みつ}にあって、
ともに世の濁りの中に入って自らを汚してしまうのを嫌っていた。
昔から、人は土地の習俗に染まって悪事を為すというが、
貴君のおかげで、曹州^{そう}では刀を手放して農耕に就く者が大勢いた。
貴君は生きて都に還ってきて、なお山に遊ぶ心を保ち、
病を経ても小さな字を書き記すことができる。
皆様方はどうかあやまさないでほしい、
二人がこうも頻繁に詩を贈答し合っていることを。
かつて獄中に置かれていた者の生命を全て生かした二人であるのだから。

（最後の部分は、2人が地方官として無闇と罪人を処罰しなかったと言っているのである）

■送顧子敦奉使河朔

詩題は「顧臨（字は子敦）が朝廷の使者として河朔に行くのを送る」。顧臨は程頤（本章76ページなど）と合わないところがあつて河北都轉運使として北西の地に行くことになった。顧臨は朝廷に必要な人物だとして、蘇軾等多くの人々が引き留める運動をしたが、叶わなかった。

我が友人の顧臨君は軀も膽もともに俊偉である。

堂々とした腹回りは十圍もあり、

中に書物がうずたかく貯えられているだけでなく、

数百人の君子を容れるだけの広さがある(狭量な程頤への皮肉?)。

顧臨君は一つ笑う間に万事を解決してしまう。

十年の間、江海に臥し(地方で不遇の日々を送り)、

一度も怒りや喜びの感情を表に出すことがなく、

刀を磨いて自ら豚や羊をさばいて、近隣の人々と酒を酌み交わした。

都に帰り来れば、一つの夢のようで、

ふくよかな頬はますます豊かに輝き、

詔勅の文案を吟味する役を担って、手心を加えずにびしばし書き改め、

黄紙(勅書用の紙)に黒々と清書した。

ここに急遽、河朔に向かって行くことになったのだが、

顧臨君こそは必ずや辺境の地で勲功を挙げ、
剣を帯びたまま皇帝の前に立つのを許される人である。
思うのは、漢かんの時代ゆうに勇ゆうをもって聞きこえた王尊おうそんのこと——

王尊とうそんが東郡の太守となったとき、
黄河こうがが決壊して洪水が押し寄せた、

人々は逃げるように言ったのだが、
王尊きつりつは屹立して去ることがなかった(防水に務めて町を救った)。

顧臨君はまさしく王尊と並ぶ勇の持ち主である。

(「十圍」じゅういというのは、腹回りが両腕を伸ばした長さの10倍もあるということで、人間の腹はさすがにそこまで大きくはならない。昔の中国にメタボリックシンドロームなどという概念はなく、でっぷりとした体型を理想とした。蘇軾の肖像画もふくよかに描かれている)

■諸公餞子敦軾以病不往復次前韻

4月30日、顧臨こりん (字は子敦あざな しとん) を見送るために范祖禹等大勢はんそゆうの人が都の外にまで出て送別会を開いた。蘇軾は病気のために欠席したので、上の詩と同じ韻を用いて詩を作って贈った。

貴君こうなんは江南の俊英であり、
その容貌かさくは河朔かいはくの魁偉である。

とう そくてん ぶ こう
唐の時代に則天武后が人間界第一の好漢を求めると言ったときに、

てきじんけつ ちようかん し
狄仁傑は張柬之を勧めたのだが、

貴君こそはまさしくそのような人物である。

じようしよ
私は上書して貴君を懸命に引き留めようとしたのだが、

言葉が拙劣であったために結果が出せなかった。

それはもう言わずにおこう、

大人物たる貴君は、

出処がいかなることになっても喜んで受け入れるのであって、

皇帝が英豪に与える六尺の輿こしに坐し、

大いに肉を食らいつつ万里の彼方へと飛び行くのである。

都から近いとか遠いとかは取り立てて言うようなことではないのだらう、

天下の内はどこでも等しく朝廷の美德の及ぶところであるのだ。

遙かに想うのは、

送別の宴で諸公が争って紙に墨を滴らせているであろうこと。

私は病気のために門を閉ざして籠り、

諸公が貴君を讃える歌を聞くことができない。

この後、貴君と会えるのはいつであろうか、

覆った水が再び戻るようにきっと飲びをまたもにできるだらう。

善く千金の身を保たれよ、

前言はすべて戯れてあった。

(1) この詩の冒頭に、江南^{こうなん}=俊英、河朔^{かさく}=魁偉と並べてあるところが面白い。江南(南中国)の特色は文に優れ、河朔(北中国)の特色は武に優れ、顧臨^{こりん}はその両者を合わせ持っているというのである。(2) 一説によると、顧臨は前の詩を読んで喜ばなかったということを蘇軾は聞き、この詩を作って言い訳をしたという。どこが気に入らなかったのか訳者には理解できなかった。それがわかったならば訳を改めたい)

■送呂行甫司門倅河陽

司門郎中の呂希彦^{しもんろうじゅう りょきげん あざな こうほ}(字は行甫)が河陽^{かよう}県の副知事として赴任するのを見送った詩。呂希彦は呂公著^{りょこうちよ}(本章 107 ページ)の甥であるという。

貴君と交わりを結んでからそう長くはない、
しかし、ずっと頻繁に行き来してきたかのように思える。
貴君と知り合ってまだ幾日もならず別れの日がきて、
我が情^{こころ}の内には特別なものがある。
貴君は宰相を輩出してきた家に生まれ、
崢嶸^{そうこう}として高く聳え立つ節義を具えている。
天与の才はもとより超越したものがあ、
世の中での経験もまた十分にある。
譬えれば、風とともに走る駿馬……
それでもやはり身に羈^{あひみ}や手綱^{まじ}を纏うのは免れない。

おも
念うに、私は山中の人……

長らく鹿とともにいたのに、

誤って外に出て、世間の網に掛かってしまい、

一挙一動が俗人を驚かせることとなった。

田に帰る計画はまだ果せていないが、

去就いずれも軽いものとすでに思っている。

かよう
河陽は遠いところではない。

行き来する間にも出処の変化があるだろう。

さあ、これで別れようではないか、

酒はあっても徒に傾け続けるべきものではない。

(蘇軾が己を野生の鹿に譬えるのは久しぶりである。名家出身の呂希彦との対比で自然と口をついて出てきたのだろう)

■和張昌言喜雨

ちょうもん あざな しょうげん
張問(字は昌言)の雨を喜ぶ詩に和した。張問は本章127ページで登場している。雨を喜ぶというテーマの詩は、りゅうはん劉攽の詩に次韻した作品を本章130ページで見ている。

二聖(皇帝と太皇太后)は憂いのあまり寝食を忘れ、

その御心みこころに百神も奔走して風と雲が会うこととなった。

宮中に宿直していた私は、
夜の間、川の流れの音が高鳴るのを聞き、
朝になって、清らかな流れが水かさを増しているのを見た。
夢から覚め、飲びの酒を酌み、その酔いから醒めたところに、
貴君からの好句を聞き、その余薫が我が部屋を満たしてくれた。
秋になればきっと豊年の喜びがあるだろう。
そのときに備えて、
貴君に先を越されぬよう新しい詩をいまから用意しておくでしょう。

■次韻子由書李伯時所藏韓幹馬

李公麟りこうりん あざな はくじ（字は伯時）（本章 101 ページなど）が所藏する韓幹かんかんの馬の画を見て、
弟の蘇轍が詩を作り、それに蘇軾が次韻した。韓幹とうだいは唐代の画家で、特に
馬を描くのを得意としたことは第 5 章 158 ページで見ている。

（このころから画について詠んだ詩が多くなる。都にいた 3 年余りの間の蘇軾の詩の
一つの特徴として捉えることができるだろう）

垂れこめた雲の下、
皇城の奥深くにある古びた建物、
公文書が絡み合った糸のように乱雑に置かれている。
不意に目に飛び込んできたのは、

り こうりん
李公麟が所蔵するところの天馬の画。

そこからは北の風が吹き出し、
ぱらぱらと砂漠の砂が降り落ちてくる……。

天馬は西のまた西の果てから来て、
その勢いは落ち行く日と速さを争う。

竜むねの膺、豹の股、頭の高さは八尺、
奮迅するありさまは人間界きずなの羈を受けるものではない。

漢かんの武帝ぶていのときの虎脊こせき(馬の名)だけが友としてどうにか並ぶことができ、
唐とうの玄宗げんそうのときの玉花ぎょくか(馬の名で、本章96ページで見ている)などは物の数ではない。

李公麟は道を得て、真りに吏隠いんというべき人。

山の雉は、たとえふんだんに飲みかつ啄つばむことができるとしても、
人に飼われるのを好まない。

李公麟が絵筆を弄するのはただの戯れにすぎず、

こころ
意は万里の彼方にあるのを、誰も知らない。

かんかん
韓幹の画は肉を描いて骨を描いていない、
実質を失って皮相だけを留めている。

我が弟は、李公麟の腹中にあることを詩にして巧みに説いた。

その妙語こうせんを黄泉の下(死者の世界)に眠る韓幹に知らせてやりたいと思う。

それでも韓幹はこう言うであろう――

「自分は誰かに学んだのではない、

一万匹の馬、それが吾が師なのだ」

(1) この詩は韓幹かんかんと李公麟りこうりんが画に向かう姿勢を同時に詠んでいるのだろう。李公麟はあたかも韓幹が描いた天馬のようであり、なおかつ李公麟は韓幹が及ばなかった高みに到達しつつあるということを言っているのだろう。(2) 「韓幹の画は肉を描いて骨を描いていない」とは、杜甫とほの韓幹評(第5章159ページ)である。韓幹の画は、杜甫がいうように最高水準のものではないのだけれども、それでも、画師としての姿勢は確かに優れていたというのがこの詩の終わりの部分であるのだろう。(3) 蘇轍そだくのもとの詩にはいろいろな人が次韻しているが、蘇軾そしのこの詩がやはり最も躍動的である)

■軾以去歳春夏侍立邇英而秋冬之交子由相継入侍次韻絶句四首各述所懷
詩題は「私は去年の春と夏の境から邇英殿じえいでんに侍立するようになり、続けて秋と冬の境に弟も入侍することとなった。弟が絶句四首を詠んで懐おもうところを述べたので、それに次韻する」。邇英殿は、皇帝に学問を講義する場で、兄弟揃って若い皇帝を教育する大役を授かったのである。2人が左遷されていた時期からすると、夢にも思わぬ荣誉ある任に就いたのである。

其の一

きらきら ひあし き
瞳と暁の日脚が清らかに射くる。

ほらほら えんじゅ お
暖かくなるにつれて細細と槐の花が自ら零ちてくる。

じえいでん
邇英殿に坐して思い見るなら、

かつてここで講義を行った人の多くはいま国家の重職にある。

かくてして皇城の庭にはいつしか黄昏の色が起こる。

じえいでん
(邇英殿で過ごす1日の流れを厳かに詠んだ)

其の二

御進講の前に上尊じょうそん(酒)を賜り、早朝の寒さを破る。

御進講の半ばで茗碗めいわん(茶)を賜り、乾いた舌うるおを沾す。

護衛の兵士は雨のなかでも階きざしのもとにひたすら立ち続け、
学問を修めなかったことを定めし残念がっていることだろう。

其の三

二羽の鶴は、病み疲れ、声も出せないほどであった。

二羽の鶴は、近頃あい継いでまた軒に昇るまでになった。

高雅な音楽を聞きつつ舞い飛ぶのは何かの間違いであろうか。

果たして自由に動き回って啄むことがまたできるのだろうか。

(2羽の鶴はもちろん蘇軾、蘇轍兄弟のことである。皇帝に向かって講義をする身になったことを手放して歓ぶような詩、まして自慢するような詩を蘇軾は詠まない。邇英殿じえいでんの外で雨に打たれている護衛兵は蘇軾を羨み、蘇軾は何物にも束縛されない鶴を羨むのである(かつて「放鶴亭の記」で鶴について書いていた(第5章310ページ)の)が思い

出される)

其の四

ささやかな人生を生きるこの身は、

ふう は
風波の地からたまたま脱することができ、

老いてなお鉄や石のように堅固な心がここに存在している。

こうざん はくらくてん
私は香山寺の老居士(白樂天)に似ていたりするのだろうか、

みち
世間との縁はついに浅くとも、道に根ざすものは深いのである。

はくらくてん はくきょい
(白樂天(白居易)と蘇軾が以ているとする論は昔から今に至るも多く、蘇軾自身もかなり意識している。この詩には蘇軾の自注があつて以下のように記されている。「白樂天は(左遷されて) こう しぼ 江州司馬となり、 ちゅう しし 忠州刺史となつて、(中央に呼び戻されて) たちまち しゅきやくろうじゅう ち せいこう 主客郎中知制誥となり、ついに ちゅうしよしゃじん 中書舍人(朝廷の大官) となつた。私は敢えて比べるわけではないけれど、 こう 黄州に謫居し、 とう 登州知事に起用され、都に召られて ぎそう 儀曹となり、 じじゅう かたじけなくも侍従となつた。出処の流れはほぼ以ているといえるだろう。できれば白樂天のように晩年の閑適の楽しみを享受したいものである」。一方、これまで見てきたように、白樂天に対する蘇軾の評価には実は微妙なところがある。蘇軾が8歳で憧れたスーパースターの1人、かん き 韓琦を大いに讃えた文章を書いたときには(第5章72ページ)、白樂天にいろいろケチを付けるようなかたちで韓琦と比較し、結論として白樂天よりも韓琦がずっと立派であつたとしている。二者の最大の差は、韓琦が「晩年の閑適の楽しみを享受」しようとはしなかつたことにあつた。果たして、蘇軾の晩年が白樂天

に似るのか韓琦に似るのかはこれから見てゆくことになる)

■送宋構朝散知彭州迎侍二親

宋構そうこうという人が彭州ほう知事として赴任するのを見送った詩。都にいと官員の出入りがひっきりなしにあつて、求められるままに送別の詩を作っていたら、それこそ日々詠んでいなければならぬであろうから、蘇軾といえどもさすがに詩を贈る相手はある程度の制限をかけていたのだろう。結果として故郷しよくの蜀しよくに関連する詩が多くなる。宋構せいとは成都の人であり、彭州は成都から比較的近い。

知事殿の車が東から来た、

誰を迎えるためなのか。

最初に知るのは、屋上の鳥、

そこは知事殿の老親の家。

二親は今年初めて白髪が生じたばかりであるから、

楼閣に登るのも馬にまたがるのも人の助けを必要としない。

知事殿が弓を負って前触れとなり、

老親ほうを乗せた車を彭州へと案内する。

そのありさまを、蜀人しよくじんはこれから長く語り草とするであろう。

いまからは彭州では老幼ともに知事殿の教化に服し、

何事もなく平穩に治まるであろう。

昔、罪人を罰するのに鞭の代わりに蒲の穂がまを用いた賢知事がいた。

知事殿はそれすら使わないのだ。

春の波が天みなぎに漲るかのように平らな湖面に広がる、

——そこは彭州せいこの西湖、

花の光が一座を照らし、花の香りが膚からも生じる、

——彭州は牡丹の名産地、

ここに知事殿はくぎやくは白玉の壺を捧げて老親の長寿を祝い、

たくさんの孫が集ってまわりで笑い合い、

古くゆかしい歌を皆が踊りながら歌う。

そうしたありさまを画にして蜀人は後世に伝えることだろう。

■郭熙画秋山平遠

中国の山水画の歴史を概観したときに必ず名を挙げられる人物そうとして宋代だいの郭熙かくきがいる。郭熙しんそうは神宗皇帝によってその画才が認められ、自由に活動する場を与えられた。これは「秋山平遠しゅうざんへいえん」と題した郭熙の画に添えた詩。

(神宗皇帝しんそうは郭熙かくきのために翰林院かんりんいんのもとに特別なポストを設け、画業に専念できるようにした。翰林院の中心的な建物である玉堂ぎよくどうの壁や扉には郭熙の画が飾られた。この詩から推測するに、蘇軾ぶんげんはくは政界の大長老(このとき83歳)で宰相である文彦博と、郭熙

自身とともに玉堂で、春の山と秋の山の2枚の画を見たようだ。「秋山平遠」の画には文彦博が記した跋文が添えてあった)

ぎよくどう
玉堂は、春の日差しのもと、昼も門を閉ざして静かである。

中の扉かくきに郭熙の画いた春の山の画がある。

鳩ねむの雛も燕の雛も睡りから起きたばかり、

白い川波、青い峰は人間世界のものではない。

しゅうざんへいえん
「秋山平遠」はほんの小さな画幅でありながら、

遠く広大な景色が開け、

ばくばく
漠漠としてまばらな林に秋は終わろうとしている。

こうなん
あたかも江南の地で旅人を見送るところなのか、

川の中ほどで頭こがへを回らして雲の頂きを望み見る人がいる。

その人はあるいは伊川いせんの長老ぶんげんはく(文彦博)か、

鬢の毛は霜のように真っ白で、

いつもは臥しつつ秋の山を眺め、故郷らくようの洛陽を想っている。

長老は郭熙のために画の隅に草書をしるし、

すうざん らくすい
その墨の痕は、嵩山と洛水に浮かぶ秋の光と同じように輝いている。

私は長老に従ってここに遊ぶ……、

これまでに過ぎ去った歳月もわずか一日のよう、

すでに白髪まじりとなった頭に山の青さが映るのを覚える。

洛陽せんせきに行って泉石を臨む地を買おうかと思う、
そこで長老りゅうもん はちせつたんのために竜門の八節灘(洛陽の景勝地)の図を描くのだ。

■和穆父新涼

銭勰せんきやう あざな ぼく ふ(字の穆父)の「新涼」の詩に和した。銭勰はすでに本章 17 ページに登場している。

(これは相手を楽しませるために珍奇な対句を並べた戯れの作で、それに応じた訳し方をしてみた)

働かないでいると、家では妻や子がぎゃあぎゃあうるさい。
官に仕えようと、山では猿や野の鶴が寂しがって恨みごとを言う。
利潤は一割という商売のイロハもわかっていないし、
俗世を離れて九万里の彼方に飛んで行くことなどもとよりできるはずもない。
自分が独活うどの大木であることは百も承知だが、
この大木にまわりつく蔓つるが冠かんむり(官員のしるし)の紐であるのはどういうわけなのか。
お上の御恩を受けるのは巨大な借金を背負うようなもの、
さっさと返済して証書を焼いてしまいたいものだ。
貧乏のあまり、たとえ牛小屋で眠るようなことになったとしても、
お偉いさんを喜ばせるためならと、虎とダンスをするようなことはしない。
貴君の詩にあるように、折よく雨が降り、涼しい風が吹いてきた。

稲は稔り、飯を炊くよい香りがもう漂ってくるかのようだ。

紫の蟹は肥えただろうし、白い新酒を勧めてくれる人だっているだろう。

貴君ときたら、文章を生み出す手は昔の文豪に等しく巧みで、

政事をとりおこなう腕は昔の名臣と同じく力強い。

いずれはきっと三公に昇るはずであるから、

私がいまからイの一番に祝いの言葉を献じておこう。

その返礼として、

こうこ
江湖に帰って魚や鳥とともに過ごすという我が願いを叶えてくれたまえ。

■書晁補之所蔵与可画竹三首

そもんしがくしの1人ちょうほし晁補之は、ぶんどう文同（字はよか与可）が描いた竹の画を所蔵していた。それに書き添えた詩。

其の一

ぶんどう
文同が竹を画くとき、竹を見て、人を見ない。

人を見ないだけではない、

うっとり わす
嗒然としてその身を遺れる。

その身は竹に化し、

窮まることなく新しいものが出てくる。

そうじ
莊子がすでにいないこの世において、

誰がこの「凝神」(眞実の精神)を知るのだろうか。

(これまでも文同の竹の画について記した蘇軾の詩文を幾つも見てきた。ここでは、文同が竹に化して描き、無限に新味が生まれ出ると詠んでいる。竹と文同との区別がつかない状態、それは精神が完全(凝神)であることを意味し、そのときに最高の芸術が生まれるのである。そのようなことは、古く荘子の哲学が指し示すところであった)

其の二

このような人は今はすてにいない。

このような竹はもう描かれることはない。

(俗な画工が)春の蚯蚓みみずのようなたどたどしい墨痕で描くのは、

風に中に揺れる柳のような竹。

見るがよいこの画の竹を、

断崖の上で、瘦せた節は竜が走るようではないか。

いつの日かこの竹は、

湖で釣りをする隠者が手にする竿になるのであろう。

其の三

晁君は世渡りに拙く。

一家は粥を啜っているとのこと。

今朝聞いて笑い転げたのは、

人に媚びて墓碑を記した謝礼でこの竹の画を買ったのだと。

先生の食卓はますます衰れなことになって、

朝日に照らされるのは馬が食らう^{うまごやし}苜蓿だけ。

もともと、私はかつて詩にこう詠んでいた。

「食うに肉はなくてもよいけれど、

竹がなくては住むことができない(高潔な精神を養えない)」

晁君がそれを真に受けてしまったとは。

(1)「墓碑を記した謝礼」という記述がある。昔の中国では、平和な時代が続くと墓を立派にしようとする傾向が強まり、名文家に墓碑の執筆を求めるようになり、その潤筆料は結構な収入になった(蘇軾は潤筆料目当てに墓誌銘を書いたことはなく、残された墓誌銘はわずかしかない)。晁補之は元豊2年(1079年)に科挙に合格して官員になっているので、まぐさを食べなければならないほど貧乏であったわけではない。(2)蘇軾はかつて詩に詠んだとして「食うに肉はなくても……」(可使食無肉、不可居無竹)という句を挙げているが、現存する蘇軾の詩集に同一の句を見出すことはできない(同じ趣旨のことは書いている))。

■戯用晁補之韻

晁補之の詩に戯れに次韻した。内容は上の詩につながる。

私はかつて^{すいおう おうようしゅう}醉翁(歐陽脩)に御相伴して酔ったことがある、

貴君はいま詩老(梅暁臣)の詩をもっぱら吟じている。

よい詩はいくら咀嚼しても飽くことないが、

痩せた竹はいくら瀟灑であっても人の飢えを救うものではない。

試しに鳳凰に問うなら、飢えたら竹を食らうと答えるだろうけれど、

そこの馱馬が苜蓿を食らって肥えているのとどちらがましなのだろうか。

とにかく貴君は飢えを忍んで空しく詩を誦しているのだから、

貴君の口はそのうち鳴き続ける布穀のようになってしまふのではなからうか。

■書李世南所画秋景

李世南は北宋を代表する画家の1人。その李世南が描いた「秋景」の画に詩を記した。このとき李世南は都で官職に就いていた。

其の一

参差に野の水が流れ、

水かさが落ちた痕が残る。

まばらな林は斜めに倒れかかり、

霜の落ちる根が露わである。

小さな舟が一艘……

「どこに帰って行くのかい」

「家は江南、黄葉する村にあります」

其の二

人間世界では斧がふるわれ、
 山林は日に日に傷を受ける。
 百尺の竜が躍るような大木は誰が見られるのか。
 溪でも山でも独り往く者でなければ、
 枝に掛かる猿の姿をこのよう知ることはできない。

■書鄢陵王主簿所画折枝二首

画に添えた詩がおう続く。王というしゅぼ主簿の職にある人が描いた「折枝」のせつし図に
 詩を添えた。王主簿おうについては、この詩からえんりょう鄢陵の人で、画が得意だっ
 たということがわかるだけで、その名も知られていない。

其の一

形が似ているかどうかで画を論じるのは、
 児童の見方と変わるところがない。
 詩を賦して、詩は必ずこうでなければならぬと主張するのは、
 きっと詩を知る人ではない。
 詩と画は本源的に同じ調べで、
 大切なのはてんこう天工とせいしん清新である。

とう へんらん
唐の辺鸞は雀の生きているありさまを画に写し、

そう ちやうしやう こころ
宋の趙昌は花の神を画で伝えたといわれている。

おう
王君のこの両幅はそれと比べてどうであろうか。

王君の画は疎(空間的不均一性)にして淡(空間的拡張性)、そして精(固有性)と勻(普遍性)を含んでいる。

見るがよい、

画に加えられた一点の紅は、

無限に広がりゆく春に寄せられたものなのである。

(1) この詩の冒頭に蘇軾の芸術観が端的に示されている。一つの単純な基準で優劣を測ることはできない。(2) 詩も画も書も音楽もその根源は同じであるとの蘇軾の主張はこれまでも何度も見ている。3 句目、4 句目の「詩画本一律、天工与清新」(詩画もと一律、天工と清新)はその考えをみごとに10文字に凝縮している。天の工を常に清く新らたなものとして表現するのが詩と画なのである。(3) 後半の疎、淡、精、勻は訳しにくい。カッコ内に添えた説明はあくまでも理解のためのヒントでしかない。言葉では言い表すのが難しい概念を、蘇軾はこの4つの漢字に託して伝えようとしたのだろう。

(4) 最後に置かれている、一点から無限が広がるという見方も、蘇軾はしばしば提示している)

其の二

ゆうじん
瘦せた竹は幽人(底知れぬ深みのある人)のようで、

幽^{ゆう}花^かは汚れなき乙女のようにである。

枝の上を低くためらいがちに飛ぶ雀、
花の間に揺れてたまたまいつつ降る雨。

二羽^{せきれい}の鶴鴒^{せきれい}がいまこそ飛び立つとき、
あまたの葉がそれ先んじて跳ね上がろうとする。

愛らしくも花に集まる蜂、
二本の脚に蜜をせせと引き寄せる。

天^{たくみ}の巧^{たくみ}の豊穰^{とくみ}さを知る貴君であるから、
春のこのありさまを筆と紙に捉えることができたのだ。

貴君は詩もよくすとかねてより聞いている、
私が寄せるこの声は、
貴君の妙語を求めるものなのである。

■和張未高麗松扇

蘇^そ門^{もん}四^し学^{がく}士^しの1人の張^{ちやう}未^{らい}が、高^{こう}麗^{らい}国^{こく}で作^{しやう}ら^れた松^{しょう}扇^{せん}を詩に詠んだのでそ
れに和した。松扇は、松の細い枝を削って編んだ扇だという。

昔のとある人が夢に松を見た――

「松という字は、分けると『十八公』である、

ならば、わしは十八年後に公^{こう}の地位に昇るであろう」

と占い、その通りになったのは御同慶に堪えない。

昔のとある皇帝が豪華な宮殿を建てた——

山で老死した巨大な松は、その建築材料にならずにすんだ、

というも、たとえ我が身を皇帝に献じようとしても、

一万頭もの牛に曳いてもらわなければならなかったからだ。

ところが、この松ときたら、

なんと細かく刻まれ、手の内に納まる扇にされ、

人前で身を屈する恥辱をこむってしまった。

それでも、張耒君の詩集にその名を掲げられたことで、

いささか屈辱を洗い流すこともできたのではなからうか。

ともあれ、昔、皇帝の愛を失った班婕妤が嘆きのあまり、

我が身をたとえて詩に詠んだ秋の扇よりはずっとましであろう。

■送張天覺得山字

張商英(字は天覺)が河東提刑となつて都を出てゆくことになり、幾人かで韻を分け合つて送別の詩を詠み、蘇軾には「山」の字が当たつた。張商英は蘇軾より5年後れて生まれ、章惇によつてその才能を認められて中央で活躍していたが、皇帝が代わつて新法が續々と廃止されてゆくことに強く反対して地方に出されることとなつた。張商英は單純な改革派ではなく、その後も独自の道を歩み、新法党 vs 旧法党という單純な二項

対立の図式には収まらないところがある。

貴君はこれから西に進んで太行山たいこうざんの嶺を登り、

北に清涼山せいりょうざん（五台山ごたいざん）を望むであらう。

晴れた空に山が五つの髻たゞしのように浮かび、

雲の間に瑞気ずいきが宿され、

岩石の中にまで靈妙な光が入り込み、

茅や菅からも仙草が生え出てくる。

太行山では、かつて寒さのために、兵士が指を落として苦しみ、

ある人がその仙草を人々に与えて兵士を喜ばせたとか。

貴君は同じように、民衆の窮状を救うことだろう。

私は老いてしかも病んでいる、

目は利かないし腰も足も不自由である。

河東かとうのあたりの人は昔からもの惜しみをするというけれど、

貴君はそれに染まることなく、

己の才能を惜しまず使うことだろう。

（五台山ごたいざん（清涼山せいりょうざん）は古来有名な靈山で、現在ではユネスコの世界遺産に登録されて

いる。張商英ちやうしやうえいは6月27日に清涼山に至って詩を詠み、それは当時の人々に広く知られた）

■贈李道士

李道士（李得柔）に贈った詩。序文がある。

李宗固は誠実な役人であった。景祐年間に漢州知事であったときのこと、仙薬を作り画をよくする道士の尹可元が火事をおこし、死罪に当たるとされた。李宗固は尹可元を獄中に置き、しかし刑の執行を見合わせていたところ、たまたま大赦があって尹可元は放免された。このとき八十一歳であった。尹可元は、自分は間もなく死ぬけれど、必ず李氏の子として生まれてこの恩に報いると誓った。

尹可元が死んで二十余年後、李宗固の子の李世昌の妻は、夢で尹可元が部屋に入ってくるのを見た。そして生まれたのが李得柔で小名を蜀孫といった。李得柔は幼いときから画が上手で、成長すると莊子や老子の書を喜び、ついに道士になり、妙応の号を賜った。母に仕えて孝謹であると聞こえ、その母を画に写したものは絶妙であるとの評判である。

世間の人は画の名人というと、

とかく唐の時代の曹覇將軍ばかりを挙げて、

晋の時代の顧愷之などはおつむがおかしかったかのようい。

曹覇は、腰に大きな羽団扇をはさんだ武将を描いたのだが、

顧愷之が、頬にあえて三本の毛を加えてより真実味を増したのには及ばない。

顧愷之は普段から諸公子を侮り、

宮中にいるべき人物を深山の巖石の上に載せて描いてみせたところ、

その子孫は代々道士となり、旅装束で雲水の間を巡り歩いた。

道士一千年の始まりといったら門番をしていた尹喜で、

老子(李耳)は尹喜の求めに応じて書物を書き置いた。

その尹喜の子孫の尹可元は最後の一念によって、

李耳の子孫の李宗固の孫(李得柔)となって生まれた。

香火の旧縁(道家の縁)は尽きることがなく、

画によるつながりもまた今に伝わっている。

私は五十歳を二年過ぎたところだ、

かくも衰えた我が顔を李道士が描いてくれるなら、

後々の人はそれを見て、

これは白楽天の晩年の画であると言うであらうか。

(曹覇、顧愷之、尹喜、老子と、昔の人物を次々に挙げて、主題の李道士を導き出す知的技法を面白いと思うか、煩わしいと思うかは表裏一体の関係であらう。ここでも蘇軾は白楽天との類似を意識している(本章141ページ))

■次韻張舜民自御史出倅虢州留別

御史台の任にあった張舜民が虢州の副知事として出て行くことになり、別れの詩を詠んだのでそれに次韻した。張舜民は蘇軾より8年後れて科挙に合格し、蘇軾が黄州にいたときに、改革派に嫌われて左遷の身となり、

任地に赴く途中で蘇軾を訪問していた。そのことがこの詩の中に詠まれている。皇帝の代替わりに伴い、張舜民はしほこう司馬光によって中央に召されたのだが、司馬光の死後、宰相等と意見が合わず、地方に出された。

貴君が詩を記した紙には氣迫が漲り、

雲が湧き立つばかりである。

貴君は初め湘累しやうらいの地に流され、

貴君とともに遊んだ樊口はんこうは遠い思い出の地となった。

後に貴君は朝廷の官員として銀印おを佩びる身となり、

御史台ぎょしだいにおいて聳え立つばかりの長身の姿を見た。

江湖こうこでのかつての日々はすでに夢、

いずれ鄂こ社と(張舜民がこれから行く地)で隣同士で住むことになるだろう。

都を去ってともにまたうそぶ嘯くことがあるならば、

主人も客人もみな(俗世を離れた)詩人だけとなるであろう。

(張舜民が黄州ちやうしゆんみん こうに蘇軾を訪ね、ともに樊口はんこうで遊んだことは、張舜民の『画墮集』に収録された紀行文に次のように記録されている。

壬戌じんぼ げんぼう(元豊6(1083)年9月20日)、朝早くに黄州こうに停泊した。州知事の楊衆やうしん、副知事の孟震もうしん、

団練副使の蘇軾とともに、蘇軾の居所で会い、晩飯を蘇軾の東の坡の雪堂おか せつどうで食べた。

蘇軾は詩で獄たくに陥り、ここに謫されて数年になる。……丙寅へいいん(9月24日)、蘇軾を招いて、

武昌の樊山で遊ぶことにした。……食事をすませから舟を移して黄州を離れ、対岸の樊
 漢口に泊めた。蘇軾も舟で長江を渡り、一緒に武昌県に行った。……県知事の季観等と
 ともに樊山に遊んだ」。

なお張舜民が職務に就いていた御史台は官員の不正行為を糾す部署で、蘇軾はかつて
 その獄で厳しい取り調べを受けたのだった)

■次韻王定国倅揚州

揚州副知事となる王鞏（字は定国）から詩が届き、それに次韻した。

（本章 5 ページで、王鞏は潁州の副知事に任命されたということを見たが、その後、
 揚州に変更になったようだ）

この身は天の遊びに任せ、江海に置くものであるのだが、
 ひとたび紅塵の内に落ちてしまうと、もどに戻るのには容易ではない。
 私は司馬相如のように蜀への道を帰ることができないし、
 貴君は何遜のようにしばし揚州で花をめぐる詩を詠んでいなければならない。
 驚くのはすでに菊がもう黄色くなったこと、
 なお喜ぶのは貴君の顔が朱く髪が黒いことだ。
 たとえ意に染まないことがあっても、
 眞卿はむしろそれを糧として歴史書を編んだのであるから、
 厭うべきことではないのだ。

(この詩は、^{し ばしやうじよ}司馬相如、^{か せん}何遜、^{ぐ けい}虞卿という3人の才人の名を挙げて、^{おうきやう}王鞏に心構えらしきものを説いたのであろう。訳者があっさり回避した煩わしさを厭わずに3人の事績を研究するなら、王鞏に何を言いたかったのかがわかるであろう)

■次韻米黻二王書跋尾二首

^{ほくそう}北宋第一の書家、ならびに北宋第一の画家、ならびに北宋第一の収集家、その三冠の王者という^{べいふつ あざな げんしやう}米黻(字は元章)である。米黻は蘇軾よりも15年若く、官職には就いたものの、奇行が多く、もっぱら文人として活躍した。この詩は、^{に おう おう ぎ し}二王(王羲之とその息子の^{おうけん し}王献之)の書^{しよ}の後ろに記した米黻の詩に次韻したもの。蘇軾は米黻の自由で不羈なところ愛し、それをからかうような口調でこの詩を詠んでいる。

其の一

虫の害を防ぐために^{さん かん}三館(宮廷の図書館)で^{ぼくしよ}曝書を行ったところ、

^{おう ぎ し}王羲之の『^{らい きんじやう}来禽帖』と^{おう けん し}王献之の『^{せい りじやう}青李帖』を見ることができた。

草書^{みみず}という、このごろは秋の蛇やら春の蚯蚓やらがやたらとのたくるだけで、

野の^{あひる}鶯と評された^{にわとり}王羲之と家の鶏と評された^{みみず}王献之のどちらが美しいのかさえ、まるでわかっていない。

天の上(宮中)から持ち出された^{はこ}函は^{ぎよく}玉で飾られ、

紫の衣を纏った^{かぎ}敕使が見守る中で金の鑰が開かれた。

現れ出た二帖は、

ちらりと眼を過っただけではまだ十分に識ることができず、
 ばさりと壁に掛けて雲に委ねられた。

三館から帰り来て、その妙意を一人で追求しつつ、
 思うのは、私がかつて朝廷にいたのは二十年も前、
 そのときにこの二帖はなかったのだから、
 一体どこから得たのかと怪まずにはいられない。

巧みに偷んだり、無理やり奪ったりすることは古来よくあることで、

顧愷之(著名な画家)が描いて厨に掛けていた画を、

桓玄(当時の権力者)はその厨の壁を穿って盗み取り、

その後も顧愷之とはこやかに笑いながら会っていたというのだが、
 よもや貴君は桓玄に似ていたりするのだろうか。

唐代の王涯は書画の収集家で、塙を廻らして厳重に守っていたのだけれど、

死罪に処せられたとたん塙は破壊されて書画は四散してしまったとか。

そのときの穴がきつとまだ塞がっていないのだろう。

(この詩は、米叡が二王の書を禁断のルートから入手したのではないかと、疑ってみせたのである。それだけ貴重な品だということであろう)

其の二

貴君は一日に千枚の紙に書を記すとか。

それだけ努力して得た美を誰に与えるのか。

地面に書いた餅はいくらそっくりでも食えない。

知恵の足りない子供が見てよだれを流すくらいのものだ。

錦のふくろ囊に収められ玉の飾りを施した軸は、

見かけが立派だからといって本物であるかどうかはわからない。

さんぜん凜然と輝いて、正しい知恵さえごまかしかねない。

耐えがたき飢えの中でも書を見て涙を流した人もいた。

がんしんけい顔真卿の米を乞う書こそが今に至る最高のものではないだろうか。

(とうだい蘇軾は唐代のがんしんけい顔真卿の書を高く評価している (第4章48ページなど)。それは己の真情を書き表しているからである)

■郭熙秋山平遠二首

先にかく き郭熙が描いた「しゅうざんへいえん秋山平遠」の画を詠んだ詩を見た (本章 138 ページ)。

再び同じ画を詩に詠んだ。2首のうち1首を訳す。

其の二

葉が落ちゆくとき、

心が騒ぎ、人は秋を怨む。

遠く眺めやるのはむしろ堪え難く、

詩の愁いが生まれる。

ああ、一万の谷に争う流れを見たい……

だから貴君を煩わしてこの画を描いてもらうのだ。

■送欧陽弁監澶州酒

欧陽弁おうようべん せんが澶州で酒税を管理する役人として赴任するのを見送った詩。欧陽弁おうようしゅうは欧陽脩の末の息子である。

千里を走る汗血馬も、

荷車を引っ張ったのでは存分に動けない。

酒粕の臭いの中に抛り込まれるのは、

賢公子を試そうとするものであろう。

貴君の家は江南の英俊、

清き流れに身を洗っていたのだが、

かえって黄河こうがの濁流を渡って、

馬の耳までも漲る砂に埋もれてしまうようなところに行く。

もともと人の運命は造物者に任せるまでのこと、

禍も福も始めから窮まっているわけではない。

孔子こうし しぶんが子文を褒めた言葉を思うがよい——

「三回用いられても、三回放たれても怒ることも喜ぶこともなかった」

■九月十五日邇英講論語終篇賜執政講讀史官燕於東宮又遣中使就賜御書詩各一首臣軾得紫薇花絕句其詞云絲綸閣下文書靜鐘鼓樓中刻漏長独坐黄昏誰是伴紫薇花对紫薇郎翌日各以表謝又進詩一篇臣軾詩云

長い詩題は次の通り。「九月十五日、邇英殿で『論語』を講じてきて最後まで終わった。執政講讀史官は東宮において宴を賜り、中使が派遣され、それぞれに陛下御自身が書かれた詩一首ずつが与えられた。私は紫薇花を詠んだ絶句を頂戴した。その詩は、

絲綸閣下文書靜、しりん かくか ぶんしょ しず (絲綸 閣下 文書 静か)

鐘鼓樓中刻漏長。しょうこ ろうちゆう こくろう なが (鐘鼓 楼中 刻漏 長し)

独坐黄昏誰是伴、どくご こうこん だれ こ ともな (独坐 黄昏 誰か是我 伴う)

紫薇花对紫薇郎。しびか たい しびろう (紫薇花は対す紫薇郎と)

翌日、おのおのが御礼の書を差し出し、一篇の詩を添えた。私の詩は以下の通り」。

((1) 蘇軾が邇英殿で皇帝に学問を講義したことは本書139ページですで見ている。

9月15日に『論語』の講讀が終わり、蘇軾ら講讀に加わった者に褒美の宴と皇帝直筆の詩が与えられ。まことに荣誉なことであったが、ここに至るまでの間にも、蘇軾を要職から降ろそうとする運動が執拗に続けられ、蘇軾も地方に転出することを願い出するなどしていた。(2) 皇帝の詩は、唐の時代には皇帝の詔勅の草稿を作る役所の庭に紫薇花を植えたという故事を踏まえて、知制誥の職にある蘇軾について歌ったもの。(3)

以下の蘇軾の詩は皇帝に差し出すのにふさわしいよう、香り高い語句を選んで並べた

工夫の作で、読み解くのはかなりの労力を要する。しかし、それに見合うだけの中身があるわけではないので、ざっと流れがわかればよいという程度の安直な訳文を原詩に添える)

繡裳昼哀雲垂地、(雲が地に垂れるような天子のお姿)
 不作成王剪桐戲。(少年ながらも戯れの遊びなどなさない)
 日高黄繖下西清、(日の高いころに^{じえいでん}邇英殿にお出ましされ)
 風動槐竜舞交翠。(折からの風^{えんじゆ}に槐の影が揺れる)
 壁中蠹簡今千年、(ここには千年を経た書物が納められ)
 漆書科斗光射天。(開けば漆のような黒々とした文字が光を放つ)
 諸儒不復憂吻燥、(ここに集まる学者は苦も無く詩を詠み)
 東宮賜酒如流泉。(東宮において、流れる泉のように酒が振る舞われる)
 酒酣復拜千金賜、(酒たけなわのとき、頂戴するのは千金に相当するもの)
 一紙驚鸞回鳳字。(鸞が舞い^{おおどり}鳳が踊るような字が記された一枚の紙)
 蒼顔白髮便生光、(それは我らの白い髪や青い顔を輝かし)
 袖有驪珠三十四。(私は袖の内に珠のような三十四文字を納める)
 歸來車馬已喧闐、(帰れば早くも車馬を連ねて人々が集まり)
 争看銀鈎墨色鮮。(陛下の墨痕の鮮やかさを争って見ようとする)
 人間一日伝万口、(このことは一日のうちに一万の口によって伝えられ)
 喜見雲章第一篇。(陛下がこのたび初めて臣下に賜った御書を喜び見る)

玉堂昼掩文書静、ぎょくどう(玉堂で日中職務にあるときは、静かに)

鈴索不搖鐘漏永。(時は緩やかに流れる)

莫言弄筆数行書、(筆を弄して数行の書を記すまでもなく)

須信時平由主聖。(お上の御聖徳によって平和な世になる)

犬羊散尽沙漠空、(外敵は犬や羊のように砂漠の彼方に逃げ去り)

捷烽夜到甘泉宮。(都には勝利の知らせが届き)

似聞指揮築上郡、(英雄が西方の地を開くのを聞いて)

已覺談笑無西戎。(談笑の内にもはや争う者はいなくなるのである)

文思天子師文母、(天子は文を重んじられ、その師こうたいこうたいごう(高太皇太后)もまた文を重んじられる母)

終閉玉關辭馬武。(ついには西方の関を閉ざして武力の行使をやめるであろう)

小臣願對紫薇花、わたくし きるすべり(小臣は紫薇花に対しつ)

試草尺書招贊普。(諸外国に帰順を促す手紙の草稿を書くのである)

■狄山論匈奴

蘇軾が皇帝に講義したのは『論語』ろんごだけではなく、歴史に題材を採って何度か講義をし、その論点を整理して8篇の短文を記して皇帝に提出している。その中から、「唐宋八家文」に収録されている1篇を見ておこう。時に哲宗皇帝は数えて11歳、現代でいえばまだ小学生の年齢である。

(この短文は『史記』の「酷吏伝」の張湯の条について論じたもの。最初に『史記』の当該の部分を読んでおこう。小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳『史記列伝』(岩波文庫、

1975年)から訳文をそのまま引用する。なお酷吏とは、法を厳格に適用して恐怖政治を執行する官僚で、冤罪を量産して己の手柄とし、それを推進力に昇進の階段を駆け上るのを常とする。その典型が漢の武帝に仕えた張湯だった。

匈奴が和睦を申し立てきて、群臣一同は天子の前で会議を開いた。そのとき博士の狄山が主張した、「和睦が有利でございます」。天子がその理由を尋ねると、狄山は答えた。『兵(兵器・軍隊)は凶器である』と申します。たびたび動かすものではございません。高帝(高祖)さまは匈奴征伐を思いたれましたが、平城でたいそう苦しめられたあげく、やっとのことで和睦を結ばれたのでした。恵帝さまと呂后さまのみ世は、天下は平穏安泰でした。文帝さまのみ世では、呉や楚など七国が謀反して、景帝さまが二つの宮殿の間を往復してみ心を悩ましたまうこと数か月、呉や楚などはうち破れましたが、そのあとも景帝さまは最後まで〔匈奴に対する〕軍事行動のことは口にのぼされず、そのために天下は富み豊かでありました。このたび陛下が兵を動かして匈奴を攻撃なさいましてからは、わが中国は空となり、国境地帯の人民ははなはだ貧窮し苦しんでおります。これらのことをから考えますれば、和睦が第一でございます。天子はそこで張湯に尋ねた。張湯は答えた、「あれは愚かな儒者で、なにも知っておりません」。狄山は言った、「わたくしはもちろん愚かな忠義者なんでしょう。しかし御史大夫の張湯とはいえば、それこそ偽りの忠義者です。張湯が淮南王や江都王の事件を裁いたやりかたなど、法文をあやつって諸侯を過酷な罪におとし、〔陛下の〕肉親を離れざるにさせ、皇室守護の臣(諸侯)に不安をいだかせたのでした。張湯が偽りの忠義者であることを、わたくしはもとからはっきりと存じております」。そこで天子はむっとした顔色になって尋ねた、「先

生（狄山をさす）に一つの郡をまかせたら、外夷の侵入と略奪をなくすことができるか？」 答え、「できません」。尋ねて、「一つの県では？」 答え、「できません」。もう一度尋ねて、「一つの障とりでのうけもつ地域をまかせたらどうだ？」 狄山は、返答につまると裁きにかけてられることになるろう、と推察して、答えた、「できます」。その場で天子は狄山を障とりでに送り任につかせた。一か月あまりあと、匈奴は狄山の首を斬りとって引きあげた。それ以来、群臣は恐れおののいた。

この部分を特に取り上げて少年皇帝に講義した意図は容易に推測できるだろう。神宗しんそう皇帝のもとで改革派は西方かこくの夏国に対して積極策を取り、手痛い敗北を被った。また、改革派は、改革に反対する者を厳しく弾圧し、蘇軾自身もその標的となった)

謹んで漢代かんの制度について検討してみますと、博士（皇帝に仕える学者）の俸禄はわずかに六百石でした。それでも、朝廷は、大切な事柄があるときには、丞相、御史、九卿、列侯とともに、必ず博士を可否の議論に参加させました。皇帝は日ごろから儒者と親しみ、学問を尊重し、博士はたとえ身分は低くても意見を申し述べることを妨げられなかったのであります。

それで、狄山てきざんは皇帝の前で張湯ちやうとうと議論を争うことができたのでした。このようなことは、一般の者にはなかなかできないことではありますが、人の上に立つ君主はこうありたきものなのであります。君主がおたやかな顔で、意見を申し上げようとする者を促し、虚心にそれを受け入れようとしても、恐れてなかなか言おうとはしないものです。まして、武帝のように顔色を変え、怒りに任せて、意見を言った者を死に追ひ

やるようなことをしたらどうなるでしょうか。つまり、張湯が権勢を振るい、盗賊が天下の半ばを占め、漢朝がほとんど乱れるに至ったのは、狄山の意見が容れられなかったことから始まったのであります。

(少年皇帝の教育を、蘇軾等の保守系文化人が担ったのであるが、皇帝自身は早くから父神宗しんそうの遺志を継いで改革政治を復活させようとの志を抱いていたようだ。また、極壇に厳格であった程頤てい(本章 76 ページなど)を毛嫌けいいする余り、保守系文化人全体を嫌うようになったという説もある)

■昨見韓丞相言王定国今日玉堂独坐有懷其人

詩題は「昨日、(先の)宰相かんこうの韓絳おうきょうに会うと、韓絳は王鞏おうきょうのことを言われた。今日私は一人で玉堂ぎょくどうに座っていて王鞏おうきょうのことを懷おもった」。玉堂かんりんは翰林院いんにあつて、これまでもしばしば見ている。

(王鞏おうきょう (字は定国) あざな ていこくが政界の大物である韓絳かんこうと親しかったことは本章 7 ページで見ている。王鞏は本章 158 ページで見たように揚州ようの副知事に任命され、蘇軾は王鞏が早くに実務に就くことを望んでいたのだが、なぜかまだ赴任していなかったようだ)

昼間ぎょくどう、玉堂に臥せっていると、

微かな風が白い衣に吹き寄せる。

銅かめの瓶あびが碧い井戸の底におろされ、

引き上げられる瓶から百尺の流れを作って水が落ちる。

その音によって夢から覚め、ひと掬いの冷たい水を愛でる。

その水を我が友(王翬)^{おうきゆう}に与えたく思う。

苦い言葉もまた肺肝を涼しくするであろう。

貴君は秀眉にして玉のような両頬、

翔ける鸞(神の鳥)^{か らん}のような勢いがある。

貴君は江淮の地(揚州)^{こうわい よう}に行き、川の流れによってその詩を清く洗うのがよい。

都にあつて御馳走やらい酒やらの並びの前にはいたのでは、

貴君の信美は安んじられはしないのだ。

貴君も韓絳^{かんこう}のように丞相に昇る功業を成し遂げて後に、

家に還つてのんびりと酒杯を挙げるのがよいであろう。

そのときには人間世界において客として招きたい人があるならば、

手紙を出して呼ぶのは難しいことではない。

私も貴君の門を叩いて、起舞して飲びを尽くすであろう。

■上韓持国

韓絳^{かんこう}の弟の韓維^{かん い} (字は持国^{あざな}) に差し出した詩。韓維は7月まで副宰相であつたが、免ぜられて地方に出ることになった。

(韓絳は8人兄弟の三男で、五男の韓維^{かん い}、六男の韓縝^{かんしん} (前年4月まで宰相であつた) も朝廷の枢要の地位に就いた。漢の時代に揃つて高位に昇つた賈氏の三兄弟^{さんこ}がいて「三虎」と呼ばれた。中でも賈彪^{かひゆう}が最も畏怖され、この詩の冒頭でそのことを用いている)

韓^{かん}氏の「三^{さん}虎^こ」はいずれも国家の指揮を執り、
なかでも一^{かん}虎^い(韓^{かん}維^い)はかの賈^か彪^{ひょう}に似る。
家に端居して机にもたれているときには、無心を学び、
早朝に朝廷に入るときには、常に正しい姿を見せる。
時流に逆らって独り行くのは聳え立つ山のようにであり、
天下の議論を逆さまにするのも厭わないのは真に効力のある薬のようである。
二^{てつ}聖^{そう}(哲^{こう}宗^{たい}と高^{こう}太^{たい}皇^{ごう}太^{たい}后)の政治を担って正しい道に戻し、
排斥されてもついには衆人の力を一つに合わせた。
私のような者はただたらふく飯を食うことを思うだけで、
(韓^{かん}維^いのような)君子がいなかったならば国が治まることはない。
(韓^{かん}維^いは汝^{じょ}州に退くことを希望しているのだが)
汝^{じょ}州の西^{せい}湖^こに船を浮かべて春風に酔って臥せたのでは、
いったい誰が民のために豊年をもたらすのだろうか。
(韓^{かん}維^いは汝^{じょ}州に行くことを望んだのだが、実際には鄧^{とう}州知事に任命された。この詩で蘇軾は韓維を讃えている。しかし、後に見るように蘇軾と韓維の関係は必ずしも良好ではなく(本章222ページ)、韓維を要職から降ろす勅書を書いたのは蘇轍であった)

■書雪堂義墨

王^{おう}誥^{しん}が墨を贈ってくれたので、それについて記した短文。王誥が家柄がよ

く裕福な友人であることは本章 61 ページなどで見ている。

元祐二年十二月二十一日、王誥おうしんが墨二十六丸、およそ十種余りを贈ってくれた。あれこれ磨って、数十字を作り、その色の深い浅いを観たところ、そのまま結構なものあれば、混ぜ合わせて一品としてちょうどよ佳い墨となるものもあった。かつて私は黄州こうにいたときに、近隣の四五郡の人から酒が送られてきたので、私は合わせて一つの器に蓄え、これを「雪堂せつどうの義樽ぎそん」と呼んだ。

いままた「雪堂の義墨」と呼んだらよいだろうか。

(酒も墨もブレンドしたという話である)

■次韻王都尉偶得耳疾

同じころに王誥おうしんが耳を患い、そのことを詩に詠んだので、それに次韻した。

人間の体に開いている六つの穴なんぞは、
貴君も知っている通り、あってもなくもよいものだ。
私が言いたいのはたったのひと言、
病いぼは疣！
決然と取り去ってしまえばよいのだ。
眼や耳が利けばよいというものではない——

病人は(神経が研ぎ澄まされて)寢床の下の蟻の動きも巧みに聞き取るというし、

とけ
棘の先端で猿が踊るのを見たがる愚か者もいる。

真の聡明は耳や眼にあるのではない。

葉たなんと騒ぐのは家の者を煩わせてしまっただけだ。

三国時代の周瑜しゅうゆは耳がよすぎて、

音楽を聴いて少しでも音程がずれるといちいち首をかしげたという。

貴君もそんなことがしたいわけではないだろう。

■跋南唐挑耳図

上の詩に関連して、これより4年後に記した文章を見ておこう。五代十国時代の南唐なんとうのときに描かれた『挑耳図』ちようじずという画に添えた短文で、画についてはほとんど何も述べず、もっぱら王詵おうしんとの楽しいやりとりを記している。

(現在南京大学なんきんに所蔵されている『勘書図』かんしよず(一名『挑耳図』ちようじず)という画がある。五代十国時代の南唐なんとうの王齊翰おうせいかんの作で、机上に書物を開き、何やら右耳をつまんでいる人物が描かれている。蘇軾が見たのは恐らくその画であったのだろう)

おうしん
王詵はかつて俄かに耳を患って聞こえなくなった。こころ意に耐え難く、私に治療法を尋ねた。私はこう答えた。

「貴君の家は代々の武将であります。頭を断たれようが、胸に穴を開けられようが、惜しむものではなかったであります。二つの耳が役に立たないのなら、割い

て捨て去ったらよいではありませんか。疾やまいなどは、三日もしたら自ずと去るのでは
ありませんか。もし去らないようでしたら、私の耳を割いてお取りなさい」
王誥ははっと悟るところがあり、三日で病いは良くなった。それで歎びの歌を私に示
した。

老坡心急頻相勸、(東坡先生はせっかちなことを言うけれど)

性難只得三日限。(僕も性格として三日の辛抱がやっとだ)

我耳已效君不割、(僕の耳も先生の耳も割かずにすみ)

且喜両家都平善。(両家は嬉しいことにこれまで通り仲良しいられる)

いま王鞏おうきやうが所蔵する『挑耳図』を見たところ、これは王誥から得たというので、いさ
さかこのことを記した。

げん ゆう
元祐六年八月二日。

■送喬全寄賀君六首

これは「異人」を好む蘇軾らしい作品。序文、喬全きやうどうへの送別の詩1首、
そして賀冗がこうに寄せた詩5首から成る。

昔から伝え聞いているのは、靖長官せいちやうかんと賀水部がすいぶは唐末五代の人で、道みちを得て不死
であったということ。

真宗皇帝しんそう(宋の三代皇帝)が泰山で封禪ほうぜんの儀を行ったときに、道の左側で皇帝に
挨拶する者がいた。その者は、「晋しん(唐と宋の間の五代の三番目の王朝)のときに水部すいぶ

員外郎であった賀元がいがいろうにございます」と言って、再拜して去った。皇帝は気づかずに通り過ぎ、後に、道辺で出迎えた人々の名簿を見て大いに驚いて探させたのだが、見つけることができなかった。

天聖てんせい(四代皇帝の仁宗じんそうの世)の初めに、賀水部はその弟子の喻澄ゆちようを都に使わして、仏像を進呈した。それは数千万の価値があった。張方平ちやうほうへいは喻澄と遊び、以上のことを具つぶさに知った。

ここにまた喬全きやうぜんという者がいる。若いときに大病を患ってほとんど死にかけた。賀水部は喬全に道を学ばせた。喬全は今年八十歳で、ますます元気である。世間の人々は賀水部をまた見ることはないが、喬全はしばしば賀水部と会っている。

元祐二年十二月、喬全は都に来て十日ほど滞在した。私は引き留めたが、喬全はこう言って断った。

「吾が師しよ(賀水部がいすいぶ)と上元じやうげんの日に蒙山もうざんでお会いする約束をしているのです」

そして、

「吾が師はかつて密州みつしゆで遊ばれたときに、貴公きこうが常山じやうざんへの道を登るのを知り、貴公のことを心に喜んでおられるようでした」

とも言った。

この詩を作って喬全を送り、合わせて賀水部に五首の絶句を寄せる。

(1) 賀水部がいすいぶという仙人せんじんが実在して、五代十国の晋朝しんのときに水部員外郎みずぶ いんがいろうという名目上の官を授けられていたとしたら、晋朝が滅んだ946年に20歳だったとしても、このとき元祐2(1087)年には161歳ということになる。(2) 賀水部と並んで名を挙げられて

いる靖長官^{せい}については第5章 158 ページに記述がある。(3) 蘇軾^{みつ}が密州知事であったときに、州舎^{こうこうどう}を建て増して蓋公堂を作り、そのときに書いた文章に、「隠れた君子は実際には見ることができない。もしも見られたとしても招き入れることはできないであろう。……民衆にまじってそのあたりを行き来しているのだろうか。どうかして会えたりしないだろうか」と記した(第5章 124 ページ)。喬全^{きょうどう}の言っていることが事実なら、まさに一人の仙人が蘇軾のごく近くにいたのである)

喬全^{きょうどう}に贈った詩

かのとき貴君の年齢は二十、
美しくかつ華やかであった。
ところが、悪い病にかかって眉も鬚も落ち、
紅顔は白髪に変わり、妻や子を驚かした。
鏡を見て自分自身を嫌い、この体を棄ててしまおうと考え、
奥深い山に茅の庵を結び、
松の腴^{あじら}を食べる暮らしに入り、
道辺で俗世を逃れた博士^が(賀水部)と出会った。
博士は清らかに痩せ、四角い瞳からの光が野を照らした。
再拝して起き上がる前に、
声を一つ博士から浴びせられ、
この身は決して吾ではないと覚った。

泥の中から、蓮の花が白く輝き出たかのように感じ、
 師に従って東に行き、(密州にある)濼水と邾水の二つの川を渡った。
 貴君は師とともに山の頂から、
 私の車の跡が密州の地に付けられるのを見ていたのだが、
 私は俗人の間に仙人が混ざっているとは知りもしなかった。
 貴君はいまや年は八十、喉の肉が胸にまで垂れ下がっている。
 しかし、飛ぶようにして山を登り、人が手助けしようとする^{いか}と嘖るほどだ。
 貴君は都に来たものの、東に帰る約束を達えることはない、
 新たな年には師の老仙儒のもとに詣でるのである。
 望むのは、
 秋風とともに二羽の^{けり}鳧が西へと飛んで来て下り降りること。
 仙界で採れるという瓜のように大きな菓を私にも分けてくださるだろうか。
 (^{けり}鳧が仙人のイメージであることはこれまでも何度か見ている)

賀水部に贈った詩 其の一

師は戦乱の時代に成長され、
 早くに俗世から身を逃れ、
 晩年^{げんゆう}に至って元祐太平の人となられた。
^{ぼつかい}渤海が^{そうてん}桑田になるような大変化にも驚くことなく、
 春雨^{きざん}の^{もうざん}ころに^{きざん}龜山、^{もうざん}蒙山のあたりに行こうとされている。

(^{きざん}亀山は第7章108ページなどで見ている。^{もうざん}蒙山はその東の山。序文にあった^{しんそう}真宗皇

帝が^{ほうぜん}封禪の儀を行うために^{たいざん}泰山に向かった道筋に当たる)

其の二

師はかつて封禪の儀のためにお出ましになった皇帝に挨拶しようとした。

簡素な平服であったので前に出るのをためられた。

夜に皇帝がお泊りになる^{あんぐう}行宮で師の名が空しく奏せられ、

皇帝は、師が雲の間に遠く去ってしまったのを残念がられた。

其の三

老いた身をもって時に言葉を発せられるのは、

自身のためではない。

わずかな語句にも千鈞の重みがある。

^{かん こう}漢の高皇帝に会うことはできなくても、

高皇帝が^{まみ}驚き見えた^{しやうざん}商山の四人の隠者に相当するお方は現にいまいるのだ。

其の四

昔から言い伝えられているように師は^{しん}晋朝の人であった。

すでに天に飛び上がって仙人に変化するありさまを見せている。

聞くところではいまは東の^{もうざん}蒙山におられるとか。

師のもとで薪を集め水を汲む奉仕をして、
仙薬を焼くありさまを拝見したいものである。

其の五

千年に伝わる風流人といえば唐代の賀知章、

賀知章が最も愛したのは謫仙人こと李白であった。

しかし、二人のように詩を吟じて酔って舞うことを終生続けるのは無益であろう。

粟の飯と藜^{あかぎ}の汁を食らって、精神を養う法を問うべきである。

■送家安国教授帰成都

蘇軾と同郷で同じ年に科挙に合格した者に家定国^{かていこく}と家安国^{かあんこく}の兄弟がいたことは本章 122 ページで見ている。これは、家安国が成都^{せいと}の学校の教授となって蜀^{しよく}に帰るのを見送った詩。

(この詩は様々な故事を引き、しかもかなり高度な用い方をしているために解釈が相
当に難しい。したがってこの訳はレベルの低い「ずっぽ訳」である。大意はたぶん取り
違えてはいないであろう)

貴君と別れてから二十年、
私が歩んできた道は艱難に満ち、
両鬢の黒さはすでに失われてしまった。

それでも、学問ばかりはついに不変である。

鳥は飛びつつもしばしば退かなければならないことがある。

それでも、蛍が草にしがみついたまま干からびて死んでしまうようなことはしない。

私はひとたび罪に落とされてから、

葉が霜によって零落するのを五回見た。

夜は空しく世の興亡を一人論じ、春の夢にもなお経典を読んでいた。

思いがけないことに、新設の学説は廃されて旧に復し、

若い学徒は伝統を守ってきた人を師として教えるを受けようと、

雲を凌ぐ見識の持ち主の手を煩わすことになり、

貴君は蜀の人々を導く星となるべくかの地へと向かう。

成都の学校には苔むす伝統があり、

庭には古い柏の木が高く聳え立っている。

生徒らは学問の真の香りを貴君から聞き、

これまで学んできたものが偽物であったと知るであろう。

蜀にはたくさんの鳳の雛がいるから、

竹のごとき貴君のもとで立派な翼を伸ばしてゆくだろう。

かくて、貴君の奏でる音律の整った音楽に合わせて、

鳳たちは古の聖天子の庭で飛び舞うようになるのだ。

私も蜀に帰り、残り少ない歳月を貴君とともに楽しみたいものだ。

■楽全先生文集叙

らくぜん ちようほうへい
 楽全先生の文集の序文。楽全先生は蘇軾の大恩人張方平の号である。蘇軾は張方平の文集を編んでこの序文を書いた。張方平はこの年、81歳、引き続き南京応天府で悠々自適の日々を送っていた（第7章 145 ページなど）。

さんごく こうゆう
 三国時代の孔融は志が大きく議論は高遠であった。当時の世において著しい功績が現れることはなかったのだが、それでも英偉豪傑の気は一時代の手本となり、孔融が盛憲や邠慮の人物を論じた文章は激しく高ぶる大丈夫の風儀があった。同じ時代の諸葛亮は文章をもって名を顕したのではなかったが、万物の理に通じて事を成就させるありさまと、理論と實際を深く知り抜いた洞察力は自ずから言葉となって現れ出た。諸葛亮が書いた『出師の表』は簡明でありながら意を尽くし、率直であっても放縦にはならず、実に偉大な言論文で、太古の『伊訓』、『説命』に並ぶ名文で、秦や漢以降の君主の歡心を得ようとして仕えた者が全く及ぶところのものではなかった。

私が常々残念でならないとしているのは、孔融と諸葛亮の文章を完全な形で読めないことだ。

らくぜん
 現代の楽全先生はほとんどこの二人に近いのではないだろうか。

あ あ し
 嗚呼、士として天下の重みを自らのこととして任ずる者がいなくなつてすでに久しい。議論が不得手なのではない。政事や文学について機敏に応じないわけでも、該

博な知識を持っていないわけでもない。大きな事に臨んだときにも、根本を忘れず、己の日ごろの言説を失ってしまうことのない者が少ないのだ。つまりいまの士は器量が小さいのである。

楽全先生はまだ普通の庶民であったときから、我が身を成長させて国家の仕事に補おうとの望みがあった。若くして出仕し、老いて帰隱するに至るまで、言葉を使って時の流れに乗じたり、人に媚びたりすることは決してなく、君主に対するときにも、よく考えて後に発言した。評判は常に一定で、利害に左右されることがなく、まことに孔子がいうところの「道をもって君に仕える大臣」である。孔子から時代が遠く離れ、道が曖昧となり、志のある士、あるいは仁を具えた人であっても、少しでも低い地位に置かれると、高く用いられることばかりを望んでしまうのだが、楽全先生だけは一人邁進する気概に溢れ、公明正大な言論を行ってきた。これもまたまことに孔子のいうところの「用いられるのなら道を行い、用いられないのなら世間から隠れて道を楽しむ」というものである。上に対しては、君主と合致することを求めはしなかったもので、貴ばれつつも用いられず、用いられても十分に力を発揮できなかった。下に対しては、士大夫したいふと合致することを求めなかったもので、楽全先生のことを悦ぶ人は少なく、悦ばない人が多かった。しかし、究極的に天下の偉大な人を挙げるとなると、必ず楽全先生が第一であるとされているのだ。

楽全先生は自身の本性を発揮し尽くし、天命も知り抜いて、自然のままに振る舞い、やむを得ずして為さねばならないことだけを行った。文章を書くことで世に名を顕けんそうと思うことはなかったけれど、慶暦年間から元豊年間げんぼうに至るまでの四十余

年に、天下のことを論じて皇帝に示した文章は数多くあり、あるものは用いられ、あるものは用いられなかったけれども、全てが礼と義に基づき、人の情に合い、是非の判断はどれもが先人の議論の内に根拠があり、結果としての得失は後に必ず正しいものであったと検証された。その他の詩文に及んでは、どれも清遠雄麗で、読む者は楽全先生の人となりを想い見ることできる。まことに孔融、諸葛亮に似ているとわかるのである。

私は二十歳のときに、楽全先生の門下生となるべく成都^{せいと}でお目にかかった。ひとたびお会いすると、楽全先生は私のことを天下の俊英と同じように遇してくださった。それから三十余年の間に、私を啓発して成就させるところのものは至って多く、しかし、先生にお返りするものはほんのわずかすらもない。私は先生の文集を求め、自分で校合して家に大切にしまってきた。ここに先生の文章の大略を論じ、もって後世の君子の評価を仰ぐものである。

昔、曾公亮^{そうこうりやう}は私にこのように言った。「皇帝の前で重要な問題を議論するときに、他の者が一日かかって繰り返して述べても言い尽くせないことを、張公^{ちやう}は数言で結論を導き出し、そのまま輝くような文章になり、書いて誦じてますばらしいものであった」。先生が言われたことは全てが採用されたわけではなかったけれど、慶暦以来の名臣として先生以上に敬われた人はいないのである。

先生は今年八十一歳、門を閉ざして訪問客もなく、終日正座して、造物者とともに無何有之郷^{ムトビア}に遊んでいて、いまはその言葉を聞くこともなく、ましてその文を記すこともない。

(要するにこれは歯が浮くばかりの過剰な賛辞を書き連ねた文章であるのだが、蘇軾が書くと不思議と気品があり、説得力がある。文章の底に、大恩人への深い感謝の思いが流れているからなのだろう。「造物者とともに無何有之郷ユートピアに遊ぶ」とあるのは、「楞りょう伽が経きょうの後に書く」(第7章145ページ)で見たように、晩年は仏教にはなほだ傾倒していたことをいうのだろう)

■和子由除夜元旦省宿致齋三首

げんゆう
元祐3 (1088) 年、蘇軾 53 歳。

弟の蘇轍は除夜から元旦にかけて省中に宿直し、齋戒して朝を待ち、3 首の詩を詠んだ。これはそれに和したもの。

其の一

僕らが江湖こうこに流落したのは、天が運命に関与したからではあるまい。

兄弟でいま禁中に仕えているのはただの偶然によるものだ。

世は等しく年が新たになったけれど、

僕ら兄弟はまだ会えないでいる。

それは帰郷できない境遇に置かれているためなのだ。

(かつて流罪になったのも、いま宮中にあるのも全てが偶然であるところでは言っている。末の句は、故郷に住む田舎紳士であるならば、新年になってただちに兄弟が顔を合わせられるのにとという意味)

其の二

僕は白髪やつれが白にして蒼顔、歳は五十三、

こんな僕であるのに、家の者ときたら、

この春のために新調うわぎした衫を無理やり着せたのだ。

新年の朝会から帰ってくると、その両袖にはまだ天の香りが満ちていて、

頂戴してきた銀はたの幡が頭上から子供らに微笑みかける。

(元旦には宮中で新年の儀が行われる。蘇轍が齋戒したのは、それに臨む準備であった。

儀式が終わると、朝臣は美しく飾はたった幡をもらって帰る)

其の三

かの年の春、

僕らは月明かりを踏んで試験場へと急ぎ向かった。

そのときの試験委員長は醉翁すいおう おうようしゅう(欧陽脩)、

醉翁は試験期間中は鎖された扉の内に籠った。

醉翁の門下生はみな白髪の老人となり、いま幾人が残っているだろうか。

そんな僕が醉翁と同じ役目を仰せつかって若者たちの新しい詩句を審査するのだ。

(蘇軾はこの年、科挙の二次試験の試験委員長を務めることになった。かつて蘇軾が科

挙に合格したときには欧陽脩おうようしゅうが試験委員長だった。32年を経て同じ役割を担うことに

なったのである)

■書試院中詩

科挙の試験委員長になった蘇軾は、委員になった孫覿、孔文仲らとともに1月21日に、科挙を統括する役所（試院）に入り、それより1カ月余り、外に出ることを許されなかった。一切の不正を防ぐためである。これは試院から解放された直後に記した文章。

元祐三年一月二十一日、科挙の監督としての仕事が始まり、李公麟を採点委員に招いた。三月初めに採点が終わり、諸庁から関係した者などが集まった。そのうちの数人とともに李公麟のもとを訪れた。このとき李公麟は水悸の病に苦しみ、気が塞いで食欲がなかった。皆で地面に転ぶ馬の詩を詠んで李公麟の煩悶を払おうということになり、黄庭堅が最初に詩を作った。

儀鸞供帳養虱行、(試院に閉じ込められていた間は、寢床は虱がぞろぞろで)

翰林湿薪爆竹声、(役所から支給された薪は湿ってばちばち撥ね)

風簾官燭淚縱橫。(隙間風で蠟燭の蠟があちこちに乱れるありさまだった)

木穿石盤未渠透、(石に穴を穿つようにしても外には全く通じず)

坐窓不遯令人瘦、(窓辺に座して瘦せてゆくばかりで)

貧馬百嚙逢一豆。(貧しい家の馬がたった一粒の豆を百回噛んでいるようなものだった)

眼明見此玉花驄、(ここに転んだ馬をまざまざと見て)

径思著鞭随詩翁、(すくに思ったのは、詩翁(蘇軾)の乗る馬を鞭打ち)

城西野桃尋小紅。(郊外に出て桃の紅い花を尋ねるとのことだ)

この詩に私が次韻した。

少年鞍馬勤遠行、(若いときは馬にまたがって遠くに行き)

臥聞嚙草風雨聲、(夜には馬が草を噛む音を寝床で聞いた)

見此忽思短策横、(転んだ馬を見て思うのは、横たえたままの鞭だ)

十年脾肉磨欲透、(十年の間に足の筋肉がすっかり衰えてしまったので)

那更陪君作詩瘦、(黄庭堅の詩に和そうとさらに身を削るようなことはしたくない)

不如芋魁歸飯豆。(芋の蔓と豆の粗末な飯でもいいから食べたいものだ)

門前欲嘶御史驄、(門前で馬が嘶くのは試験期間の終了を告げにきたのだ)

詔恩三日休老翁、(老いた我が身にこれから三日の休暇が与えられるのだが)

羨君懷中雙橘紅。(黄庭堅には母上が待っておられるのを羨ましく思う)

さいけい ちょうほし じょかん りょうしゅういち
蔡肇、晁補之、舒渙、廖正一がそれに続いた。それらの全てをここには記さない。

私は戯れにもう一つ絶句を作った。

竹頭搶地風不举、(地に付くばかりに曲がった竹は風が吹いても頭を挙げない)

文書堆案睡自語。(採点する答案に埋もれた私も同じようにな垂れて眠ってしまった)

看馬欲▲頓風塵、(馬を見て思うのは、とにかく風の中を走って)(▲は馬+展)

亦思歸家洗袍袴。(家に帰って垢にまみれた衣服を洗うことだ)

これらの詩に対して李公麟は笑って言った。

「馬がようやく私の筆に入ってきましたぞ」

紙を取ってさっと画を描いた。その後これらを記す。

三月六日、眉山の蘇軾びざんが書く。

(1) 画を得意とする李公麟りこうりんに気の置けない仲間たちとともに楽しんだひとときをこの短文に記録した。試験監督として1カ月余りも続いた拘束から解放されて、わいわい賑やかに詩を詠み合い、絵筆を振ったのだらう。詩は意味のよくわからないところがあるので、大意を示した「ずっぱ訳」である。(2) 蘇軾びざんが関わったのは科挙の二次試験で、皇帝自身が行う最終の三次試験は3月10日に実施され、3月22日に合格者が発表された。合格者は首席りじょうねいの李常寧りじょうねいら508人であった。歐陽脩おうようしゅうは試験委員長のときに唐宋八大家に選ばれるような門下生を3人も得たのだが、残念ながら蘇軾の場合には、合格者の中に後世に燦然とその名を輝かすような者はいなかった。ただ、合格者の中に章惇しょうてん（蘇軾のかつての親友）の息子の章援しょうえんや、周敦頤しゅうとんい（著名な大学者）の息子の周燾しゅうとうがいて、次の第9章で2人との交流を見ることになる)

■韓康公挽詞三首

韓絳かんこう（康公）こう（本章168ページなど）が3月7日に亡くなった。77歳だった。蘇軾はこの挽詞を詠んだ。3首のうち2首を訳す。

其の一

故国は高い木々に覆われている、

だから貴いのではない。

王を助け国を興す大臣がいるときにこそ貴いのである。

私は公よりも後れて世を去る者、
 公のような老成人(円熟した大人物)がおられる時代にどうにか間に合った。
 公の徳業は文武全般に及び、
 公の風流は高位高官を代表した。
 公が遊びに巡ったところはいまや公を喪って空しくあるのみ、
 あちこちで残された民衆が泣いている。

其の二

公は父子二代にわたって忠清の徳を顕し、
 公は三代の皇帝に仕えて功績があった。
 功を成した後も郷里に帰ることなく、
 栄誉を極めてからも君主に尽くすことを忘れなかった。
 学問は正しい伝統を厳しく守り、
 武威は国境の不穏な空気を鎮めた。
 古代の名臣、韓奕の後を継ぐ者として、
 全ての官員が優れた仕事をするよう指導されたのだった。
 (最後は韓絳かんこうと同姓の韓奕かんえきを持ち出して韓絳を讃えたのだが、韓奕がいかなる人物であったかをわざわざ調べなくてもよいだろう。なお韓絳の実像は本章 9 ページで触れたようにここに詠まれているほどではなかったようだ)

■余与李廌方叔相知久矣領貢舉事而李不得第愧甚作詩送之

詩題は次の通り。「私は李廌（字は方叔）とは長い間の知り合いである。私は科挙を執り行い、李廌は合格しなかった。私は非常に愧じ、この詩を送った」。

科挙は宋代に入ってから非常に厳格に実施されるようになり、試験委員長であろうとも、知人を有利に扱うようなことは一切できないようになっていた。蘇軾がここで愧じる言っているのは、李廌が書いたはずの優秀な答案を見逃してしまった不明を恥じるという意味である。かつて蘇軾の答案を特に優れているとして梅堯臣が取り上げていなかったら、蘇軾の人生は大きく変わっていただろう。なお、李廌は蘇軾と同じ年に科挙に合格した李憲仲の子で、直接会ってもいるので、長い間の知り合いだと記しているのである。

李君と知り合ったのは昨日今日のことではない。

李君の文章の勢い是一目でわかるはずだった。

唐代の李程は普段から李華の文章は優れていると説き、

自信をもってこれは李華の文章であると見抜いた。

私は自信なく迷ってしまったことを慚じ、

それからは家に籠っているのだが、

李君は大いに笑って、

「行止こうし(及第か落第か)は天の定めるところ、

あなたが責められることはない」

と、言ってくれる。

このたびの受験生は五千人、

李君には怨みはなく、私には徳がない。

羊を買い、酒かを沽ってせめて李君に謝ろうと思う。

どうか春風の前で私のために十分に酔ってほしい。

家に帰ったなら、雲しのを凌ぐすばらしい詩を賦すがよい。

私が見るに、李君そうの相は瘦せた隠者になるものではないのだ。

■和宋肇遊西池次韻

都の西側、順天門じゅんてんもんの外に周囲九里三十歩きんめいちの金明池があり、皇室の園林として美しく整備され、都の景勝地の一つとなっていた。都の西にあることから西池せいちともいわれ、広い水域に船を浮かべて水軍の訓練をすることもあった。宋肇そうけいという者が金明池で遊んだ詩を詠み、それに次韻した。

皇帝は慈愛と節儉のお心があって外国との戦争をなさらないが、

ここでは千艘の軍船が瀬を下る訓練を指導される。

人は鱧もうどう（軍艦）が飛ぶように動きまわるさまに目を見張り、

仙界の巨大な亀が空に舞うのはかくあろうかと想像する。

西を見れば、我が故郷は三千里の彼方、
回顧すれば、そこを出てよりすでに二十年。
笑ってしまうのは、こしてちまちまと官職にしがみついていること、
貴君が神仙の地の近くで日々を過ごしているのには遠く及ばないのである。

(この詩の後半は、そうけい宋肇がこのときみざん巫山の知事で、巫山はしよく蘇軾の故郷である蜀にあり、
昔から仙人が住むところとして知られていることに基づく)

■僕領貢舉未出錢穆父雪中作詩見及三月二十日同遊金明池始見其詩次韻 為答

詩題は「私が科挙の監督をしていてし いん試院から出られずにいた間にせんきょう錢劄
(字のあざな穆父)が雪中の詩を作った。三月二十日に一緒にきんめい ち金明池で遊んだ
ところ、初めてその詩を見せてくれた。それで次韻して答えた」。錢劄は
本章17ページなどで見ている。

私がここに来るのを知って、雪は全て消え去り、
貴君が来るのを待って、花はまだ風ひるかぜに飄らないようにしていた。
私は同行の者を避けて一人だけで少しばかり飲んでいたり、
馬で走り来る使いに出会い、貴君のお招きを得ることとなった。
ぎょりゅう魚竜(軍船)が千里を翔けるような絶技に見入るのは、
四朝(四人の皇帝の治世)を経た白髪交じりの老人である。

かつて遊んだことのある酒店はいまもこしてあるけれど、

衰えた顔は遙かな時を隔ててしまったものだ。

(1) 金明池きんめい池は都の一大景勝地で、試験委員長の大役から解放されてそこに遊べば、春の風光を大いに愛でる詩が生まれてよいはずなのだが、この詩はおさなりの感がある。ここまで蘇軾が都で詠んだ詩を見てきて、都の風光を喜ぶような詩は一つもなかった。蘇軾には、当時世界第一の大都会であった都開封かいほうに憧れるような気持ちがなかったことは、第1章7ページで見た詩から一貫しているように思える。(2) この詩は3月20日との日付があるが、翌日の21日こうぶんちゆうに孔文仲(本章125ページなど)が亡くなっている。孔文仲は蘇軾の招きに応じて科挙の採点委員を務め、その任を終えたばかりだった。蘇軾は孔文仲の棺を撫して、「このような勁直けいちよくの士はもういない」と嘆いたという)

■書艾宣画四首

蘇軾よりも少し前の時代に活躍した艾宣がいせんという画師がいた。その画を見て詠んだ詩。4首のうち1首を訳す。

杏花白鷗あんず やまぎ(杏の花と白い鷗)

天たふの工は、誰のために花あでやかの妍さを刻むのか、

蕊しべを抱えて群がる蜂たちのためなのか。

人が酒を手に把とって春を惜しんでもすべては夢……

この閑客かんきやく(画中の白い鷗のこと)が永遠に見続けているのには及ばない。

(最後は、画中の春は永遠に続くということを言っている)

(この詩を詠んだのと同じころ、4月4日に蘇軾が非常に感動したと伝えられる出来事があった。それはいろいろな書物に記されているが、ここでは『邵氏聞見後録』(邵しょう氏聞見後録ぶんけんこうろく)
しょう博著)の記事を見ておこう。

蘇軾が翰林院かんりんいんにいたときのこと、ある夕暮れ時ちゆうし、中使(皇帝の使いの宦官)が来て、お召しであると言った。すでに半分酔い心地であったが、急いで水を汲んで口を漱ぎ、少し意識をはっきりさせると、東門から入って小殿で皇帝のお出ましを待った。

御簾の内から声がし、呂公著りょこうちょ(宰相に加えて)司空平章軍国重事しこうへいしょうぐんこくじゅうじに、呂大防りょだいぼうと范純仁はんじゆんじんを左右僕射さゆうぼくしや(宰相)にするとの仰せがあった。三人が承ると、高太皇太后こうたいこうたいこうが言われた。

「学士殿(蘇軾)は前年は何の官にあったのか」

蘇軾は答えた。

「臣わたしは前年じょしゅうだんれんふくしは汝州団練副使でございました」

「いまは何の官にあるのか」

「忝かたじけなくも翰林学士を仰せつかっております」

「何をもってこれほど俄かに翰林学士になったのか知っておるか」

「太皇太后陛下おほめの思し召しにございましょうか」

「私は何も関わっておりません」

「では、皇帝陛下の思し召しにございましょうか」

「陛下も何も関わっておられません」

「よもや大臣の間からわたし臣を薦めてくださったのでありませんか」

「大臣も何も関わっていません」

蘇軾は驚き、

「臣は無遠慮でありますけれど、自分から取って望むようなことはしておりません」

高太皇太后は言われた。

「学士殿にこのことをずっとお伝えしたく思っておりました。これは先の皇帝陛下の御心によるものです。先帝はお食事の間も箸を止めて文章を御覧になり、いま読んでいたものについてそっと私に向かってお語りになることがありました。そのようなときは、必ず学士殿の作でありました。先帝はそのたびに毎回『奇才である、奇才である』とおっしゃられました。しかし、学士殿を十分にお用いになられずに亡くなられてしまったのです」

蘇軾は思わず泣き声を挙げ、何も言えなくなった。高太皇太后も皇帝も泣かれ、他の者も皆泣いた。

すでに任命が終わると、皆は茶を賜わった。

高太皇太后は蘇軾に言われた。

「学士殿はどうかお上のためにも心を尽くし、先帝の御恩に報われるように」

蘇軾は座を下って拝した。

高太皇太后の御指示で、御前の金の燭台が取られ、それによって蘇軾は翰林院に送られた。

以上のことを蘇軾は王おうきやう鞏に語った。

このとき宰相は文彦博、呂公著、呂大防、范純仁の4人になった。いずれも保守派であ

る)

■慶源宣義王丈以累得官為洪雅主簿雅州戸掾遇吏民如家人安樂之既謝事居眉之青神瑞草橋放懷自得有書來求紅帶既以遺之且作詩為戲請黃魯直學士秦少遊賢良各為賦一首為老人光華

長い詩題は次の通り。「王慶源（字は宣義）という老人は、しばしば科挙に
 応じた末にようやく官職を獲得し、洪雅の主簿、雅州の戸掾となった。

民衆や下役人に対して家族のように接したので人々は喜んだ。すでに職を辞め、眉州青神県の瑞草橋に住み、悠々自適の暮らしを送っている。

老人から手紙がきて紅い帯を求めたので、それを贈り、戯れの詩を作った。

黄庭堅と秦觀にも一首ずつ作ってもらい、老人に華を添えることにした」

（眉州青神県といえは妻の王氏がその地の出身である。王慶源は妻の一族で、その縁から蘇軾に「紅い帯」を求めたのだろう。「紅い帯」の意味するところはよくわからないが、職を退いた老人が華やかに身を飾るためのもので、それを都にいる蘇軾から贈られたならこの上ない名誉であるということなのだろう。王慶源は科挙に何度か挑んだものの合格はしなかったようで、地方の小官に甘んじなければならなかったのだろう。郷里の人々を大切に思う蘇軾は紅い帯を贈っただけでなく、詩を添え、さらに黄庭堅と秦觀（第7章66ページなど）にも作らせた。そのことから秦觀が都にきていたことがわかる。なお秦觀は依然として科挙には合格していなかった）

貴君は書生のまま、霜に遭った葉のように枯れるところであった。

かろ^うじて官職を得ると、

子のように民を遇し、我が家の使用人のように下役人に接したので、

人々は貴君のことをお役人様として見上げるようなことはなかった。

貴君は「自分たまたま字が読める農夫であるだけなのだ」と言っていた。

いつまでも貧乏であったので妻は泣くし、子供は飢えて叫ぶし、

時に野人^{やじん}が来て馴れ馴れしく貴君の髭をひっぱったりもした。

貴君は、役人としての成績は下の下であると自ら採点して職を辞し、

芋と豆くらいならどこへ行ってもついてまわるはずだと、

郷里に帰ったのだった。

いま貴君は瑞草橋^{ずいそうきょう}あたりの路を独り歩き、

携えるのは酒の入った壺が一つ、

慈姥巖^{じぼがん}の前で自ら渡し舟を呼び寄せ、

青衣江^{せいゐこう}のほりをぶらぶらすると、人々が争って貴君の手を取ろうとする。

春の蚕^{いと}の市に行くと、数州から集まってきた人の中に、

貴君が務めた土地の者がいて貴君を取り囲むので、

市の人々は貴君を指さして一体誰なのだろうか怪しむ。

そのとき貴君は、紅い帯に白い髯が映え、老いてなお堂々の姿である。

私は西に帰って貴君の隣に住もうと思う、

垣根を隔て、貴君の歌声に合わせて手を打つのだ、

懐旧の情に空しくふけるようなことはしないつもりだ。

(1) 「野人」には、田舎者、庶民、礼儀を知らぬ者、飾らぬ真心のある人などの広い意味がある。都で高い位にあって上辺ばかりを飾る偽善者の真逆の人間である。(2) 詩の中ほどにある慈姥巖じぼがんと青衣江せいこうは青神県せいしんの地名。蘇軾の郷里では春に賑やかに蚕の市が開かれることは第2章66ページで見ている)

■次許沖元韻送成都高士敦鈴轄

4月2日、高士敦こうしとんが国境地帯の治安確保の任務を帯びて成都せいとに行くのを許将きょしょう（字は沖元）あざなが見送った詩に次韻した。高士敦は高太皇太后こうたいこうたいごうの従弟であることから官職を授かった人物。蘇軾は2年前の元祐元年8月、遼国皇帝の誕生日を祝賀する使者に選ばれ、高士敦が副使とされた。しかし、何らかの理由で蘇軾は辞退し、代わって林旦りんたんが正使、高士敦が副使となって遼国に派遣された。そのことがこの詩の中に詠み込まれている。宋と遼は、正月とそれぞれの皇帝の誕生日に祝賀の使者を交換し合い、友好関係を維持する上で大切な年中行事となっていた。

高君は皇族との縁によって官職に就いた、

地位の高下などはもとより虚名、

高君は真に優れた人物である。

私はものぐさのために高君とともに遼国りょうに行くのを辞退し、

北へと飛び行く鴻おとどりを眺めつつ、

高君が堂々の使節として遼国に迎えられるのを想見したのだった。

高君は、高い才能は勳閥くんぼつとは無関係であることを証明し、

帰り来ると、あり余る力ちからで蜀の治安を担当することとなった。

高君が成都せいとに行くなら、

西に遠く雪に覆われた山を臨み見ても、

もはやそこに変事を知らせる烽のろしが上がることはない。

だから、高君は日々酒樽の横で過ごしていればよいのである。

■次韻子由五月一日同転対

このころ蘇軾は、科擧を巡って不届きなことがあったとして趙挺之ちやうていしらの批判にさらされていた。蘇軾は弟とともに反論を記して5月1日に朝廷に提出した。そのことを弟が詩に詠んだので次韻した。

漢かんの時代に、賈宜かぎは意を決して思うところを記して皇帝に差し出した——

僕らもまた同じこと、堂々と正しいことを論じるだけであって、

そうするのは、農夫や樵きこりに笑われないためである。

唐とうの高祖皇帝は、晋陽しんやうで隋を討つための旗揚げをした——

そのとき、高祖皇帝は「これは我らのためにだけにするのではない」と言った、

天下のことを思う天子のお言葉を僕らも聞けるに違いない。

とうちやう

唐朝は五月一日を皇帝が文武百官と顔を合わせる日と定めた、

まさに今日は五月一日である。

僕らの半生の出处進退は常に憂患とともにあり、

郷里に帰るのが上策であることは早くからわかっていた。

それでも、「後生こうせいおそ畏るべし」、後に続く者たちの評価を思わずにはいられない。

ああ、それにしても僕は衰えてしまった。

僕は見くびられたのか、それとも見かけ倒しだったのか。

(蘇轍が制科の試験に合格した後で批判を受けてから(第2章19ページ)、2人は都いけるととかく難癖を付けられた。同じ時代を生きる人々の蘇軾に対する好悪はみごとに二分されるものであったようだ)

■次前韻送程六表弟

てい し げん

程之元そが楚州知事として赴任するときに贈った詩を本章 37 ページで見

ているが、程之元こうなんせい ろ てんうんはんがんは江南西路転運判官に転任することとなり、蘇軾は先の詩に次韻して贈った。

貴君の家の兄弟はいずれ劣らぬ宝玉揃い、

門には赤い車輪の車が十台も並び、一万石もの貯えがある。

知事しるしの印ふの竹の符を授かっただけでなく、

いずれは尚書しょうしょの位くつの者が履く舄も頂戴することになるだろう。

先の年の災害時に、貴君は官の倉庫を開いて窮民を救い、

行く先々で武器を売って農産を増やす策を実施した。

都に帰ってくると、己の功績については口を閉ざしたまま何も言わず、

すくにまた長江を渡って別の任地ちようこうに向かうことになった。

私は残念に思う——

貴君は才能がありながら十分に用いられていない、

あたかも谷間に聳え立つ松のようだ。

私は全く違う——

役に立つところがないので、いたずらに大きくなれただけの木なのだ。

貴君は頭が白くなっても青い衫うわぎを着て百官の底あたりに置かれている、

それでもどうか腐らずにいてほしい、

古い薪の上に新しい薪が積まれてゆく例は世間に多い。

思うに、私はかつて江南こうなんの江湖こうこに釣り舟を浮かべ、

無数の山を我が筆の内に収める経験をした。

いまのところは、

降りかかる火の粉を扇で払わなければならないほどの状況にはないけれど、

恐れなければならないのは、

俗世に染まり切って、山の方から出入りを止められてしまうこと。

貴君に頼みたいのは、

江南の老人たちにどうか謝ってほしい、

私が再び会おうと言った約束を果たさずに、

空しく都で太陽を仰ぎ見ていることを。

いつか長江に浮かんで蜀へしよくと遡るのだ、

その志はしかとここにある、

長江の水にかけて嘘は言わない。

(前の詩、この詩、そして次の詩を合わせ見るなら、このころの蘇軾の心境を推し量ることができるであろう)

■送周正孺知東川

7月、周尹しゅういん（字は正孺あざな せいじゆ）が梓州し（東川とうせん）の知事に任命され、その送別の詩。周尹は本章99ページで登場している。梓州は蜀しよくに属する地である。

学問を実践する者は、

昔は一郡の知事にでもなればもう十分な荣誉だとしたもので、

帰郷すれば人々から大いに敬われた。

まして梓州は堂々の土地柄、

千人を引き連れて墓参りに行くほどたくさんの人がいる。

門から村に入るときには、

知事もきちんと車から降り、村の老人たちが迎えに出るくらいに、

礼儀を重んじるところ。

貴君の端正な姿は賢人とされた漢の何武かん かぶのようで、
しば そうじょ
 司馬相如しば そうじょを知事として迎えるのを人々が誇りとしたことなど物の数ではない。
 明らかに世の中が治まっているときには、
 人を養うことが大切で、
 木も育て方によってどれもが有用なものになる。
 貴君に一郡を指揮する力量があるのに比べ、
 私自身を顧みると、丘に帰って耕すのがよく、
 職を去って悔いないことこそが勇氣ある決断なのだ。
 貴君に先立って帰るべきで、
 廉潔を慕って退くといえば聞こえがよいけれど、
 実のところは、自分が衰えて役立たずだとわかっているのだ。
しよく
 蜀の地では知事になった人物の画を描く習慣があるから、
 貴君の画の隣に並べてもらえるよう、
 先に我が画を用意して待つつもりである。

(蘇轍しよくいんはこの詩と同じ韻を用いてもう1首、送別の詩を周尹しよくいんに贈っている。それには「韻の踏み方が自然ではないものが多い」との評がある)

■楽苦説

楽と苦について考察。

楽な事を慕い、苦しい事を畏れる。これは己の身にまだ苦や楽が至っていないときの心持ちである。すでに苦や楽が至り、身をもってその中にあるときには、慕うとか畏れるとかの心持ちなどあるはずもない。まして、苦や楽が過ぎ去った後には、慕うとか畏れるとかそのようなものはどこにもない。

声を尋ねる、影を捕らえる、風に繋ぐ、夢を追う——この四者は上に記したことと似ているけれど、声、影、風、夢はほうふつまだしも彷彿としてそこに存在している。

楽な事を慕い、苦しい事を畏れる——このことばかりを考え過ぎるのは病のもとである。そのような病をどのように治せばよいのかと思案を重ねるのなら、その先に楽な事が得られるであろう。

いま理屈でもって諸君等に語ろうとしてもそれは難しい。

元祐三年八月五日、書く。

(理屈では語りにくいことを書いている文章であるから、訳文にははなはだ自信がない。問題は どうしてこの時期にこのようなことを書いたのかということだ。黄州こうに流され、いま朝廷の高官となっているのは、普通にいえば苦から楽への大転換を経て、得意の最中であってよいはずなのだが、前の幾つかの詩でも見たように、蘇軾は次の苦がすぐそこに、もしくはすでにそこにあると感じていたのだろう)

■虚飄飄

虚しく飄飄ひょうひょうとするもの(実態なくゆらゆらするもの)を詠んだ詩。これだけを見ると、一種の物尽くしの戯れ歌、あるいは俗な教訓詩のようだが、こ

この一連の詩文と合わせるといささか味わいが違ってくるであろう。

虚飄飄、(虚しく飄飄とするもの)

画檐蛛結網、(軒端に結ばれた蜘蛛の網)

銀漢鵲成橋。(天の川を渡るという鵲の橋)

塵漬雨桐葉、(塵を漬すようにして降る雨に落ちる桐の葉)

霜飛風柳條。(霜を飛ばす風に揺れる柳の枝)

露凝残点見紅日、(ぼつんと残った露が紅い日を見るとき)

星曳余光横碧霄。(星がわずかな光を曳いて青空に横たわるとき)

虚飄飄、(虚しく飄飄とするものだって)

比浮名利猶堅牢。(浮ついた名利に比べたらどれも実に堅牢なものだ)

(この詩に黄庭堅と秦觀が和し、海原に浮かぶ蜃気楼とか、春の水に解ける氷の橋とか、

虚しく飄飄とするものをさらに列挙している)

■跋送石昌言引

父蘇洵そ じゆんの同郷の先輩に石揚休せきやうきゆう あざな しょうげん(字は昌言)がいた。石揚休は朝廷の高い位に昇り、皇帝の使者として遼国に派遣されたことがあり、蘇洵はそのときに送別の文章を作った。それを石揚休に渡すために筆を執って紙に記したのは蘇軾か けうで、嘉祐元(1056)年9月19日のこと、蘇軾は21歳で科挙の受験のために都に滞在中であった。それから32年を経て、蘇軾は再

び自分が記した父の文章を見て、この跋文を書き添えた。跋文を読む前に、もとの蘇洵の文章を見ておこう。これは蘇洵の代表作としてよく知られている。

そじゆん せきしやうげん しほくいん
蘇洵：「石昌言使北引」

せきやうきゆう

石揚休が科挙の一次試験に初めて合格したのは、私がほんの五、六歳のころで、私はまだ学問を習っていないかった。思い出せるのは、そこらの子供たちと父のもとで遊んでいたときに、石揚休が傍らから棗なつめや栗の実を手にとって私に食べさせてくれたことだ。家が近く、また親戚でもあることから、非常に親しくしていたのである。

石揚休は一次試験に合格して以来、日に日に有名になっていった。私は次第に成長し、少しばかり書物を読むことを知るようになり、句を区切って読むことや、音律の規則に敵うように字を並べることを学んだのだが、まだ習熟する前にやめてしまった。石揚休は私が学問をやめたと聞いて、私には何も言わなかったのだが、その心の内を察するに、きっとひどく残念に思っていたのだろう。

十余年後に石揚休は第四番目の成績で科挙の最終試験に合格し、地方官として各地を巡り、郷里に帰ってくることはなかった。私は大人になり、あるとき感じることがあって、それまでの己を折って、再び学び始めた。

それから数年して都に行き、石揚休と長安ちやうあんで会い、長年の苦労を互いに慰め、かつての通りに楽しく語り合った。私が十数篇の文章を出して見せると、石揚休ははなはだ喜んで、「善し」と言ってくれた。私は晩学で師匠もなく、毎日文章をひとりて書いてきたのだが、心の

内では己の未熟さを取じていた。石揚休がそのように言ってくれて非常に嬉しく思った。

さらに十余年していままた都にくると、石揚休は翰林学士ならびに中書舎人かんりんかくしとなっていて、天子の使者として万里の外に出ることとなった。強く悍あやうしくて我が朝に屈しない姿勢を示す遼国りょうに向かって、大きな旆はたを立て、数百騎を従え、車千乗を連ねて都の門を出て行くのである。その意気はまことに盛んである。

私は思うに、子供であったときに父の傍らで石揚休を見て、将来このようなことになるとは想像すらできなかった。富貴になるかならないかなどは気に掛けるまでもない。私はいまの石揚休を見て独り感じることもある——男児として生まれたからには、将軍にはならなくとも、使者となって言論をもって交渉に勝つならもう言うことはないのだと。

かつて彭任ほうにんは富弼ふひつに従って遼国に使者として行き、帰ってから後で私にこのようなことを言った。

「国境を出て駅亭に宿を取ると、鎧よろいを身に付けた騎兵が数万騎ばかりも馳せて通過して行った。剣ほこと槊がぶつかり合う音が一晚中続いた。それを聞いて従者は恐れて真っ青になった。明け方になって道に出て無数の馬の跡を見て、心臓がばくばくするのを自分ではどうすることもできなかった」

遼国が中国に対して威を輝かせて惑わすやり方は多くはこの類で、中国の人は事情がよくわからずに、ある者は恐れて震え上がり、ある者は言葉を失い、向こうの笑いものとなってしまうのである。ああ、何と考への浅いことではないか。

漢の時代に劉敬かんは匈奴りゅうけいの冒頓きょうとのもとに使者として行ったときに、兵士も馬も隠れて一切見ることがなかった。そのために皇帝は油断し、平城で匈奴の軍勢に囲まれてしまった。

いま遼国のやり方はその逆であるから、中国に対して何かしかけてくる力など実はないとわかる。

もうし
孟子はこう言った。

「大きな相手を説き伏せるときには、呑んでかかるのがよい」

まして相手は夷狄であるのだから、軽くみがかかればよいのだ。

以上のことを石揚休に贈る。

(1) 宋は文官優位で、名のある将軍がほとんど現れず、外国に対して軍事的に常に劣位に立っていた。だから、平和を維持するための外交交渉が重要であった。この文章で蘇洵は、外交交渉を有利に進めるのは戦場での将軍の活躍に勝るとも劣らない重要なことであると、石揚休に説いたのである。(2) 途中に彭任が富弼に従って遼国に行ったときのエピソードが記されているが、これは先に富弼の神道碑(本章109ページ)で見た、遼国との非常に難しい交渉のときのことである。遼国は宋の使者を驚かすために、わざと大げさなデモンストレーションをしたのである。(3) 最後の孟子の言葉は、各国を遊説して苦勞を重ねた孟子ならではのもので、この言葉を選んだのは、独立不羈の精神で己の道を拓いてきた蘇洵にいかにもふさわしい)

右は嘉祐元年九月十九日に我が父が書いた『石揚休が使者として北に行くのを送る』という一文である。この文字は私が二十一歳のときに記し、これは石揚休に贈った原本である。いまは陳履常が所蔵している。

石揚休は詩が上手で、当時そのことで名が知られ、官員としては知制誥にまでな

った。

ほうにん しよく ふ ひつ りよう れい が
 彭任はやはり蜀人で、富弼に従って遼国に派遣され、靈河県の主簿であったとき
 に亡くなった。せきかい
 石介はかつて彭任についてこのように記した。

「彭任は道をわきまえた人で、背の高さは七尺あり、その膽はその身体以上に大きい。いつも酒店に居て、仲間とともに一日中飲み続ける。聞けば、彭任が遼国に行く使者となったのは、遼国の出方が予測できなかったときのことで、彭任はくさくさとして酒をあおって店の床を拳で叩き、皮膚が裂けて血がほとばしった。かくして自ら志願したのだった。死ぬ気で遼国に向かったのである」

彭任のひととなりはおよそこのようで、人を殺めるばかりの任侠を好んだのだった。

げんゆう
 元祐三年九月一日題す。

(1) 蘇軾は自分の筆で記した父の文章を32年後に再び見て、いろいろなことを思ったに違いない。蘇軾が筆を執ったのはまだ科挙に合格する前で、自分の将来は全く予想がつかなかった。いまや蘇軾は石揚休が使者として派遣されたときと同じく翰林学士ならびに中書舎人となっていて、まさしく遼国に行く可能性もあった(本章197ページ)。

(2) この跋文では蘇軾自身の感慨を記すことはなく、彭任について記している。蘇洵の文章をだけを見ると、彭任は臆病者だったかのように思えてしまうので、そうではないことを明らかにしたのである)

■送錢穆父出守越州絕句二首

せんきやう あざな ぼく ふ えつ
 9月、錢勰(字の穆父)(本章17ページなど)が越州知事として都を出て行

くことになり、その送別の詩。錢勰は、朝廷への報告に偽りがあると告発したことが問題視されて地方に出されたのだった。

其の一

公文書に埋もれていると百の憂いが集まってくる。

いまは酒を手にしてひとつ笑おうではないか。

都の人々は硬骨漢を失うことを残念がっているのだが、

会稽かいけい（越州えつ）の人々は古の仙人いんしよのような人が来てくれるのを喜んでいる。

其の一

会稽かいけいといえば若耶溪じゃくやけいの雲門寺うんもんじ、

唐とうの賀知章がちしやうが亡くなって以来、

見る者もなく蓮の花は空しく開き続けてきた。

私は残念ながらお泥の中になければならないが、

貴君に勧めるのは、

若耶溪に浮かべる船の棹を返して都に戻ってきたりしないように……

（賀知章がちしやうは李白りはくや杜甫とほの先輩で、風雅を愛する脱俗的な人物で、高い地位かいを棄てて会稽けいに隠棲した潔さは、心ある士大夫したいふの慕うところであった）

■西江月

同じ時期に同じくせんきやう 錢勰 (あざな 字の穆父) に贈った詞。

莫歎平齊落落、(大業を成した人は零落の中にあっても志を失いませんでした)

且応去魯遲遲。こうし(かの孔子にしても故郷を出て行かなければならないときがありました)

与君各記少年時、(あなたもわたしも少年の日々からのことを思うなら)

須信人生如寄。(まことに人の生は寄せるがごときものなのです)

白髮千莖相送、(送る者も送られる者も白髪が千本)

深杯百罰休辞。(よい詩ができなければ罰は酒が百杯)

拍浮何用酒為池。(酒の池に舟を浮かべて大いに酔おうと言った者がいましたが)

我已為君徳酔。(すでにわたしはあなたの徳によってすっかり酔わされてしまっています)

(蘇軾の人生哲学「人の生は寄せるが如し」がここで用いられている。それだけせんきやう 錢勰と心が深く通じ合うと感じていたのだろう。最後の句の「君の徳の為に酔う」は単なる美辞麗句ではない)

■送程七表弟知四州

題にある「程七」は「程六」の弟。つまり、蘇軾の姉の夫であった程之才の弟の程之元 (本章 37 ページ) のそのまた弟の程之邵 (字は懿叔) である。程之邵がし 四州知事として赴任することになったのでその送別の詩。

都にいたのでは、

大きな川も広い湖も見ることができない。

とにかく座っているだけでも顔は塵まみれになってしまう。

らくよう
洛陽からくる流れの末に舟を浮かべるなら、

たちまちわいが淮河の南の山々を見ることになる。

どの山も美しく、

ことに暁に鏡のような水面に現れ出る姿は格別である。

新任の知事殿も公文書に埋もれながらも、

山を見てふっと笑みをもらすであろう。

知事殿は天の馬のような人、

朝には北方の地にいたのに、暮れにはもう南方の地にいる。

いまは名馬を見分ける眼力の持ち主がないので、

馬小屋で虚しく老いてしまうところであったのだが、

ささやかながらも外を駆ける機会を得たのであるから、

盗賊でも不逞の民でも徳をもつて化服かふくさせるのがよいであろう。

人に知られないと嘆くことはない、

水辺しに臨む泗州の古い仏像はきっと見ている。

知事殿は泗州の全てに赤ん坊に対するように愛情を注ぎ、

人の世の細々としたことは浮草のように見て、

万事は川辺の茅ちがやや管すげのようにさりと受け流す——

とかくこの人に任せておけばよいという人物なのである。

(1) 詩の始まりの部分は、蘇轍がもともと都の風光をあまり好んでいないことを反映しているのだろう。(2) 詩の終わりの部分はよくわからないので、いつもの「ずっぽ訳」である。(3) 蘇轍はかつて泗州しを訪れていて(第7章109ページなど)、その経験を踏まえてこの詩を詠んでいる)

■送曹輔赴閩漕

曹そう輔ほ (字は子方) が閩あざな州しほう (福建) に赴任するのを見送った詩。曹輔とはこのころから交流が始まった。

曹そう先生は儒者でありつつ、

弱きを助け強きを挫く好男兒、

筆の勢いは波を翻すかのようだ。

これまでは、西方の馬が往来する国境近くの町にいて、

砂漠からの強風に儒冠は裂かれるばかり、

槩ほこが横たわる間で詩を詠み、

盾たての上で公文書を次々に書き上げていたのだった。

もっばら遠く行くことを我が事とし、

いま都の紅い塵を浴びたかと思うと、

たちまち巖の潜む急流を越えて南に行くのである。

これまで炙った羊の肉を嚙んでいた口で、

これからは大海原の塩を舐めるのである。

向こうで^{れいし}荔枝の実をひとたび食べるなら、

もはや^{うまごやし}苜蓿を盛った皿のことなどは忘れてしまう。

私もまた^{こうかい}江海の人(辺鄙なところに生きる者)、

都会は安心して住めるところではない。

常に恐れるのは、青雲の志は遂げられないまま、

虚しく坐して白髪ばかりが増えること。

^{とうえんめい ききょらい}陶淵明は帰去来の辞を賦して、談笑のうちに官職を棄てた。

私はいま何をする者なのか、

自ら^{つな}身を索いで自ら独り苦しんでいるのである。

^{そう}旅行く曹先生に問おう——

「清き^{わいが}淮河の秋の水の深さはいまどれほどでしょうか、

私の舟はいつ出発すべきでしょうか」

季節はもう露から霜へと移り、日々に寒くなっている……。

(「今我何為者、索身良独難(今我は何為る者ぞ、索身良に独り難し)の句はこのころの

蘇軾の真情をよく表したものと見てよいであろう」

■次韻王郎子立風雨有感

蘇轍の娘の婿である王適（字は子立）の名はこれまでもしばしば見ている（第6章171ページなど）が、このころは蘇轍とともに都いたようだ。その王適が「風雨に感じる」という詩を詠んだので次韻した。

人の一生とされる百年も、
 一度俯き一度仰向くうちに過ぎ去る。
 その間に、寒さと暑さが交互あるじに主となり、
 毛皮が重苦しく感じられるようになったかと思うと、
 すくにまた団扇が邪魔あまくさくなる。
 榮辱にしてもどちらがよいかいちいち思う間もなく、
 これを喪えばそれを獲るといふ具合に入れ替わるのである。
 やたらと音を出そうとしなければ、琴は永久に壊れることがない。
 若者はとかく己を成長させようともせず、
 自分は才能を抱いたまま空しく置かれていると呻き声を上げる。
 苗を無理に伸ばそうと引っ張るようなことをするよりは、
 菜が大きくなるのをゆっくり待つ方がずっと益が得られる。
 ここに一人の男が世間から離れて静かに暮らしている、
 門の外には訪ね来る人の跡もなく、
 陶淵明とうえんめいのように、

衣の穴を結んでも冷たい風が入り込み、
門を塞^{むしろ}いだ席から雪が吹き込み、
いつも飢えに迫られてしまうのを恐れている。
そんなことは笑い飛ばすがよい、
要するに造物者が君に戯れているだけなのだ。
君のためにこの詩を賦して筆を置くと、
風雨が強くなってきたような気がする。
よそう、君のためには春の上着を作るべきだ、
科挙に合格した祝いの宴に着ることができるように。

(蘇軾のこの詩から察するに、王適^{おうてき}のもとの詩は恐らくかなり感傷的なものであったのだろう。王適はこの年の科挙に合格できず、苦しい心理状態にあったようだ。後に見るように、王適はこのほぼ1年後の10月25日に35歳の若さで他界する)

■書黄庭内景経尾

『黄庭内景経^{こうていないけいきょう}』という道教の経典がある。「黄庭」とは脾臓^{ひぞう}のことで、そこに宿る神の働きによって不老長生が得られるというようなことがこの経典には書いてあるらしい。蘇軾は筆を執って『黄庭内景経』を記し、葆^{ほう}光道師^{こう} (蹇拱辰^{けんきょうしん}) に贈った。それに添えた詩。序文がある。

私は『黄庭内景経^{こうていないけいきょう}』を書いて葆光道師^{ほうこう}に贈った。竜眠居士^{りゅうみん}はその経を画に描き、

その隅に私と葆光道師を描いた。竜民居士の筆勢は絶妙で世に稀な宝となるもので、感嘆するだけでは足るまいと、これを賛する詩を作った。

りゅうみん こじ りこうりん
 (竜民居士とは画師の李公麟 (本章103ページなど) の号である)

たいじょう きょう
 太上(最も尊い)なる虚皇(虚の道を説く教祖)がこの霊妙な經典を出されると、

こうてい ひぞう しんじん
 黄庭(脾臓)に宿る真人は嬉しさの余り舞い踊った。

ひげ ほうこう
 髯の道人(葆光道師)と老いた儒者(蘇軾)がそこに居合わせた。

太上虚皇には髪を束ねた子供がこやかに仕え、

十三人の神がしっかりと警護している。

太上虚皇は堂々のお姿で私に尋ねた。

「そなたは何の縁があってここにおるのか。

朝には心が空で、夕べには悟る、

そのような者でなければこの經典を伝えることはできない」

太上虚皇はお立ちになり、

私はその最後に付いて、葆光道師に従って山や谷を越えて行く。

山の隠者たちは私が帰ってきたのを笑って迎える。

人間界に残ってしまった竜民居士は、さてどうするのだろうか。

■送蹇道士帰廬山

上の詩に見た葆光道師 (ほうこう 蹇拱辰) が廬山 (けんきょうしん 廬山) に帰るのを送った詩。

物を知覚するのはたぶん息によるのだろう、

息はどのようにして出たり入ったりするのか。

心が天に遊ぶのなら、何も無い部屋にいても空しいものではない、

心が天に遊ぶのでないときは、目耳鼻の六つの穴がかたがた騒ぎを起こす。

葆光道師ほうこうは人から逃れて廬山ろざんに入る、

山の中には人はおらず、葆光道師が一人行き来する。

行く者は空くう、還る者は失しつ、

葆光道師の身は行くも還るもないところにある。

綿綿めんめんと永遠に微風の絶えることのない山中で、

葆光道師は内丹ないたん(内なる完全性)と外丹がいたん(外からの働きによる完全性)を一瞬のうちに同時に成し遂げる。

人間世界で三千年を経たころに、

葆光道師は鶴にまたがってまた帰ってくるのだろうか。

(この訳詩は大意させせていない。岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳解『蘇東坡詩集』

(1927年)は、この詩を注して、「空くうを掴むが如く、雲を捕うるが如きもの、一貫せる意味は無きものの如くである」と記している。訳者がさっぱりわからないのも仕方ないとあきらめよう)

■興国寺浴室院六祖画賛

中国の禅宗を発展させた達磨^{だるま}、慧可^{えいか}、僧璨^{そうさん}、道信^{どうしん}、弘忍^{こうにん}、慧能^{えのう}の6人の僧を六祖^{ろくそ}という。その六祖を描いた画が都の興国寺^{こうこくじ}にあり、蘇軾^{そしつ}がその賛を作った。ここでは賛に添えられた序文だけを訳す。

私は嘉祐^{かゆう}年間に初めて科挙^{かきやう}の進士科^{しんしこ}の試験^{しけん}を受けることになり、興国寺^{こうこくじ}の浴室院^{よくしつ}の老僧^{らうそう}徳香^{とくかう}のもとに下宿^{げしゆく}した。浴室院^{よくしつ}の南^{なん}に古い建物^{たてもの}があり、東西^{とうせい}の壁^{かべ}に六祖^{ろくそ}像^{ざう}が画^えかれていた。東^{とう}の壁^{かべ}の前^{まえ}には木^きを組^{くみ}んで楼閣^{ろうかく}堂宇^{どうう}が作^{つく}られ、それにさえぎられて全体^{ぜんたい}を見ること^{みること}ができなかつた。西^{せい}の壁^{かべ}の三師^{さんし}は、いずれも神宇^{しんう}靖深^{せいしん}（深い精神性^{しんせいせい}を湛^{たん}える）、中空^{ちゆうくう}外夷^{がいい}（外見^{がいけん}は魁夷^{くわい}で内^{うち}は空^{くう}である）であつて、道^{みち}を知る者^{もの}でなければこのように画^えくことはできまいと感^{かん}じた。画^えの上^{うへ}に「蜀僧^{しやくそう}の令宗^{れいそう}の筆^{ふで}」とあつた。

私はそのとき令宗^{れいそう}の名^なを知らなかつた。我が家^かに偽蜀^{ぎしやく}（五代十国^{ごだいじゅうこく}時代の蜀^{しやく}国^{こく}）の丘文播^{きゆうぶんぱ}の筆^{ふで}になる画^えがあり、それと似^にていてほとんど区別^{くわくべつ}がつかないくらいであつた。それで、私は、「令宗^{れいそう}は丘文播^{きゆうぶんぱ}を師^しとした人^{ひと}だらうか」と考^{かんが}え、蜀^{しやく}の老人^{らうじん}たち^{たち}に尋^{たず}ねたところ、「丘文播^{きゆうぶんぱ}は漢州^{かんしゅう}の人^{ひと}で、弟^{あに}を丘文暁^{きゆうぶんぎやう}といひ、令宗^{れいそう}はその異父弟^{いふあに}あるいは従弟^{じゆうあに}である」とのことだつた。いずれも山水^{さんすい}、人物^{にんぶつ}、竹石^{ちくせき}を画^えくことを得意^{とくぎ}とし、その出来栄^{うらひ}は黄筌^{かうせん}と句竜^{くりゆう}爽^{そう}の間^まにあつた。丘文播^{きゆうぶんぱ}の子^この丘仁慶^{きゆうにんけい}は花実^{はなみ}や羽毛^{うよく}の画^えき方に優^{すぐ}れ、蜀^{しやく}人の趙昌^{ちやうしやう}が師^しと仰^{おほ}いだ人^{ひと}である。

それから三十一年^{さんじゅういちねん}を経て、中書舍人^{ちゆうしよしゃじん}の彭礪^{ほうれい}君^{きみ}が浴室院^{よくしつ}に宿泊^{しゆくぱく}し、私はそこで彭

君に会った。寺にはもはや私を知る人は誰もいなかった。ただ寺の主である恵汝あまじが当時は堂上の侍者としてこの寺にいたようで、いまはもう年老いているのだった。恵汝は私を案内して令宗の画を見せてくれた。しかし、東の壁の三祖はやはり蔭になって隠されたままだった。私と彭君は顔を見合わせて嘆息し、
「ああ、これを取り去ったら、何があるだろうか」

と言った。

そこで、置いてある樓閣堂宇を北側から運び出したところ、六師が互いに向かい合って話をし、笑い合い、仏法を授け合うようなありさまとなった。

都の人はこれを聞いて見に行く者が日々に増えた。恵汝は柵を作ってこれを保護するようにし、彭君はこれに賛を添えるよう私に言った。

((1) 蘇軾が科挙の受験のために上京したのは、本章 204 ページでも見たように、嘉祐元ゆう年(1056)年で、翌年の4月まで興国寺こうこくじに滞在し、それから31年後に再び興国寺を訪れたのである。(2) 蜀しよくの画の伝統について蘇軾が記した文章を第6章128ページで見ている、そこでは黄筌こうせんの名が挙げられている。(3) 彭囑ほうれいはかつて首席で科挙に合格した人で、王安石に用いられたものの新法を批判して左遷され、このころにまた都に戻った)

■書魯直浴室題名後並魯直題

上に見た興国寺浴室院の「六祖の画」について、黄庭堅こうていけん（字は魯直あざな）が後に文章を記し、さらにそれに蘇軾が短文を加えた。少し時間の順序が入

れ替わるが先に見ておこう。

浴室院よくしついんに蜀僧しよくの令宗れいそうが描いた達磨だるま以来の六祖師ろくそしの画があり、人物が皆絶妙である。山、川、花、木、動物、鳥、衣、器物などのもろもろの物について画師はよく知っていて、俗人が目に見えていても万物が従うところの道みちが何であるのかを言い得ないものを描いている。この画を描いた壁は人々の行き来する場にありながら画は隠れ、数十年の間、人に知られていなかった。長い年月を経て、蜀人の蘇軾そしがこれを発見した。物は世の変遷とは関わらないようにいながら、このような興衰の定めがあるのだろう。

この寺の井戸の水は冷たくて甘い。恵汝師けいぶんが碾ひ建溪茶けんけいちやは天下第二に落ちることはない。古い友人ちんぞうの陳慥ちんぞうは林下の士で、たまたまここに簞むしろを敷いて寓居し、蘇軾そし、范百禄はんひやくろくがしばしば訪れている。それで私も興国寺の門を過るときにはここに立ち寄っている。

元祐三年げんゆう、黄庭堅こうていけんが題す。

これから五百年の後には、浴室院のあたりも廢墟となり、六祖の画は消え去り、蘇、范、黄、陳もことごとく鬼の名簿に入っている。それでもこの書だけが存在しているのなら、ここに来たものは私のこの心を知って、手を打って笑ってくれるだろう。

十二月十五日、蘇軾が書く。

(ここに注目すべきは陳慥ちんぞう (方山子ほうざんし) が都にきて浴室院に滞在していたことだ。蘇軾が陳造に上京を勧めていたのは本章 30 ページで見ているが、陳慥が実際にいつ都にきて何をしたのかなどの詳しいことは不明である。また、第 6 章 238 ページで見た「柏石はくせきの図」の詩はこのときに詠んだとする考証もある)

■乞郡劄子

蘇軾を批判する声は、元祐元（1086）年12月に館職かんしよくを授ける試験を担当したころに始まり、以来やむことがないままに間もなく2年になろうかという10月17日、この文章を皇帝に提出した。すでに何度も繰り返してきているのだが、地方官として外に出たいとの切実な願いを改めて強く訴えたのである。

元祐三年十月十七日、翰林学士朝奉郎知制誥兼侍読蘇軾、劄子にて申し上げます。

臣わたしは近ごろ左臂ひじが不調で、両目がよく見えず、そのために、礼儀を失い職を疎かにしかねない恐れがあり、一つの郡を担当する任に就けていただきたく堅く乞うものであります。……(中略)……臣下としての大義を申せば、たとえ病であっても死ぬまで仕事に努め、礼儀を失って職を疎かにしているとお咎めがありましても、それを避けずに受け止めるべきであります。臣わたしが敢えて職務に就かぬことを乞いますのは、実は理由のあることなのであります。これを申し上げるならば、枢要の方々の機嫌を損ね、軽くない罪を得てしまうであります。しかし、言わずにおりますのは、父とも申すべきお上を欺かみくことになり、それは誅罰に値する最も大きな罪であります。それについて申し上げますこといたしました。

……(中略、『易経』を引用して、己の身に不安があるときには十分に国に酬えききょういる仕事ができない

いことを言う)……陛下が御即位されました始めに、臣わたしは死の淵から救われたばかりか、半年の間の翰林学士にまで抜擢していただきました。その御命令に従い、敢えて辞するようなことなく、臣わたしの拙なる身をもって銳意国に報いようとしましたところ、台諫だいかん(官僚の違法行為を糾弾する部署)より仇敵であるかのように批判を受けることとなりました。臣わたしは先の宰相しほこうの司馬光と賢愚のほどは違いますが、厚い信頼を長く頂戴しておりましたことから、司馬光が大任に就きましたときにはすくにもそのもとに馳せ参じたのであります。これは人の情として当然のことで、どこからも異論の出るものではありません。しかしながら、司馬光さきまこうが差役法について建てた政策については、いまは不適當であるとして強く争わざるをえませんでした。しかし、台諫の人々は司馬光の意見に合わせることで昇進することを求めたのであります。そして、司馬光が亡くなると、司馬光の考えであるとして陛下の眼をごまかし、徒党を組んで異論を排除しようと、臣わたしの意見は不適當であるとして協同で攻撃したのでした。司馬光が民に対して至誠を尽くし、人に迎合することを求めることがなかったのを全く知らないのであります。陛下は虚心にして無我でありますことから、そのような徒党の上に立つ主あるじとなられるようなことはあるはずがないのです。

……(中略、范百禄はんひやくろくと韓維かんいが論争を起こしたとき、呂陶りよとうが范百禄側に立って韓維を批判したことを言う)……臣わたしはもともと蜀人で、范百禄と呂陶とは実は旧知の間柄で、そのことをもって、韓維の一派は臣わたしのことを憎んで、「川党」(蜀党の別称)を組織する者たとして指弾しました(党派を組んで政治運動をするのは臣下としてあるまじき行為とされていた)。…

…(中略、かつて黄庭堅が趙挺之の施策を批判し、また蘇轍が趙挺之の妻の父の罪を明らか

にしたことから、趙挺之は高官に用いられると、蘇軾を憎んで排斥することに全力を挙げたことを
 言い、また王^{おうてき}覲は蘇軾の一味である胡^{こ そう ゆ}宗愈が問題を起こしたとし、孫^{そん がく}覺は蘇軾の親類である丁^{てい}
 鶴^{ちやくうん}雲が問題を起こしたと関係づけて蘇軾を罪に陥れようとしたことを言う)……それらに対し
 て、陛下は不確かなことは言わないようにとのお言葉をもらされました。朝廷の内
 外の人々は、このことをもって陛下のお心を知ったのでありますが、臣^{わたし}は早くに朝廷
 を去らなければ必ず危いことになると思えしたのであります。臣^{わたし}は陛下は天より授
 かった御^{わたし}聡明さをもつて臣^{わたし}が無罪でありますことを御^{わたし}存知であると存じ上げておりま
 す。しかし、台諫の気炎は朝廷を震動させ、上は執政大臣から朝廷の百官、下は
 都の外の各地の知事に至るまで、皆がその鋒先を恐れて、その意向に添おうとし
 ています。臣^{わたし}は去らなければ勢いとしてこの身を全うできないのであります。天下は
 このようなことを知っておりましても、陛下は宮中の奥深くにおられて、ここまでは知る
 由もないのであります。

臣^{わたし}が考えますに、古の三代^{いりごしえ}以降で、明主と称えられて、漢^{かん}の宣帝^{せんてい}、唐^{とう}の太宗^{たいそう}
 上回る人はいません。しかし、宣帝^{がい かん じょう}は蓋寛饒を殺し、太宗^{りゅう き}は劉洎を殺しました。ど
 ちらも讒言を信用したもので、罪がないのに死んだことは今に至っても哀れまれて
 おります。……(中略、例示した二人について詳しく述べる)……宣帝と太宗の二人が明
 知を備えていなかったわけではないのです。蓋寛饒と劉洎の二人が皇帝に深く理
 解されていなかったわけではないのです。二人は皇帝に深く理解されていることを
 恃みとして、讒言が積み重ねられていくのを避けなかったために、ついには身体と
 首とが場所を違えて天下の笑いものとなってしまったのです。いま臣^{わたし}が陛下に理

解されておりますことは蓋寛饒や劉泊より優るといたしましても、臣わたしを悪く言う者は当時の十倍もいるような状況になっております。陛下の明哲、寛仁が先の二人の皇帝を超えるものでありましょわたしとも、臣がそれを恃みとして朝廷を去らずにいましては、先の二人と同じにならずにすむことはないのでありましょ。先の二人の死を見て、天下の人々、後世の人々は二人の皇帝は讒邪を信じて忠良を害そこなったと言いい、二人の皇帝の聖徳はひどく傷付いてしまいました。先の二人の者がもしも変化の兆しをあらかじめ知って、先わたしに去ることを求めていたならば、その身もその名も、また皇帝の名誉も保たれてははずなのであります。臣はたとえ自分のことなどは考えなくも、臣が罪を得た後わたしに、天下の人々、後世の人々が陛下をどのように言うようになるかを考えないわけにはいかないのであります。

昔、先帝は臣を上殿に召され、古今の成敗についてお尋ねになり、今後は事に即して物を申し上げるようにとのお言葉を頂戴いたしました。その後、臣はしばしば事を論じ、それは採用されたわけではありませんでしたが、さらに詩文を作って、物に寓し、諷に托して、できればお上のお耳に達して、聖意を感悟申し上げることがあればと務めました。しかし、李定、舒亶、何正臣の三人は、臣がそのようなことをするのは朝廷を誹謗するものであるとして、遂に臣は罪を得てしまいました。諷諫と誹謗とは似たところがありましても、違わたしうものであります。ところが、先ごろ、臣の書いたものにある語句をもって、趙挺之は先の皇帝を誹謗するものであるとしました。これは白を黒とし、西を東とするもので、まったく似たところさえもないのであります。臣は趙挺之が私を害おうとするものは李定、舒亶、何正臣を上回るものであり、臣の

讒言の受け方は蓋寛饒、劉泊也を上回るものがあると知ったのであります。

……(以下略、蘇軾の希望を叶えてくれるようお願い文章が続く)……

(1) 以上の文章で、^{しほこう}司馬光の死後激化する一方の讒言の嵐の中であって、それはかつて^{りてい}李定らが死罪を求めたときよりもひどいものであるのもはや都を去る以外にないと蘇軾は述べている。蘇軾もある程度は警戒していたにしても、都に来てわずかの中にこのような状況に追い込まれるとは考えもしなかったであろう。(2) 蘇軾に対する主な攻撃を挙げておく。①館職を受けるための試験の問題の中に先帝を誹謗する文言があったとして、^{しゆこうてい}朱光庭、^{ふぎようゆ}傅堯俞、^{しゆがんそう}主巖叟らが攻撃した。②^{りょうとう}呂陶が蘇軾兄弟と徒党を成し、その背後には^{ぶんげんはく}文彦博がいるとして、^{かえき}賈易が攻撃した。これはむしろオウングールとなって賈易は左遷され、^{てい}程頤も皇帝の教育係の任を解かれた。③蘇軾はそもそも国家の大役を担える器ではないとして、^{おうてき}王覲が攻撃した。④蘇軾はもっぱら軽薄な人士を己のまわりに集めているとして、^{ちやうていし}趙挺之が攻撃した。⑤もともと関係のない事件に蘇軾を巻き込もうとして、^{そんがく}王覲、孫覿が攻撃した。⑥科挙の二次試験を巡って蘇軾が不正を行おうとしたとの噂が流されるなど、種々の誹謗中傷が間断なく行われた。(3) 蘇軾を批判した人々の中に孫覿の名があるのは少々意外な気がする。孫覿といえ、第4章47ページでその名を見て以来、長く深い付き合いのあった人物である。かつての友情も、権力抗争の場にあっては顧みられないものになってしまうのだろうか。あるいは、孫覿からすると、蘇軾のことを他の人よりもなまじ深く知っているために、より強く油断のならない人物であるとしていたということであるのかも知れない。蘇軾を嫌う者はなぜか徹底的に嫌うようになるようで、蘇軾にはそのように仕向けてしまう何かがあっ

たのだろうか。(4) 蘇軾しよくが蜀党しん(あるいはこの文章にあるように「川党」とも呼ばれた)の領袖と目されて、激しく攻撃されるようになったのは、弟の蘇轍せんにもかなり大きな要因があったという説もある。蘇轍は一本気で、常に直線的な物の言い方をして、極めて剛直であったので、若いときから警戒の目で見られていた(第2章19ページ)。弟の直球を嫌うか、兄の変化球を嫌うかは人それぞれであろうけれど、兄弟を憎む心は、自ずとより目立つ兄の方に集中して向けられるということだったのだろう)

■書出局詩

上の文章を提出した後もまだ都での職務は続いた。これは翰林学士院かんりんがく しいんの官署から出た際にふと浮かんだ詩を記した文章。

急景帰来早、(日の傾くことが急で、早く帰り来たところ)

濃陰晩不開。(夜になっても濃く曇ったままだった)

傾杯不能飲、(杯を傾けても飲む気になれない)

待得卯君来。ぼうくん(卯君(弟)が帰るのを待ってからしよう)

今日は官署から早く出たところ、暗く曇って雪が降ってきたきそうだった。弟はもっと遅くなってから官署を出た。

この詩を作って、すぐに、十年前に徐州じょにいて、王鞏おうきやうが訪ねてきたときのことを思い出した。王鞏は徐州に十日余り留まってから南京応天府なんけいおうてん ふに帰った。ときに弟は南京応天府にいたので、王鞏は去り際に、弟への手紙を書くよう求めた。私は酔

い伏せしまっていて書くことができなかったので、一首の絶句を与えた。

王郎西去路漫漫、(王君が西に去って行く路は長い)

野店無人霜月寒。(野の店には人もなく、寒さのうちあるのは月だけ)

淚湿粉箋書不得。(涙が紙を濡らしてしまって書くことができない)

憑君送与卯君看。(王君に託して卯君に与えよと思う)

卯君とは弟の子供のときの名である。

弟との現在の情味は徐州にあったときよりも勝っているのだが、一緒に自然の中に

帰って、「夜雨対床」をともにする楽しみには及ばない。

元祐三年十月二十三日。

(蘇軾が徐州知事であったときに王鞏が訪ねてきたことは第5章298ページで見ている。誹謗の嵐の吹き荒れる都で、蘇軾が切に願ったのは弟との「夜雨対床」であった)

■臥病逾月請郡不許復直玉堂十一月一日鎖院是日苦寒詔賜官燭法酒書呈同院

詩題は「病で臥すこと一カ月を超え、郡の職に就くことを願ったもののまだ許されない。十一月一日、また玉堂(翰林院の建物)で宿直することになった。官署の門が鎖され、この夜は寒さが厳しかった。皇帝の御指示によって宮中の蠟燭と酒を頂戴した。そのことを書いて、翌朝、同院の者に示した」。

細かな霰がさらさらと玉堂ぎょくどうに降りかかる。

夜になってから文書を起草せよとのことで、

忙しく衣を付けて職務に励む。

御燭ぎょしょくの光を分けてくださったのは星が輝くばかり、

宮中から賜わった壺はよい香りを漂わせる。

酔って書くと目がちかちかして字が大きくなり、

仕事を終えても老人は眠ることができなくて、

時の流れが遅く感じられる。

いつしか人生の終わりの日々を暖かく過ごし、

灯火を掲げ、祭りの酒はまだ半分の楽しみを残していると、

さらに歓を尽くすようなことができるのだろうか。

■送周朝議守漢州

周表しゅうひょう臣しんという人が漢州かんしゅうの知事として赴任するのを見送った詩。漢州は蜀しよくに属する。

蜀しよくの地では、茶の取引きを巡って民衆はたびたび苦しめられてきた。

近年では李杞りきと李稷りしよくによって莫大な茶税を絞り取られたために、

人々はその忌まわしい名を記憶に刻み込んだ。

この状況を改めたのは、

周表臣、甥の周尹、張宗諤、呉師孟、呂陶、宋大章の六君子で、

貴君の家が最も力を尽くしたのだ。

ここに貴君は事に坐して都を出て漢州かんに行くことになった。

貴君は老齡に及んでも、剣を見つめる気迫をもって、

歳の暮れに風雪を犯して遠く旅に出る。

郷里に帰ることを思うのも時宜に敵っていないから、

自身を顧みてよく考えるのがよいだろう。

それでも、私が聞いているのは、漢州のあたりは種々の問題があるとか、

昔、七十歳きしゅうつひになった龔遂が地方に派遣されて著しい功績を挙げた例もある。

貴君も立派に職務を果たすなら、都に召し還そうとの詔が届き、

漢州の人々は還すまいと貴君の袖を引くであらう。

まだまだ都の高官として活躍して、

宮中の庭園の美を詩に歌うことになるのだろう。

(茶が広く飲まれるようになったのは、蘇軾自身の詩(第6章392ページ)にも詠まれていたように、唐代とうだい以降のことで、宋代そうだいに入ると茶は生活必需品となり、国はそれを国家の専売品にして多額の税金を得ようとした。国が増税を図れば民衆の負担が増え、一方で闇取り引きが盛んになって違法集団が跋扈する。蜀は茶の産地で、専売制度はしばしば紛争の種となった。この詩はそのことを踏まえて詠んでいる。李杞と李稷は新法党りき りしよくの人で、税金の増加に努め、民衆を苦しめた。その政策を、保守派の「六君主」が是正に努めたのであるが、そうした功績がありながら、周表臣は左遷されてしまったのであ

る。「六君子」のうち呂陶の名は蜀党の一員として本章 106 ページなどで見ている)

■木山

この詩には短い序文がある。

吾が父はかつて三つの峰を持つ「木山」^{ぼくざん}を蓄えていた。父はそれについて文章を書き、また詩を詠んだ。すると、梅堯臣^{ばいぎょうしん}がその詩を見て詩を詠んだ。それから三十年を経て、甥の蘇千乗^{そせんじょう}が五つの峰のある「木山」を得たので、ますます面白いことになった。そこで、梅堯臣の詩に次韻して、「木山」のかたわらに刻むことにした。

((1) 「木山」^{ぼくざん}は山のような形をした枯れた木。この序文にある父の文章を蘇軾の詩の前に見ておこう。(2) 蘇千乗^{そせんじょう}は蘇軾の従兄の蘇不欺^{そふぎ}の長男で、三男の蘇千能^{そせんのう}とともにこのころに都にきていた。先に蘇不欺の次男の蘇千之^{そせんし}も都にきていた(本章 40 ページ)ので、兄弟には何かしら懸案事項があったのだろう)

蘇洵^{そじゆん}「木仮山^{ぼくかざん}の記」

木となって生まれても、不幸にして、ひこばえのままで終わってしまうのもあれば、人の腕ぐらいになったところで枯れてしまうこともある。幸いにも家の棟木^{むなぎ}になるくらいにまで成長したところで、人の手で伐られてしまうこともある。あるいは、不幸にして、風に倒され、水に流されるのもあり、そして碎けて腐ってしまうのもあれば、幸いにも碎かれ腐ることから免れても、人に拾われ、木材として使うために斧で伐られ、鋸で切られてしまうものもある。最も幸いなのは、

浅瀬に流れ着いて砂の下に埋もれ、何百年か後になって、好事家に掘り出され、その形が山に似ているとかで愛玩され、斧や鋸で傷付けられずすむものであろう。そのようなものでも、遠い辺鄙な地にあったのでは、好事家の目に触れる機会はなく、結局は薪にされてしまうであろう。最も幸いなものになりかけて、不幸なものになってしまうのである。

我が家には三つの峰を持った木仮山がある。それを見るたびに、運命とはいかなるものであるかを私は疑わずにはいられない。この木は生まれて、ひこばえのままに終わってしまうとはなく、人の腕ほどで枯れてしまうこともなく、家の棟木になるくらいまで成長して伐られてしまうこともなく、風に倒され水に流されてからも碎かれて腐ることもなく、木材として使うために斧で伐られ鋸で切られることもなく、浅瀬に流れ着いて砂の下に埋もれ後に薪にされてしまうこともなく、こうして我が家に来たのである。こうなったのは、単なる偶然ではなく何か理由があるのではないだろうか。

私がこの木仮山を愛するのはただ形が山に似るからだけではない。運命の玄妙さを感じるところがあるからだ。そしてただ愛するだけではなく、この木を敬う気持ちもある。

三つの峰の中央は、大きく険しく、まことに重々しく、左右の峰を従えるような勢いがある。左右の二つの峰は、中央の峰に勢いでは服しているように見えても、鋭く威厳のあるありさまは、犯すべからざるものがある。二つ峰には決して中央の峰におもねる気持ちはない。そのようであるから、三つの峰からなるこの山を敬い、感じるところがあるのだ。

(三つの峰とは、容易に推測できるように、蘇洵、蘇軾、蘇轍を象徴するものである。

蘇洵は人に知れないままに空しく薪として焼かれてしまうことを厭い、独学で一代の文章家になったのである)

木が生まれて願うのは、
有用な材として伐り出され、一万頭の牛に曳かれて運ばれて行くことではない。
天寿を全うして沙洲に倒れ伏すことである、
幸いにもその時がきて、
河の神が活躍する秋に巡り逢う——
神は大木を見て勇むけれど、押す流すことができない、
そのまま、木には、幾年もの風雪によって嶺の形が巧みに彫り出され、
竜や蟻の働きによって、豪快な姿が作り出される。
大胆にもそれを持ち出そうとする者がいる……
物好きの者を阻止することはできず、河の神でも咎めようがない。
かくてこの木山もくざんがある。
そうだ、我が故郷の町には、地の底に達する古い沼がある。
その傍らの竹林こそが我が隠棲の地だ。
二頃けいばかりの良い田を買うのは難しくないだろうし、
檀はんのきを植えれば三年で薪が得られるようになるだろう。
そこで私はこの五つの峰と向き合うのだ。
きっと郷里の人々は私が隣に住むのを嫌わなくてくれるだろう。

■送千乗千能両侄還郷

上の詩に見た、蘇千乗^{そ せんじょう}、蘇千能^{そ せんのう}の2人の甥が郷里に帰るのを見送った詩。

この詩と前の文章から、2人は都に来たものの、その目的を果たせずに帰郷しなければならなかったと推測できるだろう。

(本章41ページで見たように、蘇不欺^{そ せんし}の次男の蘇千之^{そ せんし}が2年前に都に来ていた。いずれも蘇軾兄弟を頼りつつ、何か期するところがあったのだろう)

治生^{ち せい}(人々を安らかに治める道)は富を求めるためにあるのではない、

読書(治生のための学問)は官職を求めるためにあるのではない。

譬えていうなら、(富も官職も得ないのは)酒を飲んでも酔わないようなもの、

陶然^{うっとり}としてあり余る遊びがあればそれでよいのだ。

諸君は龐徳公^{ほうとくこう}(三国時代の隠者)を知っているだろう——

白髪の老人になっても泥^{わたかま}の中で蟠っていたのは、

子孫を念う心がなかったからではない、

子孫に遺すべきは、地位でも富でもなく、

安らかさだけがあればよいと考えていたのだ。

龐徳公^{らくもんざん}を召し出そうと鹿門山を訪ねて公を拝した為政者もいたが、

公は自ら耕す暮らしを続け、己の節義を全うした。

諸君等は若くて多難、衣服には常に氷雪が降りかかる。

諸君等五人兄弟は志を一つにして、あたかも一人の人間であるかのよう、

孔子^{こうし}も難しいとした孝養を尽くし、
貧乏のなかでも母には鶏肉を煮て与え、自分たちは苜蓿^{うまごやし}を噛んでいる。
食^{しょく}というものは人を累^{わざら}わさずにはおかないもの、
屑肉のたった一切れにも苦勞をしてしまう。
かくて諸君は西から四千里の道をやって来て、
破れた着物をまとい、寒さにもへこたれるようなことは口にしない。
顔立ちは我が兄(從兄^{そふぎ}の蘇不敷)に似て、
心もまた同じように広く穏やかである。
諸君はいま私を置いて去ろうとしている……
歳の暮れに苦い思いが残る。
私は決して都の高い地位にあるべき人間ではない、
青雲の志はすでに昔のことになってしまった。
故郷に帰ったなら、松と菊を植えるがよい、
そのまわりに青い竹を廻らせるとよい、
檀^{はんのき}は三年で大きな樹陰をつくるというから、
その下に私が帰ったときに冠を掛けられるようにしてくれたまえ。
我が町には清らかな川の流れが入り込み、
小川のせせらぎとなって我が小園も潤してくれる。
ともに粗末な家に寄り集まり、
背中に日差しを浴びつつ、

都の暮らしが上辺だけのものであることを語り合おうではないか。

(最後の句の原文は「曝背談金鑾」(背を曝して金鑾を談ぜん)。金鑾は宮中の豪華な宮殿のことで、ここでは^{ほうとくこう}龐徳公が子孫に遺すべきとした「安らかさ」との対比で、外面は立派でもさして価値がないものとしているのだろう。2人の甥を慰めるためにそのような価値観を強調したにしても、蘇軾が都での暮らしに愛着を抱いた気配はどの詩文からも読み取ることはいできない(例えば、次に見る^{おうしん}王誥の大庭園を羨むような様子は全くない))

■題李伯時画趙景仁琴鶴図二首

^{しょうけいじん}趙景仁という風雅を愛する人物がいて^{せいけん}清献先生と呼ばれていた。琴と鶴と亀を愛し、任地に赴く際には必ずこの三者を携えた。ところが^{げんぼう}元豊年間^{しよく}に蜀に行くに際して、鶴は空に、亀は川に放ったという。それから何年か経ち、このころは^{りこうりん}清献先生は都にいたらしく、^{りこうりん}李公麟(本章103ページなど)が「清献先生と琴と鶴」の画を描いた。これはその画に蘇軾が添えた詩。2首のうち1首を訳す。

其の一

^{せいけん}清献先生は一銭の貯えもない、

琴も鶴も昔から家に伝わるものだった。

最高の音楽は、弦のない琴による音のない曲ととか。

仙宮では、それに合わせて幻仙げんせん(鶴)が舞うのである。

(1) 画であるから、これこそが無音の音楽であると洒落たのだろう。(2) このころ蘇軾りこうりんは李公麟の幾つかの画に詩を添えている。いずれも李公麟の画が表現する精神性をより深めようとしたのだろう、難解な詩が多い。(3) 李公麟はこの年、蘇軾ら17人が集まって遊ぶありさまを描いた「西園雅集図せいえんがしゅうず」を作っている。それについて米黻べいふつ(本章159ページなど)が記した文章があるので、一部を読んでおこう。西園おうしんは王詵の私邸の庭。王詵は皇帝の娘婿だけに堂々とした邸宅を構えていたのである。

米黻:「西園雅集図の記」

李公麟りこうりんはこの画では唐の小李將軍とうしやうり(李昭道りしやうどう)に倣って泉石に着色し、雲や草や木や花や竹が絶妙に描かれているありさまは人を感動させる。特に人物は秀抜で、その形をよく写し、自ずと林下の雰囲気を漂わせ、塵埃の汚れは一点もない。並みの筆では全くない。

黒い帽子を被り黄色い道服を着て筆を手にし何やら書いているのは蘇東坡先生そとうばである。

……(以下、王詵おうしんが座ってそれを眺め、蔡肇さいしやうが少し離れたところに立って眺め、李之儀りしぎが椅子にもたれて眺め、その後ろに王詵の家姫が控えている様子が叙述される)……。一本の松が葉を鬱蒼と繁

らせ、そこに凌霄花のうぜんかずらが絡んで、紅と緑が呼び合い、その下に大きな石の机があって、古い器や琴が並べられ、そのまわりに芭蕉がある。石の上に座って、道士の帽子を被り、紫の衣をつけ、右手は石にかけ、左手は巻軸を持って書を見ているのは蘇轍である。……(以

下に、黃庭堅こうていけん、李公麟りこうりん、晁補之ちやうほし、張耒ちやうらい、鄭嘉会ていがかい、秦觀しんかん、陳景元ちんけいげん、米黻べいふつ、王欽臣おうきんしん、円通大師えんつうだいし、劉涿りゅうたくの様子が叙述される)……。人間世界の清らかな楽しみでこれ以上のものはない。ああ、名利

の地にあわあわして退くことを知らない者は、この楽しみを果たして得られるのだろうか。蘇東坡以下の十六人は文章をもって議論し、博学で知識が深く、堂々の辞、立派な書、古を好んで多くを知り、雄豪さにおいて俗人を超え、卓然と高い境地にあって、名を四方に轟かすものである。後にこれを^ふ覧る者は、ただ画として見るのではなく、それぞれの人物に思いを馳せていただきたい。

(4) ここに挙げられている 17 人のうち、本章でその名をまだ見ていなかったのは、

鄭嘉会 (字は靖老)、陳景元 (字は碧虚)、王欽臣 (字は仲至)、円通大師、劉涇 (字は巨濟) である。陳景元は道士で、劉涇は画を得意とした。(5) 「西園雅集図」は蘇軾を中心とした文人の集まりを、極めて理想化して描いた画で、それを見て素直に感心してもよいのだが、蘇軾の政敵からしたら、「ケッ、いい気なものだ」と、唾でもひっかけてやりたくなったであろう。あるいは、17 人の仲間に入りたくても入れてもらえない人が嫉妬して、さらには憎悪するようなことにもなったであろう)

■書別子開

蘇軾と一緒に科挙に合格した同年の仲間に曾鞏^{そうきょう}がいたことは第 1 章 64 ページなどで見ているが、曾鞏はすでに亡くなり、28 歳下の異母弟^{そう}の曾肇 (字は子開) がいて、官界で活躍していた。蘇軾は 12 月 6 日に曾肇のもとを訪れてこの短文を記した。

曾肇は、黄河の様子を検分するために、これから河北に行く。冬至の一日前に辞

令を受け、冬至の後に出発する。私は冬至の賀節のお祝いをした後、別れを告げるために訪れ、数杯を重ね、頹然としてすっかり酔ってしまった。

机の上にこの佳よい紙があったので、草書を作り、数枚の紙にこのように記す。

これから北に行って帰ってくるなら春になっているだろう。そのときに、酒、蟹、山菜、桃、杏を私のために用意してくれるのなら、また公と一緒に飲みたいと思う。

■評詩人写物

三男の蘇そ過かのために、詩はどのように物を写すべきかを記した。

詩人には写物しゃぶつの功がある(物ありさまを的確に写し出すことを功績とする)。

『詩経しきやう』に、

桑之未落、(桑の葉が落ちる前)

其葉沃若。(それはつやつやと若い)

とある。他の木のほとんどはこのようではない。

林逋りんぼの「梅花」の詩にこうある。

疏影横斜水清浅、(まばらな影が横に斜めに映り、水の流れは浅い)

暗香浮动月黄昏。(ひっそりと香りが浮いて動く、月が出た黄昏時に)

これは、断じて桃や李すももの詩ではない。

皮日休ひじつしゅうの「白蓮」の詩にこうある。

無情有恨何人見、(情がないのか、恨みがあるのか、見る人は誰もいない)

月暁風清欲墮時。(ただ暁の月、清らかな風、そして花は落ちてしまう)

これは断じて紅い蓮の詩ではない。

せきえんねん

石延年の「紅梅」の詩にこうある。

認桃無綠葉、(桃かと思えば緑の葉がなく)

辨杏有青枝。(杏かと思えば青い枝がある)

これは実に下卑た語だ。村の学校の生徒の中ぐらいの出来である。

げんゆう

元祐三年十二月六日、書いて過に渡す。

『詩経』はいうまでもなく古典中の古典。林逋は宋の初めの人で、蘇軾はたびたびこの人を讃えている(第7章173ページなど)。皮日休は唐の終わりの人で、混乱する社会の実態を詠んだ詩もある。石延年は蘇軾の少し先輩で、ここに引かれている句はよほど気に入らなかったのだろう、第6章233ページでもやはりこけにしている)

■興竜節侍宴前一日微雪与子由同訪王定国小飲清虚堂定国出数詩皆佳而五言尤奇子由又言昔与孫巨源同過定国感念存没悲歎久之夜歸稍醒各賦一篇明日朝中以示定国也

長い詩題は次の通り。「興竜節(哲宗皇帝の誕生日、12月8日)の祝賀の宴の前日、雪がわずかに降った。弟と王鞏(字は定国)を訪ね、清虚堂で少し飲んだ。王鞏が数篇の詩を出し、どれもよかったが、特に五言詩が最高だった。弟がこのように言った。『以前に孫洙(字は巨源)と一緒に王鞏を訪ね、人の存没を語り合い、しばし悲しく嘆息した』。夜にな

って帰り、酒から醒めたところで弟とそれぞれ一篇の詩を賦し、明くる朝、王翬に示した」。王翬は揚州副知事に任命された(本章159ページ)ものの、実はまだ赴任していなかったようだ。

(この詩は一緒に飲んで楽しかったということ以上の内容はなく、気のおけない仲間内の飲み会を美辞麗句を駆使して詩にしてみせた、いわば戯れの作であろう。よってさらびやかな漢字の並びを見ていただくことを眼目として、大意を書き添える)

天風淅淅飛玉沙、(風に雪がさらさらと飛ぶ)

詔恩歸沐休早衙。(ありがたくも今日は早く帰るのを許された)

遙知清虛堂裏雪、(そうだ、清虚堂きせいきやうどうの雪景色はどうだろうか)

正似詹蔔林中花。(きつとクチナシの花が咲いたような感じだろう)

出門自笑無所詣、(ふらりと門を出て笑うのは、どこに行くあてもない)

呼酒持勸惟君家。(やはり君の家で一杯やるのがよいだろう)

踏冰凌兢戰疲馬、(氷を踏んで走るのは馬には迷惑なこと)

扣門剥啄驚寒鴉。(門をどンドン叩いて鳥を驚かせてしまう)

羨君五字入詩律、(うらやましいのは君の五言詩が巧みなこと)

欲与六出争天葩。(雪と美しさを競うほど)

頭風已倩撒手愈、(君の詩によって、脳天の病が癒え)

背癢恰得仙爪爬。(背中のかゆいところを仙女にかいてもらったかのようだ)

銀瓶瀉油浮蟻酒、(銀の瓶から極上の酒を注ぎ)

紫碗鋪粟盤竜茶。(紫の碗に極上の茶を入れる)

幅巾起作鴝鶒舞、(立って舞者もいれば)

暈鼓誰搥漁陽搗。(鼓を撃つ者もいる)

九衢燈火雜夢寐、(夢心地で都の灯火を見ながら帰ると)

十年聚散空咨嗟。(この十年のあれこれにため息をつく)

明朝握手殿門外、(ともあれ、明日の朝は門の外でまた会って)

共看銀闕噉朝霞。(宮殿に朝の霞がたたよのを一緒に見よう)

■書王定国所藏煙江疊嶂図

おうきょう あざな ていこく
王翬(字は定国)が所藏する「えんこうじょうしやうず煙江疊嶂図」(かわ けむ江が煙り、山が重なる図)に
書き添えた詩。

かわ
江のほとりで生じた愁いの心、

たちまち千の山のように重なり合い、

あるいは虚しく浮かぶ翠みどりとなって、

空へと積み上げられる、

それは山なのか雲なのか、

遠くから知ることができない。

煙る空が晴れ上がるなら、

山だけがもとのままに残り、

ここにくっきりと見えるのは、

あおぐら
蒼蒼く聳える二つの崖、

その間にぜつこく暗い絶谷がある。

鳥の道だけが通じる泉があり、

水は林を巡り、石に絡み、

見え隠れしながら下って谷の口へと赴き、

奔流する大河となる。

川が平らになるところ、

山が開けて林の裾野が終わり、

小さな橋がかかり、野の店がある。

旅行く人はゆるゆると木立の向こうに去り、

漁師の舟が一艘、

かわ
江に浮かんで天の涯へと流れゆく。

知事殿はどこからこの画を得たのだろうか、

一つの点、一本の線に至るまで清らかに美しい。

このようなところが人間世界のどこかにあるのか、

ただちに行って二頃けいの田を買いたいものだ。

そう、誰もが知っているように、

ぶしょう ほんこう
武昌の樊口は幽絶のところ、

とうば
東坡先生はそこに留まること五年、

春は、風が水を揺らして長江は漠漠として天に連なり、

夏は、夕暮れ雲が雨を巻いて娟娟として山は煙り、

秋は、楓が赤く染まって鴉とともに翻って、東坡先生は水の上に宿り、

冬は、高い松から雪が落ちて、東坡先生は昼寝から目覚めるのだった。

桃源郷は実は人間世界にあって、

神仙の住むところだけにあるとは限らない。

江山は我が内なる塵土を清らかにしてくれ、

世間に戻る路があってもそれを尋ねてはならない。

この画を還そうとして私は三度嘆息する、

ああ、山中の人よ、

私に帰ってくるよう招く詩を詠んではくれまいか。

((1) 詩の中ほどで「知事殿(王鞏)はどこからこの画を得たのか」といっているが、この画は次の詩にある通り王詵が描いたものである。(2) 詩の後半は黄州の日々を回顧し、どうして都に出てきたのか悔やんでいるかのような趣がある。第7章で見た「小児のようにぐずぐずしていた」のは故あることだったのだ。(3) 王詵が描いたこの「煙江疊 嶂図」は現在に至るまで伝えられ、上海博物館の所蔵品となっている)

■王晋卿作煙江疊嶂図僕賦詩十四韻晋卿和之語特奇麗因復次韻不独紀其詩画之美亦為道其出处契闊之故而終之以不忘在莒之戒亦朋友忠愛之義也

上に続いて同じ画についての詩。その題は、「王詵(字は晋卿)は『煙江

暈嶂図』を作った。私が十四韻の詩を賦したところ、王詵はそれに和した。特に美しい詩であったので、私はここにさらに次韻する。その詩は王詵の詩画の美をしろ紀すものではなく、王詵がその出処において長く苦勞してきたことをいうものである。最後に『きよ あ苜に在るの戒め』を添えるのは友人としての忠愛の心である」。

(この詩の終わりには、詩題にある通りの「きよ あ苜に在るの戒め」を詠み込んでいるのだが、二つの故事を用いていてかなりわかりにくいので、ここでは故事について解説することなく意味だけを汲んで訳す)

山の中で頭を挙げ、日の注ぐ涯を見る——

長安(都)は見えず、

うすぼんやりとした雲があるだけ。

長安(都)に帰って山の上を望む——

時は移り、事は改まり、

涙をこらえきれない……

かつてここで聞かれた管弦の曲はもはやなく、

集まっていた大勢の客人は去ったまま、

豪華な作りの馬小屋だけがそのままにある。

一日千里を走る俊足の馬は、

風雪を好み山川の陰しさを軽んじ、

ここで身を縮めて贅沢な餌を食らうのはまっぴらだと、
十年の間、戦の旗の前を駆け巡り、
痩せたことでかえって堂々の骨格が現れ出たのだった。
貴君が経験した苦難はむしろ天の与えるものだった。
貴君の風流文采ふうりゅうぶんさいは磨れば磨るほど尽きることがなく、
画と詩は互いに優美を争うに至った。
山を画くのは山中の人だけとは限らず、
田を歌う人は田を知る人ばかりではない。
唐の玄宗皇帝げんそう ていけんは鄭虔の三絶(詩、書、画)を讃えたが、
貴君はすでに二絶(詩、画)を得ていて、
筆の勢いからして三百年來の三絶となるであろう。
貴君は、巖谷げんこくの巖しさをもってなよなよとしたものを、
眉峰びほうの秀でるのもってきらきらとしたものを克服したのである。
人間世界にあるのはただ春の一つの夢、
この身は蚕が三度眠る間に老いてしまうのだ。
山中は幽絶の場であっても永くいることはできない、
平地の家にいる仙人となるのがよいだろう。
貴君は山中の水石すいせきを長く眼に留めておくことができ、
私の好むところのものを知っているから、
この画とこの詩がここにこうしてあるのだろう。

どうかこれからも山のことを終生忘れることなく、

画を描き、詩を賦して私を楽しませてほしい。

おうしん
 (王誥は蘇軾に連座して遠くに流され、苦難の日々を送った。それを経験したからこそいまがあるということ、王誥の詩画を讃えつつ、また戒めとしたのである。それはまた蘇軾自身にとっても同じであった。詩の途中に「苦難はむしろ天の与えるものだった」と訳した原文は「塩車之厄寧非天」(えんしゃ やく なん てん 塩車を載せた車を曳くような苦役を与えたのはきっと天の定めるところなのだ)とある。罪を得たことでいまの自分があることをむしろ幸いとするという考えを蘇軾は再三示している)

■ 論周種擅議配享自劾劄子

これは読んで少しも楽しくない公文書である。うん 鄆州の州学校の教授を務める周種しゅうとうという人物を、蘇軾は「蟣虱しらみのような小臣しょうしん」と罵倒し、断じて処罰することを朝廷に求めている。周種がどれほど悪いことをしたのかというと、しんそう 神宗皇帝の廟におうあんせき 王安石も一緒に祀ることを朝廷に検討するよう求めたのである。皇帝の廟に功臣を合わせて祀ることを配享はいきょうといい、死後に与えられる栄誉として極めて大きなものとされた。神宗皇帝と王安石の関係からして配享は自然なことであるように思えるのだが、このときの政治情勢からして、蘇軾は何としてでもそれを止めなければならぬと考えた。周種を弾劾する文章は2通あり、2通目は口調が一段と厳しくなる。

其の一

げんゆう かんりんがくしちようほうろちうせいこうけんじどく
 元祐三年十二月二十一日、翰林学士朝奉郎知制誥兼侍読の蘇軾が文書にて
 申し上げます。

わたし ちゆうしよしよじん こうねい うしりさんぐん しゆう
 臣が先に中書舍人を拝命しました日に、かつて江寧府の右司理参軍であった周
どう うん
 種は鄆州の州学校の教授になりましたが、近ごろ聞きますところでは、周種が上
おうあんせき しんそう ほいきゆう
 疏して、朝廷はもとの宰相である王安石を神宗皇帝に御廟に配享すべきであると
かんだい
 申し上げました。謹んで漢代の法律を按じますに、皇帝の廟についてやたらに議
こうそ けいてい ぶてい せんてい
 論をする者は死刑に処すとされていて、高祖皇帝から景帝、武帝、宣帝に至って
 もこの法が行われ、それによって宗廟を尊び、朝廷を重んじることが衰えることがな
 いよう防いだのであります。実に深い意味のある法律であります。本朝において
そ そう げんくん
 は祖宗以来、元勳にして天下の人々から重く仰がれ終始徳を全うした人だけが特
 に選ばれて、歴代皇帝とともに祀られてまいりました。それも天子が御自身で選ぶ
 のではなく、必ず衆議に委ねられ天下の公議が納得する人物でなければなりません
 でした。すでに選ばれたならば、詔に「うやや恭しくも公論に依る」との旨が記され、
 宗廟にそのことを申し上げ、その後で配享が実施されたのであります。このようにし
 て厳正に行われてきたものであるのに、朝廷から遠くにあつて地位の低い小臣が
 私意をもって配享を議論するようなことがあつてよいものでありましようか。そのようなこ
 とをしても不問に付すならば、宗廟の威厳は損なわれ、朝廷は軽視されてしまつて
 ありましよう。

わたし

臣が思いますに、王安石が生前に何をしたかという、非を是とし、正を邪としたことは朝廷の中外の者が具さに知るところで、皇帝の眼からも逃れることのできないものであります。先帝もそのことをお知りになって、王安石を閑職に置き、終にまた用いることはなかったのであります。今すでに王安石の定めた青苗法せいびょうなどの法律は改められ、王安石の党人であった呂惠卿りょけいけい、李定等りていの連中は地位を奪われて遠く退けられ、学校や科挙の制度も改められ、仏教や道教を排斥したことをやめ、王安石が建てた恣意的な学説を禁止しました。このような大議はすでに確定し、数年にわたって実施されています。また、先帝に配享されるのは富弼ふひつであると定められ、天下の人々はそれが至当であると受け止めております。

敢えてここに議論を引き起こそうとした周穉とは何者でありましょうか。恐らくこれは朝廷を試し、おいおい邪説を進め、陰で群小の者どもが声を合わせるようにと企む者でありましょう。これは孔子も指摘したところの「危ういことを試して当たればもっけの幸い」「間違った考えに安住して疑わない」ということそのものであります。

わたし かたじけな

臣は忝くもお傍にお仕えて、このような誤ったことがあって、このような人物が学校を汚しておりますことを聞きました。もし、このことに知らん顔をして申し上げずにおきましたならば、悪たくみをする連中を好きにさせてしまって、大きな罪を臣が犯すこととなりましょう。謹んで臣の出過ぎた行為を自ら弾劾して罪を待つものであります。伏して聖慈を望み、特に赦して下さいますようお願いするものであります。

おうあんせき

(1) 蘇軾が問題にしたのは、実は王安石を配享するか否かではなく、その意見を容れた後に起こるであろう事態であった。そのことがこの文章ではあまり明確ではなかつ

たので、次の2通目を書くことになる。当時、保守派は三派に分かれてつまらぬ争いばかりをしていた。先に追放された改革派は、その間隙を縫って再び政権に返り咲くことを狙っていた。配享はその足場を得るための第一歩であると、蘇軾は察したのである。

(2) この文章で王安石は「非を是とし、邪を生とした」と全面的に批判している。先に王安石を高く評価していた(本章50ページ)のとは大きく異なっている。それぞれの文章の主旨に合わせて、ほとんど正反対の評価を王安石に対して下しているわけで、どちらが本心であるのかという検討はさほど意味がないだろう。ここではとにかく呂惠卿りよけいや李定りていが再び跋扈するのを阻止するために、大親分であった王安石を徹底的に悪く言う必要があったのだ)

其の二

元祐三年十二月二十一日、翰林学士朝奉郎知制誥兼侍読の蘇軾が文書にて申し上げます。

臣は近ごろ次のように申しあげました。学官に挙げられた周穉しゅうどうは王安石を先帝に配享すべきであるとの議論を勝手に起こし、朝廷を試して順次邪説を進め、陰で群小どもが声を合わせるようにしていることに対して、しかるべき部署においてこの妄挙の罪を調べ、重い処分を下し、もって世の中への警告とするようお願い出ました。しかるにいまに至るも何の御指示も下されておられません。

臣が考えますに、賞罰を明らかにし、邪正を定めることは国家の根本であります。この二つがなければ、国は乱れて亡びに向かいます。……(中略、古典を引いてこ

の論を補強する)……

臣が親ますところ、二聖(皇帝と高太皇太后)が位を嗣がれて以来、小人どもを追い
 払われました。呂惠卿、李定、蔡確、張城一、吳居厚、崔台符、楊汲、王孝先、
 何正臣、盧秉、蹇周輔、王子京、陸師閔、趙濟、それに宦官の李憲、宋用臣な
 どは、ある者は国境で戦を起こして次々に禍をもたらし、ある者は国家が利益を貪
 って収奪を厳しくしているとの民の怨みを招き、ある者は大獄を起こして善良の者を
 罪に陥れました。奸悪を働いた者はとても数えきれないほど大勢いたのでした。王
 安石は実はその首領であったのです。いまやそうした連中のうちすでに死んだ者の
 ほかは都から遠ざけられましたが、その腹心や手助けをした者はいまも朝廷の中
 外にいて、かつての私恩を思っただけでまた用いられることを願ひ、そのことを計画して何
 やらものを言う者がたくさんいます。いずれも実情を曲げ、悪事の跡を隠し、腹黒さ
 を一つにし、その仲間意識は堅いものがあります。しかし、お上がそのことを御存じ
 でないのを臣は実に憂うのであります。

君子は鳳のように集めるのが難しいとされています。鳳はわずかな異変の兆しがある
 だけで、すぐに飛び上がり、様子を見てから後にまた集います。まして追い払
 われたならもう集まることはありません。小人は蛆や蠅のように群がりやすいとされ
 ています。生臭いものがあるところに集まり、たちまちのうちに千匹、万匹になります。
 まして招き寄せたならいくらかでも集まってくるのです。朝廷はこのところ少はずつ先の
 連中に対する戒めを緩め、李憲、王安礼、蔡確が朝廷に願ひ出たことを許してお
 ります。崔台符、王孝先等は再び用いられようとし、楊汲もまた復位しようとしていま

す。呂恵卿はそのような情勢を見て、蘇州に住むことを願い出ています。これらの者は皆、民にとっての大賊で国を蝕む巨大な害虫です。連中の首領が復権したならば、この上ない幸いとするであります。罪の小さな者たちはすぐにも用いられることとなります。少しでも緩めたならば次第に大きく緩めることになるのです。呂恵卿、蔡確らが用いられるときには、青苗法、市易法などの法律も復活するであります。

そこまで申しますのは、李士京という邪佞な小人が愚か者ども集め、大臣に気づかれないように連絡し合って、運河を掘り、城壁を修理することを実行しようと企んでいます。これが行われたならば、次には茶磨の法を運用しようとするでしょう。それを観ると、呂恵卿、蔡確らが用いられて青苗法、市易法が復活することだあってありうと思わなければならないのであります。

唐の時代に盧杞が責められて宰相から降ろされたときに、しばしばそれを赦すことを言う者があり、徳宗皇帝は盧杞に一つの郡を与えようとした。朝廷の人々はそれを心配し、宰相の李勉、給事中の袁高、諫官の趙需、裴佖、宇文炫、盧景亮、張薦、それに常侍中の李泌等が死を覚悟して反対しました。盧杞が郡知事になったならば、それに留まらずに、また任用されて、一つの松明が原野を焼き払うようにして、天下を禍に陥れるもとなるのを恐れたのです。いま周穉が草ぐずのような微小な身でこの議を建てるのは、同じように禍のもとを開くものであります。

漢の時代に淮南王が謀反を起こしたときに、ただ汲黯だけを憚り、宰相の公孫弘さえ説き伏せれば、あとは簡単にうまくゆくと考えました。いま周穉が蠅虱のような小

臣の身をもって敢えて大奸をなすのは、朝廷にははかるべき人がいないと愚弄するものであって、不幸にして淮南王のような者がいたならば、何の憚るところもないということなのであります。

わたし臣は敢えて遠い昔のことを引きましたけれど、執政のうちに富弼ふひつや韓琦かんきのような人がいて、台諫たいけんのなかほうじょうに包拯りょかい、呂誨りょかいのような人がいて、あるいは司馬光しばこうがここにいましたならば、鼠ねずみのようなこの連中は何もできないはずでありました。王安石じんそうは仁宗皇帝にそう、英宗皇帝の御代ごだいにいかさまなことを百も言い、妄りに己の名を高めて、高い地位を得ようとしたが、韓琦が独りその奸を見抜き、ついに昇官させることはありませんでした。韓琦が宰相の位を去らなかつたならば、王安石はその志を得ることはなかつたのです。このことから人物の邪正を見抜いて、禍が現れる前に消すことが宰相の大事な仕事なのであります。

わたし臣はここ数日、執政の議論を聞きますに、処罰を緩めようとしているとのことで、もしもそうありますなら、小人が互いに朝廷へと引き上げ合うようになり、呂惠卿らは朝廷の判断のありようをそこから知るようになるでしょう。事は天下の行く末、国の治乱に及ぶことなのであります。

伏して望みますのは、特に御宸断を下されて、周穉の罪を厳しく議論して、軽々しく赦すことなきように。周穉はもとは州県の小吏として、その意はわずかでも昇進することにあっただけでしたが、いまたちまち狂ったように大きな議論を先頭に立って起こしたのは、必ず陰で何かを企んでいる者がいるからなのでしょう。そうでなくて周穉が敢えて己の分際を超えて天を揺るがすようなことをするはずがないのです。

もし臣わたしの申し上げることを聞いていただけないならば、再びならず幾度も論じるものであります。

(1) 途中に列挙されている呂惠卿りょけいけい以下の人物は改革派の主要な顔ぶれである。この中に章惇しょうてんの名がないことは注目に値するのかもしれない。章惇は他の連中とは違って、本来の改革の意義を知って国のためになる政治を行おうとしていたと蘇軾は認識していたのではないだろうか。(2) 蘇軾の他にも配享に反対する者があって周種しゅの議は却下され、周種しゅは鄆州の州学校教授の任を解かれた)

■夜直玉堂携李之儀端叔詩百余首讀至夜半書其後

翰林院かんりんいんの玉堂ぎょくどうに宿直するに当たって李之儀りしぎ（字は端叔あざな たんしゅく）の詩百余篇を携え、読んで夜半に至り、その後この短文を記した。李之儀の名は本章 18 ページなどですで見ている。

玉堂ぎょくどうは清浄な場所であるので眠るのは難しい。

かといって、王維おういが宿直の話し相手に孟浩然もうこうねんを呼んだようなことはできない。

それで貴君の好い詩を借りて永い夜を過ごすことにした。

佳よい個所に逢さんぜんうごとに、参禅するように深く味わう。

貴君の詩に導かれて生じた愁いは、硯いんに入って水を凍らせ、

貴君の詩に導かれて生じた喜びとれびは、燈とうに入って輝きを増す。

貴君の家の子供たちに言葉を寄せよう、

いつか御父上の詩集を編むときにはこの句も入れてほしいものだ。

おうい (王維が宮中に宿直した夜にもうこうねん孟浩然を呼んで語り合ったという話は第7章62ページでも見ている)

■次韻劉貢父春日賜幡勝

この年は閏十二月があり、年の内に立春になった。りゅうはん あざな こうほ劉攽(字は貢父)が宮中から立春を祝う幡はたの飾りを賜ったことを詠んだ詩を作り、それに次韻した。劉攽は本章128ページなどでその名をすでに見ている。

(この詩は慶賀にふさわしい語句を並べ、原音で朗誦するなら、恐らく陶然とした味わいを得られるのだろうが、内容自体は乏しいので、読み下し文を添えるだけにします)

寛詔隨春出内朝、かんしやう はる したが ないちやう い(寛詔 春に随って内朝より出ず)

三軍喜氣挾狐貂。さんぐん きき こちやう じしほ(三軍の喜氣 狐貂を挾む)

鏤銀錯落翻斜月、ろうぎん さくらく しゃげつ ひるがえ(鏤銀 錯落として斜月に 翻り)

剪彩繽紛舞慶霄。せんさい ひんぶん けいしやう ま(剪彩 繽紛として慶霄に舞う)

臘雪強飛才到地、ろうせつ し と わず ち いた(臘雪 強いて飛んで才かに地に到り)

暁風偷轉不驚条。ぎやうふう ひそ てん えだ おどろ か さず(暁風 偷かに転じて条を驚かさず)

脱冠径醉忘帰臥、かんむり たつ ただ よ まさ き が(冠を脱して径ちに酔うて忘に帰臥すべし)

便腹従人笑老韶。べんぷく ひと ろうしやう わらう ま(便腹 人の老韶を笑うに従かす)

(1) 蘇軾の注で、この前日に小雪が降ったとあり、それで5句目に「臘雪」(12月の

雪)の語がある。また、この日に酒を賜ったこともあり、それで7句目に「ただ径ちに酔う」とある。(2) この詩に続いて、蘇軾はもう1回次韻し、さらにしょうきん おうきんしん葉均と王欽臣がもとの詩に和したのでそれに答えてまた和し、さらにもう1回和している。(3) 都で親交を深くした劉攽は翌年3月に亡くなる。蘇軾と劉攽とはともにジョーク諧諷を得意とすることで知られ、いくつものエピソードが伝えられている。そのうちの一つを、先にも見たしゅべん朱弁のきよくい きゆうぶん隨筆『きよくい きゆうぶん曲洧旧聞』から引用する。

りゅうはん蘇軾は劉攽に向かってこのようなことを言った。

「かつて弟とともにせい か制料の受験勉強をしていたときに、私たちは毎日『さんぱく三白』ばかりを食べ、これをはなはだうまいと思っておりました。世間に『はっちん八珍』(八種の珍味)とかいうものがあると聞いても、そんなものなんだという気でいたのです」

劉攽が、

「三白と何ですか」

と、尋ねると、

「一ふりの塩、一つかみの大根、一杯のご飯、これで『三白』であります」

劉攽は大いに笑った。

その後しばらくしてから劉攽は手紙で、

「しゅうはん晞飯を御馳走したいので拙宅にお越しいただきたい。」

と、蘇軾を招いた。

蘇軾は「三白」の話をしたことをすっかり忘れていて、

「『鼯飯』は何だかわからぬが、劉君はたくさんのお書物を読んでいるから、きっと何か出処があるのだろう」

と人に語って、劉放を訪ねた。

食事のときになって、食卓に並べられたのは塩と大根と飯だけだった。それを見てようやく「三白」を戯れに「鼯」と書いたのだと悟り、笑って箸を取り、全部平らげた。

蘇軾は馬に乗って帰る際に、

「明日、お越しくたされよ。『鼯飯』を御用意しておきましょう」

と言った。

劉放はきっと戯れであろうと思ったが、「鼯飯」とは何であるのかわからなかった(鼯は毛皮の意)。

劉放が約束通りに行くと、蘇軾はべらべらと話に夢中で、食事の時刻を過ぎてしまった。劉放は腹が減って仕方ないので、食事を求めた。

「少しお待ちください」

と言って、また話を続け、一向に食事は出てこなかった。

同じことが何度も繰り返されたので、劉放はどうも、

「もう腹が減ってどうにもなりません」

と悲鳴を上げた。

蘇軾がおもむろに言うには、

「塩も毛、大根も毛、飯も毛。三つ毛でありますぞ」

劉放は腹をかかえて笑い、

「君がこの前の仇かたきをきつととるだろうと思ってはいましたが、ここまでは考えが及びませんでした」

蘇軾はそこで食事を勧め、夕暮れまで楽しんだ。

世俗で「無」のことを「模」と言い、「模」と「毛」は音が通じる。それで「無」を「毛」とし、「三無」を「彘」としたのである。さすがの劉攽もここまでは考えが及ばなかったのだ。

この話は蘇軾が都にいたこの時期にあったと推測されている)

■和王晋卿送梅花次韻

げんゆう
元祐4 (1089) 年、蘇軾 54 歳。

おうしん あざな しんけい
王詵 (字は晋卿) から梅の花とそれに添えた詩が送られてきたので、その詩に次韻した。

とうば
東坡先生がまた都に帰ってくる前のときこう(黃州謫居のとき)、

東坡先生はみずからりんご すもも來禽と青李を植えた。

ちやうこう
長江沿いのその道に帰らずにいること五年、

夢は東の風を逐って飛び、

かわ
江の水草の上にふわりと浮かぶ……

誰のために咲いたのか、

かわ
江べりには梅、山には杏の花が開いている、

東坡先生は独り微笑み、

野の小川を眺めつつゆるゆると歩く。

ここの風物を貴君はまた識^しらない、

花の浪が天に翻って雪とぶつかり合うようなありさまを……。

来年はきっと私はまた江湖^{こうこ}にあることだろう、

そのとき貴君はなお都にいて梅の花に向かって三度嘆息するのだ。

(来年の春を都で迎えることないと、蘇軾はもはや願望としてではなく、確信していたのだろう)

■次韻王晋卿惠花栽栽所寓張退傅第中一首

王誥^{おうしん あざな しんけい} (字は晋卿) がまた花と詩を送ってくれたので、その詩に次韻した。

この詩題によると、花は張士遜^{ちやう し せん} (号は退傅^{たい ふ}) の旧居に植えられていたものであった。張士遜は宋の第二代から第四代の皇帝に仕えた重臣で、都に立派な屋敷を構えていた。

(この詩は禅語めいて、意味がなかなか捉えがたい。訳者なりの解釈を加えることなくほぼ直訳する)

坐来念念失前人、(座っていると、一念ごとに前の人は失われる)

共向空中寓一塵。^(くう) (前の人も我もともに空の中に向かい、一つの塵に寓する)

若問此花誰是主、^{あるじ} (この花に対して誰が主であるのかともし問うなら)

天教閑客管青春。(天は言おうか、閑な客人に春うららを管轄させるのだと)

■書王定国所蔵王晋卿画著色山二首

これも王誥（字は晋卿）に関わる詩。王鞏（字は定国）が所蔵する王誥の画に詩を添えた。それは着色した山の画であった。

其の一

白髪の四老人は、

かつて商山しょうざんにいた隠者なのだろうか。

貴君を煩わして紙の上から光が射して、

我が胸中の山を照らし出してくれる（それが画中の山）。

山の中には何があるのか、

老いた木、いかめしい土や岩、

天からの日光を受けて、溪谷がきらきらと輝く。

我が心から一切の物が無くなって空くうとなり、

言葉は何ら関係するところがない。

見るがよい、

ここにある古い井戸の水には万象が往還しているのだ。

（王誥の画には4人の人物が描かれていたのだろう。この詩の始めは、それを商山しょうざんに隠棲した漢代の有名に隠者に譬えたもの。この詩は全体として王誥の画と蘇軾の心象風景を重ね合わせて詠んでいる）

其の二

南方に流された貴君(王鞏)は、
嶺北に帰って初めて雪に逢うことができた。

私もまた江南において五回の春を見た。

この語を風流を解する王詵君に寄せよう、

三人はともに山を識る人である。

(岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳『蘇東坡詩集』(1927年)は、この詩の解説に「余論」として「若し今日此の画にこの讚あれば、希世の国宝なるべきも、それは要するに空想である」と記している)

■寄傲軒

李之儀(字は端叔)(本章253ページ)の弟子に韋許(字は深道)という人がいて、科挙を目指すことなく自由人として生きていた。その住まいである「寄傲軒」を詩に詠んだ。

韋先生は英妙の頃(若い盛りに)、

数多の筆を使いつぶし、千匹の兔を丸裸にしてしまった。

先生のあり余る才能からしたら、仕官の道などいうに足りないど、

試験場に足を踏み入れることをしなかった。

門に「傲」の字を掲げているのはなぜなのか、

俗人に対して傲るのではなく、我が名を傲るのである。

先生はきっと知っておられる、

高位に昇って栄誉を受けたところで、辱を償うものではないと。

人はそれぞれに自身を安んじる計がないわけではない、

しかし、「得」と「失」とは車輪が回転するようにぐるぐる入れ替わり、

「得」のときに、人は、顔に乙の字が浮かび上がった猛々しい虎のようになり、

「失」のときに、人は、手も足も首も尻尾も甲羅の内に引っ込めて怯える亀のようになる。

先生だけは、いつでも揚揚として、憂患によって汚されることはない。

住まうところなどは、我が身を寄せて、上を見て下を向けるだけの広さがあれば十分だとする。

私もまたかの東の坡では、小さな住まいにいて、

無限の春の内で、我が一寸の心に万物を収めていた。

先生も私も酔えば、傍らに人などいないように嘍い、

自身に向かって一樽の酒を勧める。

先生の枕の先は車馬が通る道、

月が木々の梢に傾ころ、

朝廷に臨む役人がざわざわと騒がしく先を急ぐのだが、

先生はちょうど眠りの真ただ中にある。

(1) 途中にある「東坡無辺春、方寸尽蔵蓄」(東坡 無辺の春、方寸 尽く蔵蓄す)

は、かつて「赤壁の賦」(第6章308ページ)で示した哲学を要約したものである。(2)
 旧い中国では官庁の朝は早く、官員は暗いうちに出勤した。なお、宋の都は夜通し賑わ
 う場所もあり、また夜明け前から商売を始める者も大勢いた)

■送呂昌朝知嘉州

呂昌朝が嘉州の知事として赴任するのを見送った詩。呂昌朝については
 元祐年間に嘉州知事となって、「清雅にして操行あり」ということだけが
 伝えられている。

呂昌朝は蜀の人であったようで、嘉州が蜀の地(第1章2ページ)であることから、
 この詩の後半は、呂昌朝が帰郷するとして詠んでいる)

貴君は、夢に三本の刀を見て大都市の知事になった昔の人を羨んだりしない。

古の文人の後を継いで、かの地の八景を詠もうとしているのだ。

貴君を勅命で嘉州に遣わすのは、

詩人に町の下にある名月湖を見おろさせるためであり、

古い仏を収める凌雲閣を臥したまま見上げさせるためである。

故郷に帰ることを思うのは土地の名産の味にひかれてのことではなく、

蜀の人が描いた名画「竹鶴の図」の縁によって句を得るためである。

空に横たわる故郷の山は変わらぬ色を湛えているけれど、

貴君は白髪となってもなお知事として活躍すべき人なのである。

(1) 詩の後半は、このまま故郷に隠棲してしまおうのではなく、呂昌朝りよしょうちやうにはまだまだ
 官員として働く場があるはずだといっているのである。(2) この詩は幾つもの故事を踏
 まえて詠んでいる。ここでは大意を汲んで訳したのだが、三点だけ説明を加えておく。

「三本の刀を夢に見て」というのは、晋しんの時代の話で、ある人が、天井から三本の刀が
 ぶらさがっているその下で寝ている夢を見た。すると、さらにもう一本刀が増えた。そ
 の人は縁起の悪い夢だと感じたのだが、夢判断をする人が、「三刀とは州の字に当たり、
 さらに一本益ましたのだから、夢は益州えきしゅう知事になるという吉兆である」と占い、実際にそ
 の通りになった。益州えきしゅうはやはり蜀しよくの地で、嘉州かより大都市である。「土地の名産の味」
 とは、やはり晋の時代の話で、都みやこにいて秋風がふくころに故郷の旬の魚の味を思い出し、
 ただちに官職を棄てて帰郷した人がいた。「竹鶴ちくかくの図」とあるのは、呂昌朝は画の収集
 家で、その中に蜀人の画いたその画があったのである)

■次韻黃魯直寄題郭明父府推潁州西齋二首

郭明父かくめいほという潁州えいしゅうで官職にある者がいた。郭明父の住まう西齋せいさいに黃庭堅こうていけん
 (字は魯直)が詩を寄せ、蘇軾が次韻した。2首のうち1首を訳す。

其の一

樹きの上で鳥がいつも啄啄と叩く、
 客人が来たのとまぎらわしく、
 返事などしないしていると、

客人は帰ってしまった。

主人は来客を嫌っているのではない、

真の友が訪れるなら、

友が乗ってきた車輪を井戸に投げて帰れないようにし、

衣を解いて自ら料理の腕をふるうのである。

詩とか酒とかいうものはとかく身を汚すも、

文章など去ってしまうならまことの賢人となるのかも知れない。

遠からず西湖に我らの白髪が映えることになるであろう、

小さな舟を水中の天に浮かべるのである。

(^{えい}穎州に風光明媚な西湖がある。^{せいこ}穎州は^{おうようしゆう}歐陽脩が最後に住んだところで、かつて^{こう}杭州に赴任する前に蘇軾は穎州を訪れ、^{せいと}蘇軾とともに西湖に浮かんだことを第3章 116ページで見ている)

■書李伯時山莊図後

3月16日、蘇軾に^{こう}杭州知事に任命するとの辞令が下った。それを聞いて蘇軾の心は躍ったに違いない。地方官として外に出ること蘇軾はずっと願っていて、しかも場所が杭州ならこれ以上に望むべきことはない。^{こうたい}高太皇太后が蘇軾の意を汲んで定めたことだと推測されている。蘇軾が^{こうたい}州知事として赴任する都市としてどこが最もよいかといえば、故郷の^{せいと}成都が第一に挙げられるだろう。しかし、蘇軾は^{しよく}蜀党の領袖であるとして政敵

から嫌われている状況下で、蜀の中心都市に蘇軾を置くわけにはいかない。だとしたら、第二の選択は、江南最大の都市で、蘇軾にはすでに馴染みの杭州ということになる。このあと蘇軾を都に引き留めようとする動きもあって、実際に都を発ったのは4月終わりで、それまでの間に記した3篇の文章を見ておこう。

これは画師の李公麟（字は伯時）が描いた「山荘図」に添えた短文。李公麟は故郷の舒州にある竜眠山に籠って勉強していたことがあり、竜眠居士と号していた。「山荘図」は竜眠山の山荘を描いている。その画に添えて弟の蘇轍が20首の詩を作っている。その詩の序文を最初に見ておこう。

蘇轍：「題李公麟山荘図」

李公麟が「竜眠の山荘の図」を作った。建徳館から垂雲汭まで、描き著したところは十六箇所、西から東およそ数里にわたる。岩嶒が隠れ見えし、そこここに泉の源があって、山を行く者の路はそこに窮まる。道を南の溪山に取ると、山と谷が清く深く向かい合い、遊ぶべきところが四箇所ある。勝金巖、宝華巖、陳彭際、鶴源である。それらは簡単には見られないので、特に後ろに描いている。兄がすでにこの画の記を作り、私に小詩二十首を賦すよう言った。王維が輞川荘について詠んだ作を継ごうとするものである。

（蘇轍のこの序文と詩は、「山荘図」について具体的に叙述している。以下に見る短文は、それとは対照的に蘇軾の芸術観を語っている）

ある人はこのように言う。

「リョウミン コジ竜眠居士の『山莊図』を見て、その後で山に入るなら、その者は足にまかせて行くだけで、自ずと道がわかるようになる。あたかも、かつて夢に見たところにまたきていると感じたり、前世にもここにきたと悟ったりするのと同じようになるのだ。山中で見る泉、石、草、木は問うまでもなくその名を知っていて、山中に遭う漁師、樵、隠逸の者は名乗らずともその人を識っている。これは、竜眠居士が記憶力に非常に優れ、一切を忘れることなく画き尽くしたからであろう」

私はそれに対してこのように言う。

「そうではない。太陽を画いているはずなのに、これは丸餅を画いたのではないかと疑ってしまうようなことがよくある。それは太陽を忘れてしまって画いたからなのだろうか。酔って何もかも忘れてしまっても、鼻から酒を飲もうとはしない。夢の中であつても、足の指で物を掴もうとはしない。天のはたらき機と合致していることは、強いて記憶しようとしてできるようになるわけではない。竜眠居士が山にあるときには、何かしら一つのものだけに心を留めることがない。だから、その精神は万物と交流し、その智慧は百のたみ工と通じる。それだけではない。一方に道みち(真理)があり、一方に芸(技能)がある。道を会得していても、芸が備わっていなければ、心の内では物の形がわかっている、それを手で画き表すことはできない。私はかつて竜眠居士が描いた『け こんきょう華嚴経』の図を見た。かんがえどれも自分の意でもって造っていて、しかも仏の教えと合致していた。仏が言葉で言ったものを、竜眠居士が画に画いたのであって、まる

で仏と竜眠居士が一人で言いかつ画いているかのようであった。まして、この画は竜眠居士自身が見たところのものを画いたのである」

■跋邢敦夫南征賦

けいきよじつ あざな とん ふ
邢居実（字は敦夫）という青年が二十歳になるかならないかで亡くなった。邢居実が14歳のときに蘇軾はその詩を読んで期待を寄せていたのだが、思いがけない事件で若くして命を落としたのだった。これはそのことを悼む短文。

けいきよじつ
邢居実は童子のころから、数多くの優れた人々との交流があった。邢居実の志は文学で賞賛を得ようとするだけのものではなかった。邢居実の姿を一日見ないと思っていたら、草木が枯れるように亡くなってしまった。こうていけん ちやうほし黄庭堅も晁補之も皆が泣き、なんせいふ長く哀しみにひたった。いま邢居実の作ったこの「南征賦」を見て、少しばかり慰められる気がする。

こうなん りこう
かつて江南で李覲に会ったときに、李覲は自身の文を教えてくれた。そこにこのようであった。

「天は私にどれほどの寿命を与えてくれたのか。それでは足りないということがあろうか。いにしよ古の人の手を借りるなら、足りないことはないのだ」

私は邢居実もまたこうであったと思いたい。

げんゆう
元祐四年四月十六日。

■范文正公文集叙

蘇軾は都にいる最後の日々に范仲淹（諡は文正）の文集を編み、その序文を記した。かねてから范仲淹の子の范純仁に頼まれていて、杭州に向けて出発する直前に仕上げたのである。范純仁は范仲淹の次男で、本章193ページで宰相に任命されたのを見ている。本章10ページで登場した范純粋はその弟。

（この訳文は第1章42ページにすでに掲げた。そのときは蘇軾の少年時代を知る恰好の資料として見たのだが、范仲淹が生涯の課題とした国政の大改革に着手したものの、すぐに頓挫して地方官として出ていかなければならなかった年齢（56歳）に蘇軾が近づいたときに、どのように范仲淹を見ていたのかということを知る意味で、もう一度ここで読んでおきたい。范仲淹の改革が失敗した原因は幾つがあるが、改革を実行する手段を十分に整えておかなかったことが大きく、その点で数々の新法を準備した王安石は用意周到であった。范仲淹による改革がもしも当初の目的を達成していたなら、むしろ王安石による改革は行われなかった）

慶暦三(1043)年のこと、私は八歳で土地の学校に入った。間もなく、ある文士が都から石介の作った「慶暦聖徳の詩」を携えてやってきた。学校の先生がそれを読んでいるのを私は横からのぞき見た。

それが現在特に優れる十一人を讃える詩であると聞いて、「どのような方々なので

しょうか」と私は先生に尋ねた。

「君のような子どもにはまだわかるまい」と先生は言った。

「それが天の上の人であるのならわからないということもあるでしょう。でも、同じ地上の人であるのならわからないことはないはずです」。

私の返答に先生は驚き、その詩を読んでくれた。そして、「このなかでも韓琦、范仲淹、富弼、欧陽脩の四人は人傑である」と言った。

このときはまだきちんと理解できたわけではなかったが、四人の名ははっきりと記憶に刻まれた。

二十二歳のときに都に行くと、范仲淹はすでに亡くなっていて、欧陽脩が記した墓誌を読み、「その人のあることを知って十五年、しかし、ついにお顔を見るのがかなわなかったのは運命なのだろうか」と嘆き悲しんだ。私は科挙に合格し、初めて欧陽脩に会うことができ、その紹介で韓琦とも富弼とも会えた。三人は口を揃えて「残念なのは君が范仲淹に会えなかったことだ」と私に言った。

それから三年後に私は許州で范仲淹の次男の范純仁に会い、また六年後に都でその弟の范純礼に会い、さらに十一年後に末の弟の范純粹と同僚になった。皆と会ってすぐに旧知の仲のようになった。私は范兄弟から父上の遺稿を託され、文集を編集して、それに序文を添えてほしいと頼まれた。それから十三年が経っていまようやくその約束を果たせるに至った。

范仲淹の功績と徳は、その文章があって初めて世に知れるのではない。その文章は、序文があって初めて世に遺されるのではない。それでも文集を編集し序文を記

すのをあえて辞退しないのは、八歳で范仲淹を敬うことを知って四十七年になり、他の三傑とは交わりを結ぶことができたのに、范仲淹一人とは知り合えずにいたのを平生の恨みとし、その人の書いた文章の脇に我が名を掲げることでその人の門下生の最後の一人であるかのようになれるのならば、ついに願いを叶えたのに近かるうかと思うからだ。

古の立派な人々が天下のために貢献した事績を見ると、それを為しとげた基本的な姿勢は、国に仕えてから学んで得たものではなく、庶民のなかで暮らしていたときからすでに身に備わっていたものであった。漢の劉邦が天下を平定するのを助けた韓信は、劉邦と会った最初のときすでに遠い見通しを持っていたし、諸葛孔明も草庵に尋ねてきた蜀の劉備と初めて会ったときすぐに何をすべきかを語り、終生それを貫いた。人に尋ね、聞いたことを試してみ、成功したらよしとするようなことではなかったのである。

范仲淹は母上が亡くなって喪に服していた間に、天下のありさまを見て、いかにして民衆に泰平をもたらすかをつらつら考え、一万字に及ぶ文章を書いて時の宰相に送った。天下の人々はその文章を読んだ。後に范仲淹が国政の改革に取り組んで副宰相にまでなっていたこと、あるいは平生に為したところのものは、皆この文章に記されていた通りであった。

范仲淹の遺稿二十巻をここに編み、詩賦は二百六十八、文章は百六十五に及ぶ。これらを見れば、范仲淹が仁義礼楽忠信孝悌を思うのは、飢えて食するのを思い、渴いて飲むのを思うのと同じで、片時も忘れようとしてもできなかったことであ

ったというのがわかる。その心は火のように熱く、その情は水のように潤い、天性からしてそのようであった。慰めに、あるいは戯れに、もしくは瞬時に作った詩文であっても、その天性から出たものであるから、天下の人々はその真心に打たれ、争って師として尊ぶのである。

孔子は「徳ある者には必ずしかるべき言葉がある」と言った。それはしかるべき言葉が初めにあってその人の口から出てくるのではない。徳のある人の口が発するからしかるべき言葉となるのである。また『礼記』には「私は戦えば必ず勝つし、子孫が私を祭るなら福を受けるだろう」とある。これは戦いの能力について言ったのではない。礼に基づき、徳をもって戦うなら、必ず勝つことを言ったのである。范仲淹は戦う人生であったが、その怒りは徳から現れたものであった。

げんゆう
元祐四年四月二十一日。

(第1章に掲げた訳文では、最後の『礼記』云々の部分は省略した。そのときは残念ながらこの部分の意味を読み取ることができなかったからだ。今回は原文に多くの言葉を補ってこのように訳してみた。蘇軾は都において批判の嵐にさらされたが、批判を口にする人々の怒りには、はんちゆうえん 范仲淹と違って、そのおおもとにおいて徳がないと感じていたのだろう)